ミミック・コミュニケーション

ごぼふ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミミック・コミュニケーション

【Ｎコード】
Ｎ８７０７Ｚ

【作者名】
ごぼふ

【あらすじ】
密やかに連続失踪事件が起こる街、咲珠市。
その事件の背後には、人の皮を被った化け物の存在があった。

一方同じ咲珠市に住む立島大輔には、双子の姉にも言えない大きな秘密があり……。
※自ＨＰで掲載したものを、加筆修正したものです。

皮

私、平井正美が家路についたのは、二十一時を回ってからの事だった。

家から一時間の場所になかった物を、更に一時間移動して探せば帰宅に二時間かかる。

簡単な理屈。しかし必死だった行きの私がそれに気づいたのは、帰りの私になってからだった。つまりそんなものは存在しないって事で、ちょっと哲学的だと思う。

しかし今、後悔している私はいない。

目的の物は手に入った。そう考えて紙袋の中を覗く。これを渡せば、弟も機嫌を直すだろう。

もちろんだけど、周囲はすっかり暗くなっていた。

私の家に近道で帰るには、人通りの無い路地を通らなければならず、心細い事この上ない。

こんな事なら弟に迎えを頼めば良かった。件の路地に入りながら私は考える。

「アレ？」

そんな中、私がふと気づくと、道の真ん中に人が座り込んでいた。辺りは暗く、私に背を向けている為よく分からないけれど、多分女の人だ。

「あの、大丈夫ですか？」

怪しい。そう思う前に、私はその人に声をかけていた。目的を遂げて気を抜いていたのもある。

でもそれ以前に、肩を振るわせるその人が本当に辛そうだったのだ。

「痛いぃ。痛ぃのぉ」

背を向けたまま、その人は搾り出すように言った。

「痛いって、どこがですか？　救急車を呼びましょうか？」

紙袋を地面に置いて私が問いかけると、女の人は後ろを向いたまま手に持った物を私に差し出す。

差し出されたそれは最初、ゴム手袋のように見えた。

肌色で、でろんとしていて、薄っぺらい。

しかしそれにいくつか穴が開いていること。そして中でも一番大きな穴の周りに赤いラインが引いてあるのを確認し、私は息を飲んだ。

これは、口紅だ。そしてこの穴は、口。その上にはべちゃんこにつぶれた鼻があり、両脇にはまつげのついた眼孔が開いている。

まるで騙し絵のように、一つ正解が分かった途端それぞれのパーツに説明がつく。

つまり、そう、これは、人間の顔の皮だ。

「あ、あ……」

声が出ない。頭の中では作り物だ作り物だと、常識が高速でアラートを鳴らし続ける。

しかし目の前にある、まるで叫びを上げているような顔面の皮のリアルさが、その常識をいつも簡単に押しつぶそうとする。

その恐怖に押し出されるように、私の常識が、落ち着こう、冷静になろうとして当然の帰結をしようとした。

痛いだなんて言っているけれど、これが、この人の顔の皮なんかな訳はない。だってこれがこの人の顔の皮だとしたら、本人の顔はどうなってしまっているのか。

その問いに答えるように、蹲っていた女の人がゆっくりとこちらを向く。

きっと、ただの悪戯だ。そうだ、そうに違いない。そうであって。

最後には祈るような気持ちになって、私はその人の顔を見た。

見ようとした。

その瞬間、私の視界は赤黒い、蠢く肉塊に覆われていて。

バクン、ゴリ、グシャグシャ。

私、平井正美の人生は、あっけなく終わった。

立島大輔と双子の姉

ピピピピ。　ピピピピ。　ピピピピピピピピピピ！

携帯のアラームが鳴り響き、俺は意識を覚醒させた。

手探りで携帯を探し当て、アラームを止める。そうしてあと五分と定番の要求をする脳を強引にねじ伏せ、上半身を起こした。

俺が寝過ごしても、それを再度起こしてくれる可愛い幼馴染などはいないのだ。

――などと半覚醒の頭で考えている内に、喉がひどく乾いていることに気づく。

余程大口を開いて寝ていたらしい。俺は口の中にある僅かな水分をかき集め、飲み込んだ。

喉の奥には嫌なネバつきがあり、それは唾液では流しきれない。

俺は視線を移すと、ベッド脇の引き出しの上に置かれた鏡で自らの顔を確かめた。

ぺたぺたと顔を触りながら、頭の体操を兼ねた自己紹介を脳内で行う。

俺の名は立島大輔。もはやお馴染みのギャグにすらなっているセリフであるが、お約束として言っておこう。

ただの、高校生である。

『咲珠市周辺では現在、行方不明者が続出しており、警察は住民に注意を呼びかけると共に、行方不明者の捜索を行っております。お心当たりのある方はご覧の宛先まで……』

眠い頭でぼんやりとニュースの音を聞きながら、一階に降りる。

するとそこでは、ピンク色のパジャマを着た少女が朝食を準備していた。

「おはよ、大輔」

彼女は俺に、『活力が有り余ってます！』とアピールするような無駄に華やかな笑顔を向ける。
「あふぁ、おはよー綾菜」
俺とは違い、はっきりと起きているようだ。
俺の返事に頷いた少女は、テレビのチャンネルを変えると、ラップを剥がす作業に戻った。
彼女の名は立島綾菜。俺と同い年の姉。つまりは双子の姉である。
そもそも双子で姉か弟かなんて意味が無いとは思うのだが、そう決まっているのだから仕方ない。
未だに納得はしていないが。
「ほら、箸とって大輔」
「へいへい」
言われた通りに箸を二人分机に並べ、椅子に座る。
すると同じ顔が同じように対面に座り、俺達は同時にいただきますと言った。
男女ペアの双子というのは、普通二卵性である。俺達もその例に漏れないのだが、俺達の顔は妙に似ていた。
顔だけではない。靴のサイズも一緒だし、俺のほうが脚が短いという事もない。
ついでに身長も一緒……１６５ｃｍ。
似るなら似るで、男子の平均身長の方に俺が近づいてから、こいつがぐんぐん伸びればよかったのにと俺が考えていると。
「何、人のカラダじろじろ見て」
「首から上までは認めるが、その下の貧相なものまで視界に収めたつもりは無ぇ」
綾菜が半眼でこちらを睨んでいた。ひどい誤解だ。同じような顔で睨み返してやる。
顔についても身長と同様だ。こいつが男らしい顔つきということはないし、俺がこいつに似ているというのが、屈辱的な事実なのか

も知れない。
　が、こいつの胸も男の俺によく似ているのだから、そこはイーブンといった所だろう。
「やっぱり人の肢体を舐めるように見てるね大輔。　お母さんとお父さんいないからって秘密の遊びとかしないんだからね」
「朝からそのテンションはなんなの？　脳を寝違えでもしたの？」
「ちょっと柔らかくなってるのかもね。　あ、触らせないよ？」
「朝から脳姦とか想像させんな」
「近親脳姦」
「うるせぇよ」
　我が両親は、現在世界一周旅行一週間の旅で渡航中である。
　そのような訳で、俺はこのふざけた女と一週間協力して暮らさなければならないのだが、こいつと話していると改めて不安がこみ上げてくる。
　俺の繊細な胃に穴が開いてしまわないか心配だ。
「ところで大輔。　昨日階段下で、ずっと女子の下着覗こうとしてたんだって？」
　考えていると、綾菜がいきなりそんな事を言い出した。
　俺はあらぬ誤解にいきり立ち、そんなデマを信じる愚かな双子の姉を糾弾する。
「ふ、覆面してたのに何故!?」
　ちょっと間違えた。　焼き魚を租借する綾菜の目が呆れの色に染まる。
「何でそんなことするの？」
「下着が見たいからじゃない？」
「大輔は死んだらいいのにね」
　再度問いかける綾菜に答えると、物凄く酷い事を言われた。　双子の死を願うなんて、この女には血も涙も鼻水も無いに違いない。
「そんな事ばっかやってると、本気で皆に引かれるよ」
　更にはそんな事言って、本当に心配そうな顔をするのが酷い。

……俺と綾菜の顔は似通っている。　だが、一つ違う箇所がある。
俺の方が、少し口が大きい事だ。
測ったことはないが、間違いなく大きい。　綾菜の口が小さい訳ではない。　俺の口が明らかに少し大きい。
この口のせいで下品に見える。　この口のせいで……ええと、俺がたかが下着一枚の為に、割に合わない努力をしているなどと邪推されるのだ、うん。
「……ふぅ、という訳で、今日の後片付けは大輔ね」
「ちょっと待て、何が次元跳躍してそうなった」
「アホな話してたら時間無くなっちゃったしー。あたしの方が準備に時間かかるしー」
言いながら綾菜が席を立ち、二階の自室に向かおうとする。
「ちょっと待て、俺だってメイクとか……！」
俺も抗弁しながら、慌てて立ち上がる、と。
ガチャン。　机に足が当たり、振動で机の上にあったお茶が落ちた。
その先は俺の下半身！
「わっちゃ！」
その熱さに俺は悲鳴を上げ飛び上がる。
階段に向いていた綾菜の顔が、こちらを振り返った。
それを見、俺は慌てて頬を押さえる。
「だ、大輔、チンチン！　チンチン！」
言葉は選べ双子の姉。　まぁそりゃ弟が熱湯にまみれた股間を放置して頬を抑えていれば、動揺して言葉の選択もできなくなるかもしれない。
俺だって今すぐズボンを脱いで中の物を大気に晒したい。　しかし……。
「だ、大丈夫だから。　片付けとくからお前は着替えて来いって」
「でも…」
「あとちょっと気持ちいいし」

グッと内股に力を込め、俺は皮膚を剥がそうとするかのような熱さに耐えた。

押さえている手で頬を引き上げ、無理やり笑顔。

罵倒でもしてとっとと去ってくれるかと思った綾菜だったが、やはり俺を心配する表情を見せ、少々逡巡してからようやく二階に上がっていった。

……まったく、俺が何の為に日々ローアングルに生きていると思っているんだ。

しばらくして吹き出物一つ無い頬から、俺はそっと手を離した。

朝から下着を替える羽目になるなんて、今日は憂鬱な日になる予感がした。

変えた下着一丁で部屋に戻った俺は、そのまま詰襟を着、化粧台の前に立った。

手には赤と黒の縞模様の、二mほどのロングマフラーが握られている。　それを首でひと巻き、口の前でふた巻きする。端をそれぞれ体の前と後ろの流し、首元に手を入れ隙間を空ける。

九月とはいえ、いまだ残暑だ。蒸し暑いに決まっている。　長いため息を吐くと、それがマフラーの中で渦巻いた。

鏡で自分の顔を確認する。　陰気だ。　ハンサムが台無しだ。口の端を上げ笑って見せる。下品だ。特に口が。まぁこれで良い。

その表情を維持したまま、俺は部屋を出た。

「なんか久しぶりだね、一緒に学校行くの」

「嬉しくないねぇ」

なんだかんだで時間が合い、俺と綾菜は並び立って通学路を歩く事になった。

双子が並んで歩くというのは、周囲に双子キャラをアピールしているようで気恥ずかしい。その為普段は俺の方から登校時間をずらしているのだが、綾菜は全く気に留めていない様子で、能天気に鞄を揺らして歩いている。

俺としては、こんなのよりもっと可愛らしい女の子と一緒に登校したいのだ。　ついでにその女の子はちょっぴりえっちだといい。

あくまで男の子の体に興味があるぐらいのえっちさだ。ついでにそんなえっちな自分を恥じているとなお良い。それで、なおかつおっぱい大きかったら良い。　そんな女の子はいないだろうか。

俺がそんな夢想をしていると……その鼻に香りが届いた。　それは大型の花弁を持つ、艶やかで少々グロテスクな色をした花のよう

な匂いである。
その匂いが鼻毛をくぐり抜け神経に触れた時、俺は既に１００ｍを疾走していた。
目指すは前方を歩く少女。　彼女こそが、匂いの元であった。
狙いは上か下か。　俺が両方だと考えを整備した瞬間にも、隙は無かったはずだ。
しかし、手が届く直前、少女の体が視界からふっと消える。
「え？」
伸ばした手が取られ、天地が逆転する。
景色がスローモーになり、頭の中で中学時代の友人、上杉が俺に告げる。
『首を上げるんだ』
ドダンッ！　次の瞬間、俺の体は思いっきりコンクリートへと叩きつけられていた。
「いぎゃあああああああっ！」
その衝撃に、俺は思いっきりのた打ち回る。
そして俺を一本背負いで投げた少女は、嫌悪感を顕にしながらウェーブのかかった金髪を揺らし、俺を見下ろしていた。
「シネッ」
「いや、普通に死ねるからね！？　のごおおお！」
ちょっと変わった抑揚で吐き捨てた少女に叫び返し、俺はまたのた打ち回った。
のた打ち回りながら説明しておこう。
彼女の名前は椎名雅。　ミルクが混ざったような淡い金髪が示す通り、北欧系のハーフである。背は小さいが乳と尻の発育はよろしい。トランジスタグラマーというやつだ。
しかしこの通り、運動神経と反射神経はとても素晴らしく、動きにも隙がない為鈍重な印象はない。足首も腰もキュッと細く、まるで蜂のような少女だ。
俺と同じ高校に通う一年生。　ついでに水泳部の後輩で、期待の

エースでもある。
あまり日本人の特徴も無いので、皆はミーヤと呼んでいる。
「ちなみに下着の色はライトグリーンである」
「やっぱりシネッ！」
「ごめんなさいごめんなさい！」
ミーヤがゲシゲシと蹴りつけてくるので、俺は丸くなってそれを防いだ。　蹴るにしてもつま先を使ったトゥーキックなところが恐ろしい。
俺がその恐ろしい蹴りから必死で身を守りつつ、あわよくばもう一度じっくり下着を見ようとしていると。
「どうどうどう」
そのミーヤの体を、羨ましい事に後ろから羽交い絞めにした奴がいた。
ミーヤはキッとそいつを睨んだが、その正体に気づくなり相好を崩す。
「ア、綾菜センパイ！　おはようございます」
彼女は羽交い絞めにされたまま、それをしている綾菜に弾んだ声で挨拶をした。
俺の時とは声音が違う。　更には目が輝き、きめ細やかな肌に赤みが差した。
――椎名雅は、水泳部の部長でもある立島綾菜に、先輩という以上の感情を持っている。
何故か分からないが、彼女は綾菜を先輩としてというより一人の女性として敬愛しているのだ。
彼女から漂う香りは百合の花なのかしらんとぼんやりと考える。
ふと気がつくと、俺達の騒動を見て、周りの生徒達が何事かと足を止めていた。
しかし、やらかしたのが俺と知れると苦笑いをして去っていく。
女子が近くを通ってくれないのも含めて人徳だろう。
「中々シャレにならないやりとりしてるね」

綾菜はミーヤに笑顔でおはようと答えてから、俺に手を差し出した。
「ふっ、この程度我々の中では初級のスキンシップさ」
その手を取らず、俺は立ち上がる。　実際ミーヤとはほんの一瞬しか触れ合えなかったわけだし。
「訳の分かんない事言ってないで。怪我は？」
「上杉に教えられた受身が無かったら、死んでいた……」
「上杉？　誰それ」
「薄情な奴だなお前は。ほら、中学の時、柔道部でお前に惚れてた」
「それ小池じゃない？」
「そっちかも」
フられた奴だし、どっちでも構わないだろう。
とにかくその命の恩人に心で礼を言って、俺はミーヤのほうを見た。
「……ムッ」
すると、やはり睨みつけられる。　しかし、その睨み方は先程より力がない気がする。
あ、もしかして流石に背負い投げはまずかったと後悔してる？
よし、つけこもう。　一瞬で決意し、俺は言葉を発した。
「いやー、今の投げで股間強打しちゃって、できればペロ……ごめん今の無し」
と、言いかけた所で、今度は音が出そうな勢いで睨まれた。
決断はともかく、発する言葉はもうちょっと練れば良かった。
あとチャックに手をかけるの遅らせれば良かった。　というかマジで怖い。
「なんで背中と股間両方打てるの。　ていうか怪我してるのは手」
「お？」
ビビっている俺に、綾菜からまともなツッコミが入った。
いや、モノの長さによっては両方打ち付けることも可能と抗弁することもできるが、それは置いておいて。

というか手？　言われて俺は右手を見る。　するとミーヤとスキンシップを取れなかった方の彼は、更に不幸な事に受身を取った影響で、より強く地面に叩きつけられていた。
　おかげで背中への衝撃は抑えられたようだ。だが、代償として右手は赤く腫れ、表面からぽつぽつと血が浮き出ていた。まぁ、怪我なんて大げさなものではない。
「こんなもんペロれば直る」
「気持ち悪い動詞作るのやめてくれる？」
　言いながら、綾菜がポケットを探る。
「ほれ、ハンケチ持ってる綾菜さんに感謝しな」
　そうして綾菜は俺の手を取ると、ハンカチで血をぬぐっていった。
　ハンカチにはクマかネズミかカエル判別がつかないが、とりあえずファンシーなキャラクターがプリントされている。
　そして全体的にピンク。更にはフリル。今時小学生でも持っていなさそうなシロモノだ。
　服装はそうでもないのだが、この女は小物となると急にかわいこぶりっこな物を集めだす。
　その恥ずかしいハンカチで俺の体中の埃を払った綾菜は、更に顔にまで手を伸ばしてくる。
「っ！　……やめろ！」
　そのハンカチを、俺は咄嗟に奪い取った。
　突然大声を上げた俺に、綾菜が目を丸くする。
「あ、その、恥ずかしいだろ……」
「そ、そっか、ごめんね？」
　慌ててそう言うと、綾菜は謝りながらおずおずと手を引っ込める。
　その、周りの目とかばつが悪くなった俺は、ぶつぶつと心の中で言い訳をしながら、顔……はよして手をもう一度拭きなおす。
　そうだ、ただでさえミーヤの視線も鋭くなってるのに……。
「ペロる？」
　ガルルルルル――。

睨むミーヤを見、右手を差し出すと、歯を剥き出して唸られた。
ガブられないだけ良かったと思おう。
「ごめんね、ミーヤ。びっくりさせちゃって」
「イ、イエ！　悪いのはダイスケですカラ！」
「呼び捨てかい」
ツッコミも入れるが、聞く気配が無い。彼女は綾菜の傍に寄ると、背伸びをしながら綾菜の様子を心配そうに窺った。
俺を投げ飛ばした事など既に頭の中にはないようだ。そもそもこの少女には、入部した当初から俺を敬う気配がまるで無い。
最初に彼女が入部してきた時は、確かに俺も紳士的に振舞ったはずなのだ。
だが当時からミーヤは俺の事を睨みつけて来、どうにかして仲良くなれないかとスキンシップを取り続けて半年。
「アンタなんて、ダイスケでジューブン！」
――こんな仲になりました。

有馬某と三橋愛華

ザバァン。

飛び込み、長めに潜水し、水流に導かれ水面に顔を出し、水を叩きまた短く潜る。

この動作で何故前に進めるのか、たまに不思議に思うことがある。

そして、そんな疑問が出る時は、大抵良いタイムなど出ない。

「――」

告げられたタイムを聞き、俺はため息をついた。自己ベストからは程遠い結果である。

タイムを計る時は無心。　隣で同じくタイム計測を終えた綾菜も、前にそう言っていた。

その綾菜は、またしても自己ベストを塗り替えたのだろう。自らのタイムを聞いて嬉しそうにしている。

「冴えないですねぇ、先輩」

俺がそれを苦々しい気持ちで見ていると、頭上からそんな声をかけられた。見上げると、3と書かれたスタート台の上に、ストップウォッチとバインダーを持ったまま膝を抱えて座り込む少女がいる。

先程俺にタイムを告げた、我が後輩だ。短い髪を両サイドで無理やりまとめた子供っぽい髪型だが、それで隠し切れない利発さが、その大きく好奇心の強そうな目ににじみ出ている。

「それはタイムが？　表情が？」

「両方です。ていうかそんな顔してると、人生まで冴えなくなりますよ」

「君がいるからそれはない。　毎日がバラ色さ」

「はいはい」

つうかそこにいられると、プールサイドから出ざるをえないのだが。

第一コースではミーヤが計測中なので、迂闊に移動できない。

もし、万が一、不慮の事故があって彼女と追突しようものなら、あまつさえ水着の中に手が入っていやんとなってしまえば……今度は命の保証が無いだろう。

スキンシップは一日一回にしようと、先週反省したばかりだ。しかし水中に隠れている二つの膨らみを想像すると、なんだか勇気が沸いてくる。

……命賭けちゃうか。

「でい！」

そんな事を考えていると、いきなり頭をバインダーの角で叩かれた。

「痛いなぁ。　何をするのかね」

「いえ、先輩が覚悟を決めた男の顔になっていたので。気持ち悪いじゃないですか」

「ちょっと待て！　デレっとした顔して怒られるなら分かる！　引き締めて気持ち悪いってどういうことだ！」

それならハハァン、ミーヤに見惚れた俺に嫉妬してるなとか言えるだろうに、キメ顔が気持ち悪いと言われてはどうしようもない。

「そっちは先輩のデフォ顔ですし」

「マジで？」

「マジで」

俺、普段はそんなに気持ち悪い顔しているのか。　ショックを受け、俺は自らの顔をペタペタと触り、確かめた。

「造詣に関しては心配しないで大丈夫ですよ。　部長そっくりですし」

「……あっちが俺に似てるんだ」

俺が目指しているのは、渋みのあるダンディーフェイスなので、女にそっくりと言われても嬉しくない。

というか、綾菜が部長と呼ばれるのも未だに慣れない。

一年の時はサボリ魔だったくせに二年からは急に真面目に部活に没頭しだし、今ではすっかり慕われる部長だ。

俺が綾菜の顔に部長の肩書きをハメこめずに首を捻っていると、奴がその視線に気づき、こちらを見て同じ角度で首を傾げた。似た顔でそんな事していたら、多分物凄く滑稽だろう。

プール上の女が、何やら微笑ましいものを見るような目でこちらを見ている。不愉快なので首の角度を戻す。同時にあちらの首の角度も戻された。

しっしと追い払う仕草をすると、あちらも同じ仕草をする。と見せかけて、俺の顔に水をかけた。まともに食らった俺がやり返そうとする前に綾菜は水中に潜り、プールサイドから上がっていった。

「やっぱり部長のほうが、上手ですね」

そう言えばこういったやり取りで、俺がアイツに勝った試しがない。

こんなんだから万年弟ポジションなのだろうか。昇格出来るものならしたいものだ。

「とにかくあがるぞ。ほら、手ぇ貸せ」

プールサイドから上がる姉の尻なんざ見ても、何の嬉しさも無い。俺もプールから出ようと決め、少女に手を伸ばした。

ここにいても、この女の股間しか見られないしな。こちらはまぁそれなりに、想像力の働かせ甲斐のある光景だけれど。

「はいはい」

不承不承という感じで、少女が俺に手を伸ばす。多分俺はデヘッとした顔をしたはずなのだが、まるで気付いてない。

やはりこれが通常顔だと思われているのか。ショックを受けつつ彼女の手を取る。

彼女を支えに体を引き上げながら、俺は愛しい少女の名前を呼んだ。

「ありがとう、馬鹿子…」

「あ？」

その瞬間、手が放されました。

ザッパンという派手な音と共に、背中から水中に戻る俺。急な

事だったので、ちょっと水を飲んだ。
「あにすんだ馬鹿子！」
「誰が馬鹿子ですか！」
「そのまんまだろうが、そのまんま！」
女の子に馬鹿子はないだろう。あなたはそんな風に思うかもしれない。　しかし彼女の名前を聞けば、誰もが俺のあだ名に納得するはずだ。
では聞いていただこう。
――彼女の名前は、有馬鹿子。
マジで。　一応言っておくと、ありましかこと読む。
本人はこの素晴らしい名前を好いていないようで、これを言うとすごく怒る。
ミーヤと同じ一年生だが、体の発育があまりよろしくない。　ただしスラリとした足を持ち、細い体に薄く脂肪が乗っているので、特定の需要はあると思われる。
「次言ったら、ここが断崖絶壁でも同じ事しますよ」
「すみませんでした」
そもそもそんな状況に陥ることが無いとは思うのだが、ここは素直に謝っておいた。
「ていうか、そうじゃなくて」
しかし鹿子は、人を落としておいてそんな事はどうでも良いと言いたげに手をパンと打ち付ける。
「そうじゃないって？」
「先輩、手に怪我してたでしょ」
俺が尋ねると、鹿子は飛び込み台に両手を突き、前かがみで尋ねた。
「あ、あぁ……怪我って程のもんじゃないけどな」
鹿子が言ったのは、今朝掌についた擦り傷の事だろう。　痕は残っているが、もちろん血は止まっている。
そんなに目立つものでもないと思ったが。

「今朝、ミーヤに投げられたんですっけ？　よく無事でしたね」
本人から聞いたのか、鹿子が思い出したように言う。
部活の同じ一年生ということもあって、二人は仲が良いようだ。
ミーヤって俺のことどんな風に話すんだろ。
気にはなったが墓穴を掘りそうなので適当に答える。
「小杉の魂が守ってくれたんだ」
「誰ですかそれ」
「忘れた」
そう答えると、俺が適当な事を言うのは慣れたものとでも言うように、鹿子は肩を竦めた。
まぁ説明しても、あいつが鹿子と付き合うなんてミラクルは起きないだろう。
そもそもそんな奴いないし。
同じくおおげさに首をすくめた俺は、再度手を差し出し、やり直しを要求した。
鹿子もそれに応えようと手を伸ば……。
「どいてくださいますか？」
そうとした所で、後ろから声が響いた。
その声に後ろを振り返った鹿子が、ヒッと飛びのく。
なんだと俺が訝しんでいると、スタート台の後ろからひょっこりと顔が出た。
いや、顔を出した少女がいた。
「大輔さん、お手を」
このプールにあって、唯一水着を着ていない女。　推奨されているジャージ履きすらしない女。　制服でいながら水滴一つ被らない女。
水泳部でただ一人のマネージャー、三橋愛華であった。俺と同じ二年生。　彼女は俺に手を差し出すと、片手でその豊かな黒髪をかき上げた。
「あ、普通に上がれるからいいよ」

やろうと思えば普通に一人で上がる事はできる。　実践してみせると、鹿子が恨めしそうに睨んでいた。　……本当は俺が水に沈めてやろうとしていたのは秘密だ。

「あ、では大輔さん、タオルです」

と、三橋はそれにもめげず、そそくさと俺にタオルを差し出した。

俺の私物ではない。　かと言って、この部にそんなものが用意されている訳ではない。

彼女が用意したものだ。ついでに言えば俺以外もらってない。

「ええと、あぁ、うん、自分のあるから」

俺はそう言って、さりげなく彼女の好意を無碍にした。

「そ、そうですか」

シュンとしながら、愛華はタオルを引っ込め、鹿子からバインダーをひったくった。

そりゃ見事に、顔はシュンとしたままひったくった。

「タイムも私が計りましたのに」

「いや、君小数点切り捨てするじゃん」

言ってるそばから、鹿子が書き込んだタイムの下一桁を書き直している。

そうだ、そうなのだ。　俺は彼女にえこひいきされている。　露骨に。しかも稚拙に。

「そ、それじゃ私はこれで……」

鹿子がそう言って、そろそろと退散しようとする。

三橋が振り向き、彼女に視線を向けると、鹿子は本当に逃げるように去っていった。

こちらからはどんな表情をしたのか見えなかったが、あまり関係が良好とも見えない。

「あんまり後輩脅すなよ」

「あの子は女狐です」

真顔でそんな事言われたら、誰でも吹き出すだろう。　少なくと

も俺は吹き出した。
「じゃぁ俺は、あの娘に化かされてる訳だ」
油断したら、ケツ毛まで抜かれて、断崖絶壁から叩き落されるとでもいうのか。
面白くてつい乗ってしまってから、三橋の顔が真剣そのものである事に気づく。
ついでに俺の同意を受け、その可憐な鼻の穴がちょいと膨らんだところまで見えた。
「そ、そうです！　いえ、大輔さんなら分かってて弄んでいる事もわかってます！」
そんな事を勢いこんで言われても困る。俺の部内での評判ってどうなってるんだろう。ちょっと人生を振り返りたくなる。
「俺、君の事は弄んだつもりないんだけど」
「ほ、本気ということですか！？」
「そうじゃなくて」
コナの一振りもかけてないって言いたいのだよ。
興奮した様子の三橋を、俺はどうどうと宥めた。
……さて、そんな餌も何も与えてない彼女、のはずなのだが。
良いだろうか。意外と思われるかもしれないが、女性経験どころかお付き合いの経験すらない俺が言ってしまって良いだろうか。
まぁ勘違いであれば勘弁していただこう。
――この女は、俺に惚れている。
世の中のイージーラブを満喫している兄ちゃん風に言うなら、ヤレる。もしくは彼女は、俺を騙してケツ毛毟って集めようとする特殊性癖だ。ただ、鹿子もそうだが、俺のソレにそんな価値があるとも思えない。
しかし、俺は彼女を受け入れられない。それは三橋が怖いからでも、女性との付き合い方が分からないからでもなかった。いや、それもちょっとはあるけど、大元はあくまでも、俺自身のちっぽけな問題のせいである。

「ごめん、弄んでるかも」
俺がそう答えると、三橋は何故かとても満足そうな顔を浮かべた。
そして俺が彼女に冷淡になりきれず、対応が中途半端になってしまうのは、結局のところこの笑顔が可愛らしいと思ってしまうせいだった。

脅迫　そして…

「つう訳で、今日の連絡終わり」
目つきの悪い。　いや、殺人によってリアルなＥＸＰをつまないとそんな目にはなれないであろうってな凶悪な目つきをした男がそう言った。
山本いるか。　容姿との合わせ技で有馬鹿子級の面白い名前を持つが、見た通りれっきとした男性である。我が水泳部の顧問で、二十四才体育教師。
元はオリンピックの強化選手だったとか聞いたことがあった気もするが気のせいかもしれない。
水泳部のメンツは、マネージャー一人を含めた七人。
それが彼の前で整列し、その言葉を聞いていた。
我が水泳部の活動はこうやって並んで整理体操をし、更にはいるかちゃんから今後の予定なんかを聞き（今ココ）、いるかちゃんがそんじゃ解散と手を叩いて終わる。
「どうしたんですか先生」
しかし、連絡が終わってもその一本締めが来ない。
綾菜が部長らしく率先して聞くと、いるかちゃんは言い忘れたとこがあったと付け加えた。
「お前ら今日は早く帰れよ」
「んな小学生じゃあるまいし」
「ちげぇよバカ大輔、バカ」
最近の教育者というのは、繊細な生徒にモンスターペアレンツの併せ技で、発言に細心の注意を要すると聞く。
こうやって本当は頭の良い生徒をバカとか言って大丈夫なのだろうか。しかも二回も。
まぁこの目つきの悪い体育教師に機嫌を窺われ、ニコニコと大輔くぅんなどと呼ばれた日には、あれやこれがバレたのだと死を覚悟

するしかなくなるだろう。
「じゃ、マジでなんなんですか？」
という訳で、俺も彼に罵倒されるのを気に病んだことはない。
改めているかちゃんに問い返す。
「なんか警備システムがイカれちまったとかでな。しばらく直らないらしい」
「警備システム？」
「ほれ、敷地内に人が侵入すると警備会社に連絡がいくってやつだよ」
「あぁ……」
流石に夜の学校に進入した事はないのでお世話になった覚えはないが、うちの学校にもそんな物が導入されていたらしい。
安普請だと思ってはいたが、最低限のラインは守られていたようだ。
「しかも最近物騒だからな。早く帰るに越した事はない」
いるかちゃんが指すのは、最近この街で起こってる連続失踪事件の事だろう。
その数は分かっているだけで十人近くだったか。少し前までは個々のちょっとした事件だったそれが雲のように寄り集まり、最近一つの大きな事件として形を成し始めた。
流石に自分の上にそれが降りかかるとは誰も真剣には考えておらず、そもそもこれが人為的かもはっきりとしない。
しかし、何となく陰鬱な影が街を覆い始めていた。
「ん？」
と、何か視線を感じ、俺は考えを中断し顔をあげる。
周りを見回すが、誰が俺を見ていたかは分からなかった。
「だからって、盗みに入ろうなんて思うなよ」
強いて言えば、今ギロリと、いるかちゃんが俺を睨んだ。
「夜のプールなんて興味ないッスよ。マーメイドでも泳いでるなら喜んで来ますけど」

あらぬ誤解を受けているようなので、俺は慌てて否定した。
更衣室に水着や下着を忘れる女子も居まい。ていうか下着穿き忘れる女子なんて居たら、そっちストーキングするわ。
その光景を一瞬想像して顔を緩ませた俺を、いるかちゃんは教育者にあるまじきあからさまな疑いの目で見た。
「つうか何で俺だけなんスか。平井にも言ってくださいよ」
言いながら、俺は後ろで並んでいるもう一人の男子部員を振り向いた。
「平井はお前と違って人徳があんだよ」
「あはは……」
気弱そうに笑った紅顔の少年は、平井洋一。
俺と同じ二年生であり、俺以外で男子部員はこいつしかない。
確かに俺より小さい体の全身で自分は善人ですアピールをしている気もする。
でも俺は、こいつが無類の褐色好きである事も知っているのだ。
ただし、日焼け痕は褐色とは違うので、それ目当てに入部した訳ではないらしい。
俺には基準が分からん。
「前世で修行が足りなかったかな」
まぁ、しかしそれを女子の前で暴露してやるほど俺も鬼畜ではない。
肩を竦めて前に向き直った。
「お前はもうちょっと身近な所反省しろ」
「ちょっと影が濃いぐらいのほうが、女の子もキュンと来るんですって」
ねっ。と同意を求め周りを見るが、猛烈に頷いたのは三橋一人だけだった。
いるかちゃんのほうは呆れきった目で俺を見ている。
「ま、当直に俺もケイゴ君もいるからな。じゃ、解散」
で、キリがないと判断したのか、そう言って手を打った。

ケイゴ君？　そんな先生いたっけと疑問には思ったが、あんまり皆を拘束しても俺の人徳は積まれそうにないので、とりあえず流しておく。

水着一丁で立ちっぱなしは辛い時期になってきたしな。

そんな俺の密かな気遣いで健康が守れらた麗しき女子達が更衣室へと歩いていく。

俺も伸びをし、男子か女子の更衣室に向かおうとしたのだが、そちらとは反対方向に歩いていく少女がいた。

彼女はプールサイドにある倉庫の前で立ち止まると、何の変哲もない長方形のそれをじっと見つめている。

何となく足音を殺して近寄ったが、彼女のほうが先に俺に気づいて、振り向いた。

「ひっ」

んで、飛びのいた。　その瞳には、はっきりとした怯え。

こりゃ俺から声かけなくて良かったなと苦笑する。

「あ、あの、ごめ」

「開けずの扉か？　ダメだぞ、開けちゃ」

謝罪を遮り、今度はきちんと笑顔を作って彼女に話しかける。

これだけ明確に顔に表れていても、彼女の口から俺に怯えたのだと聞くのは耐えられなかった。

――開けずの扉。　開かずの扉ではない。　この倉庫は今は引退した水泳部の先輩達、そしているかちゃんから開けるなときつく指示されている謎のスペースだ。

鍵も掛かっており、開けたくても開けられないので俺もその中身は知らない。

「え、あ、うん」

言葉を遮られた少女は、叱られた子供のようにしゅんとしながら頷いた。

彼女の名前は、片瀬姫足。　姫足と書いてひだりと読む。

部内がこんな変わった名前ばかりだと、自分も役所に駆け込んで

変えてもらいたくなるが置いておこう。
おかっぱの髪。色素の薄い肌。色々と特徴はあるが、俺が一番羨ましいのはその小さい口か。
俺のようにあまり無駄に喋らないのが維持のコツなんだろう。
自虐しながら考えた。
「なんか気になることがあるのか？」
俺が彼女の横に立つと、また一歩距離を開けられる。
俺は見なかった振りをするのだが、彼女は可愛そうなぐらい縮こまった。
怯えられるのが怖いくせに分かっていてやるんだから、俺はサドとマゾを併発してるのかもしれない。
ミーヤが入部当初から俺に敵対的であるのと同じように、彼女も転入してきた当初から、何故か俺に対し怯えるような仕草を見せていた。
そうそう、彼女は転入生である。俺達が二年に上がると共にこの学校に入り、ミーヤや鹿子と一緒に入部した。
何でこの時期に？　と思わないでもないが、まぁ人には事情があるだろう。俺に怯えるのにも、恐らく事情があると信じたい。
「なん、となく……」
「そっか。別に変な匂いはしないな」
「に、匂い？」
扉の前でスンスンと鼻を動かすと、片瀬が怯えながらも聞き返してくれた。
さっきの様子と言い、彼女も怯える事に罪悪感はあるらしい。
ならば、ちょっとずつ慣れてもらうのが一番だろう。
「いるかちゃんが殺っちゃった部員が入ってるのかと」
「ヒッ！」
軽くジョークを言うと、今度は明確に片瀬が悲鳴を上げて後ずさった。
いるかちゃんの容姿的に、ちょっとありえすぎる話だったかもし

れない。
「冗談だよ冗談」
にぃっと口の端をあげると、彼女は引きつりながらも笑顔を返した。
入部した当初は、彼女に話しかけるとブルブルと震えた後、猛ダッシュで逃げられていたし、それに比べれば大した進歩かもしれない。
もしくは足が凍り付いて動かないだけかも知れないが、悲しくなるし考えないでおこう。
「あんまり気になるなら、いるかちゃんに鍵借りてみようか？」
「え、だだだ、大丈夫。ほ、本当に、きき気のせいだと思う、かから」
「そっか」
震えながら話す彼女は、壊れかけのレイディオのようだ。
一生懸命喋ろうとしてくれているのは嬉しいが、これ以上やるとタンのみじん切りという前代未聞の物体が出来上がる気がする。
「せんぱーい。何を女の子虐めてるんですか」
どうしようかと俺が考えていると、背後から声がかかった。
脳を一片も使っていないような声である。振り向くとやはりその主は、有馬鹿子であった。
先程三橋に釘を刺されたようだが、懲りずにこちらへちょっかい出してくる。まぁ避けられるよりずっと嬉しいけど。
「虐めてた訳じゃねぇよ。つうかお前を虐めてやろうか」
俺がガーっと牙を剥きながらそう返すと、鹿子は片瀬を少しは見習って欲しいぐらいの軽薄さで「やだ怖い」とのたまい、近くまで歩いてきた。
それから、「どうしたんですか？」と首を傾げる。
姫足がまた一歩引く。俺だけに怯えるわけじゃないんだよな、この娘。
それに安心する自分にちょっと引く。

「いや、この倉庫がなんか」
その後ろめたさを誤魔化すべく、俺は鹿子に事情を説明するため、再度倉庫に顔を向けた。
と、同時に、いいタイミングで開けずの扉の間から、ばふっと埃が飛び出してくる。
何で、どうして、と思う前にそれを反射的に吸い込んでしまう。
まずい。俺は直感でそう感じた。
まずい、まずいまずいまずいまずい。
片瀬を押しのけるようにして――押しのける前に彼女が退いたが、倉庫の脇、プールを囲む金網を掴む。
あれが、出てしまう！
「ぶわっくっしょい！！」
堪えられず、俺は特大のくしゃみをした。
すると、バリ！　ガシャン！　と大きな音を立て、世界が傾いた。
俺はそれに耐え切れず、爪先立ちになりやがて重力に身を引かれていく。
先程まで身を委ねていた金網さんが、まるでコントのセットのようにはずれ、重力に身を任せてしまったのでしょうがない。
ドスンッ。
そんな訳で、俺は壊れた金網と共にプールの外へと落ちた。
プールの裏は、ランニングコースにもなっている林である。
冷えた土が裸の胸に心地良い。
俺は金網さんに覆いかぶさるラッキースケベを味わいながら考えた。
本日三回目の落下である。地面が俺に熱烈なラブコールを送っているのだろうか。
これだけ彼女にモテるのは、俺かジャムを塗ったパンぐらいなものだろう。
「だ、だ、大丈夫……？」
頭上から姫足の声が聞こえる。俺はうつ伏せのまま、それに応え

ない。
お互い、しばしの沈黙。俺は頬に触れてから、勢いをつけて立ち上がった。
「ていうかあり得ないだろうちの学校！　どんだけ設備費ケチってるんだよ！」
「ヒッ！」
節度を持って叫ぶと、上にいる片瀬が引きつった声を上げた。
「あ、ごめん」
まぁ半分ワザとだけど。
片瀬にどくように言って、俺は金網をプールに押し上げた。
「お、屋上じゃなくて、良かった、よ」
「さりげに怖い事言いますね、片瀬先輩」
フォローなのか冗談なのか判断がつきにくい彼女の発言に、鹿子がつっこんだ。
片瀬に手を借りて上がろうかと思ったが、流石にそこまではしてくれそうにない。
もっかい鹿子に途中で手を離されたら今度こそ大惨事だ。
仕方なく自力でプールに舞い戻って、ぽっかり開いてしまったフェンスの隙間を確かめる。
「やっちゃいましたねぇ、先輩」
「ど、どうしよう」
「何も今日壊れなくてもいいのになぁ」
警備システムがいかれてるって時にこんな穴が開いてたら、入って下さいと言っているようなものだ。
どうしようと考えながら、金網を元あった場所にはめてみた。
するとぴったり。おめでとう君がシンデレラ。
そりゃ当たり前だが、手を離してもこれがはずれない。
「お、いけるじゃん」
更には折れた場所も、注意しないと分からない程になっている。
「あ、あぶなく、なく、ない、かな？」

「いや、ガムテで補強するといかにもここが脆いですよって敵に知らせる事になるし」
敵。　まぁ下着泥棒とかそんな奴だ。　言いながら、俺は更衣室の方を見た。
先程の派手な音のせいで、戻ってきたらしい三橋も含め、水泳部の皆がこちらを見ている。　俺は意味も無く彼女らに手を振った。
三橋だけが手を振り返したのを確認して、俺は片瀬と鹿子に向き直る。
ビクッ！　と、片瀬の肩が大きく震えたがなるべく気にせず彼女に言った。
「明日俺がいるかちゃんに言っとくよ。とりあえず今日はこれってことで」
なんなら明日、さりげなくいるかちゃんをここに誘導しても良い。壊した責任を押し付けてしまえれば万々歳だ。
「う、うん……」
渋々なのかおどおどなのか判別がつかないが、とにかく片瀬も頷いた。
「私は関係ありませんから」
なんかつれない事を言っている女もいるので、出来れば当日この女にも責任を被せたい。
まぁともかく鹿子にも了承を取れたってことで、悪魔の契約成功だ。
「しかし、いきなり埃のぶっかけとは」
「日ごろの行いの所為じゃないですか？」
「うっせ」
鹿子をあしらいながら、不思議に思って、再び開けずの扉を見る。
なんだか俺も中身が気になってきた。
倉庫ちゃん倉庫ちゃん。オープンユアハート。　などと念じながらさすると――。
『見つけた』

声が、聞こえた……気がした。
片瀬と鹿子を見るが、二人ともどうしたの？　とばかりに首を傾げている。
え、まさかコイツ？　と、開けずの間の鍵穴をクリクリと弄ってみるが冷たいものだ。
幻聴だったのか？
心に聞いてみるも返事はない。　ちょっと大地の声聞きすぎたかも。
土のついた頬を、俺は撫でた。

「はぁぁ」
下を向くと、ため息が自然に出る。　俺が前に倒れないように。
ブレスの力で支えてくれているのだろうか。
そんな馬鹿な事を、俺は黄昏時の廊下を歩きながら考えた。
「どったの大輔、そんなに部活疲れた？」
横を歩く綾菜は、まったくもってそんな様子を見せていない。
「俺はお前みたいに、水につかるだけで元気になる水生生物とは違うの」
「白魚のような手なのは認めるけど」
言ってろ。　しゃぁしゃぁと言ってろ。　鼻からも息を吐いて姿勢制御を助ける。
「モテるからね、大輔は」
「唐突に痛烈な皮肉とかやめてくれる？」
確かに色んな女の子との関わりで疲れた訳だが、別にイチャイチャラブラブなやり取りが行えたわけではない。
「モテないからね、大輔は」
「前言翻しすぎだろ！？」
先程の発言に何のこだわりも無く言い直す綾菜。
確かに俺に人徳かモテオーラがあれば、今日の出来事もクールに

受け流せただろうがそうはっきり言われると辛い。
「あはは、元気じゃん」
「……今のが最後の元気だ。これ以上疲れさせたらおぶって帰らせるぞ」
「おぶっても良いけど行き先は姥捨て山になるからね。　んじゃ、しばしお別れ」
何だか恐ろしいことを言いながら、綾菜は下駄箱の反対側へと移動する。
俺も下駄箱の前に立ち、それに手をつっ込むと、指が靴以外の何かに当たった。
覗き込むと、それは、二つ折りになった紙だった。
「いやいやいやいや」
期待するにはまだ早い。　あぁいう手紙は、ハートのシールで封をされていると決まっている。　更に中身が例えそういうものであっても、本当に女の子が、しかも可愛い女の子がいて、更にはそれが男子の純情を踏みにじる罠でない可能性はかなり低い。
いや、でも万に一つはあり得るかもしれない。　開けない限り中身は分からないのだ。
……よし！
哲学的に意を決し、俺はそのラブレターを取り、広げた。
中にはシンプルな一文。

「お前は化け物だ」

「あはははははは！！」
バリッ。
「ど、どうしたの大輔！？」
突然笑い出した俺に、向こう側から、綾菜が慌てた声を上げる。
「いや、何でも、何でもない」
言い返してから、俺は口元を押さえた。

手の中には、しわ一つ無い紙片。　裏返してみると、更に続きがあった。

――バラされたくなければ、今夜二十二時に校舎裏へ来い。

こりゃ惚れざるをえない強烈なラブレターだ。

差出人を書き忘れてるから、ドジっ子かもしれないが。

俺もこの手紙には、誠心誠意応えねば……なるまい。

ミミック（擬態の方）

“彼女”が学校の裏門に到着したのは、二十二時十分であった。
辺りは既に闇に包まれており、時たま後ろを車が通る程度で人通りもない。
鉄門扉の裏門は取っ手に足をかけるコツさえ知っていれば、簡単に乗り越える事が出来る。
警備システムが死んでいることは確認済みであった。
左右を念入りに確認した後、彼女が門を乗り越えたその先は、ランニングコースの林へと通じている。
進入に成功した彼女は林の中を慎重に進んだ。幸いにも月明かりによって視界が不自由になる事はない。
目的地はこの学校の校舎裏である。
三分ほど歩いて校舎裏に辿りつくと、そこには先客がいた。学生服の男である。
彼女はその男に気づかれないように、林の陰に隠れると、彼の様子を観察し始めた。
制服を着た男は、まだ残暑の厳しい九月だというのに厚手のマフラーを巻き、落ちつかなげに、それを口元に上げたり、熱そうに首元に手を入れたりしている。
月明かりに照らされた物憂げなその顔は、低めの身長と併せて彼を少女のようにも見せた。
相手が自分に気づいていないと確信した彼女は、次にどうしようかと考えをめぐらせ始める。
そんな時。
「ぷっ」
先程まで、ともすれば怯えた様子だった男が、急に吹き出した。
「ふふふふ、あは」
この状況にあって、何故。彼女が相手の真意を図りかねている間

にも、男は体をくの字に曲げ、笑い続ける。
「くく、く、ははは、あははははは」
男は息継ぎをしない。笑い続ける。やがて彼は、折り曲げていた体を今度は逆に月へと向かってそり返した。
パリ、パリパリ。
同時に、どこからか玉ねぎの皮を破るような音が聞こえてくる。
とても小さな音なのに、それは彼女の耳に深く深く入り込んできた。
「あはは！ハハッ、ハハハハ！　ヒャーアッハッハッハ！」
笑い声はどんどん大きくなっていき、夜の空気を震わせる。
バリッ！　と、一際大きい音が響いた。
同時に、彼の口もより大きく開く。
――その光景に、彼女は目を見開いた。
大口を開けた男の口の端が、耳まで届いている。
本来あった唇のラインは、まるで彼の面の皮が紙でできていたかのように破れ、めくれ上がっていた。
そして、顎のラインなど知った事かと耳の横にまでずらりと並ぶ歯。
「アハハハハ

に大きな音が鳴るようになっていた。
その音の正体は肥大化した男の歯、もしくは牙である。男の歯はいつの間にか大根のように大きく、氷柱のように鋭く変形していた。
それに併せて彼の頭部自体が、常時の三倍ほどの大きさにまで膨れ上がっている。あるいは頭に箱を被っているようにも見える光景である。
しかしその頭には、ゴムのように伸びきった、少女にも見えたはずの顔が、歪んで張り付いていた。
比率もめちゃめちゃ。まるででたらめ。こどものらくがき。
生き物であるかすら判別がつかない怪物に、男は一瞬で変わってしまった。
いや、違う、アレは……化け物だ。
人の皮を被っていた化け物が、今まさにその皮を破り、正体を表したのだ。
「ひゃは、ひゃ、ひゃは…」
笑いが、収まっていく。
がくんがくんと揺れながら、その視線が下へと戻っていく。
「ひゃはぁ、あ?」
いつの間にか茂みから大きく顔を出していた彼女と、目が、あった。
食われる。
本能でそう察し、彼女は悲鳴を上げて逃げ出した。

ラブロマンス

逃げ出した少女を、俺は笑い顔で追いかけていた。
口の端が上がってれば笑い顔と定義するなら、これは笑い顔で相違ないだろう。
その頭が胴体の二倍ほどになり、象牙のような歯が並び、その間から腕ほどもある舌が飛び出していたとしても、である。
「ヒャ、ヒャハ！　ヒャヒャヒャヒャ！」
口を開く度、上顎、というか頭の上半分がカパカパと炊飯器のように九十度上を向き、その度に俺の視界が月を捉えようともだ。
夜の学校で、異形の化け物が少女と追いかけっこ。三流ホラーのような光景である。
しかし、これはあくまで現実であり、俺は目の前を走る少女を捕まえ――。
「ヒャ、ホヒャ、ゴキャ…誤解だぁ！！」
説得しようとしていた。
そりゃそうだ。取って食おうなどとは思っていない。そんなの一度もした事はない。
少女を追いかけるうち、ひたすらに重く喋り辛かった顔が、穴の空いた風船のように段々と縮んでいく。
しかし口の端は依然破れたままで、剥き出しになった歯茎と尖った牙が、さっきからありましたよとでも言うように耳まで続いている。
自分の口が、顔が、頭が何故こんなおかしな事になっているのか。俺は知らない。
生まれる前からこんな、人間の皮を被った化け物として生まれてきたのか。それとも何かのきっかけでこうなってしまったのか。
ただはっきりしている事は、俺が大きく口を開けば唇の端が破れる事。

更に大きく笑えばそれが首の後ろまで行き、頭まで巨大化していくと言う事だ。
そのおかげで、俺は笑う時はもちろん、あくびにも気を使わねばならない。
頬にイタズラなどされないよう、親しい友人を作る事も避けてきた。
今までだってバレそうになったことはある。　今日なんて二回もあった。
それでも、それにしたって、こんな致命的な事は初めてだ。
「待て！　違うんだ、これは……！」
呼び出したからには、相手だって知っていて然るべきだと思っていた。　だから少し脅かしてやろうとしただけなのだ。
それが、いきなり逃げ出すだなんて。
「ヒッ！」
悲鳴だかしゃっくりだかをあげ、前を走る少女が振り向いた。
恐怖に染まったその顔は……間違いない。
「片瀬！　片瀬姫足！」
それは同じ水泳部所属。　平素から俺を恐れていた少女、片瀬姫足だった。
名前を呼んでも、もちろん足を止める事はない。
それどころか、叫んだ拍子に直りかけた口がまた少し破れた。
彼女が俺を脅した犯人？　なら何で今更逃げる。　知ってたんだろ俺の口の事を。
いや、そもそも姫足がそんな事するようなタマか？
何かがおかしい。　ちぐはぐだ。　そう思いながらも、辻褄の合う説明は出てこない。
むしろ頭は混乱を増すばかりだ。
俺はひとまず考えるのをやめ、彼女を追うことに専念した。
頭の重さで出遅れた分がようやく帳消しになる。　もう少しで追いつきそうになった所で、俺達は馴染み深い建物にたどり着いてい

た。
俺が毎日部活を行っているプール。　その手前の更衣室の扉に片瀬は手をかけた。
彼女は素早くポケットから鍵を取り出すと、鍵穴に差し込む。
中に逃げ込む片瀬。　それが女子更衣室だと気づき、俺は反射的に躊躇う。
その隙に彼女は扉を閉め、鍵をかけてしまった。
……まずい。　普段のプールの入り口は、ここと隣の男子更衣室。
それにいるかちゃんが普段待機している事務室だけだ。
その三つの扉はここから見える。
しかし、今日だけはもう一つ穴がある。　彼女もそれを目の前で見て知っている。
そう、あの壊れた金網だ。　壊した？　今はそんな違いどうだって良い。
ぐずぐずしていればあちらから逃げられる。
しかしそう読んで、俺が裏側に移動した途端こちら側から逃げるかもしれない。
「ちくしょっ」
迷っている暇は無い。　俺は腰を屈めてドアノブに視線を合わせた。
口を思いっきり開けると、バリバリという不快な音が耳に響く。
躊躇うな。　躊躇うな。
自分に言い聞かせながら、まるでネズミ捕りのように勢いよく顎を閉じる。
ガキン！　それは歯がドアノブとかち合った音ではなく、歯と歯がぶつかった音だ。
目測を誤った訳ではない。
目の前のドアには、既にドアノブが無い。　その部分にはぽっかりと穴が開いている。
金属をかじったと言うのに、俺の歯には何の歯ごたえもなかった

のだ。
俺は喉奥に転がってきた金属製の物体を飲み込んだ。
だからと言って、これが原因で腹を壊す事もないだろう。
……俺は歯も胃も常人とは違う。というよりこの口で飲み込んだものは胃には行かないようで、翌日トイレで発見されることもない。
向こう側で、プラスチック製のすのこの上にドアノブの欠片が落ちたらしい。それが何度か甲高い音を立てた。
俺は扉に手を当て、ゆっくりと押し開ける。
「いやぁぁぁぁ！！」
瞬間。部屋の中で尻餅をついていた片瀬が悲鳴を上げ奥へ、プールへと逃げ出した。
……くそ、選択を間違ったか。思いながらも彼女を追いかける。
彼女からすれば、鍵をかけようやく一息つけたと思ったら、恐ろしい音と共にドアノブが落ち、その向こうから恐ろしい歯やらギラついた目からが見えたといった所だろう。
どこの恐怖映画だ。
頭が元の大きさに戻ったことを確かめながら、シャワーを抜け、消毒槽を飛び越える。
「落ち着け！　違う、違うんだ！」
何が違う。こんなのどう見たって人間じゃない。
目をピカピカさせ、間接からキュインキュン音を出している奴が「ロボチガウ」などと言っているようなものだ。
森で熊に会えば誰だって逃げる。落とし物ですよなんて聞き入れられるものか。
俺は、今の俺はそういう存在だ。いや、もっと禍々しい。
もちろん片瀬は足を止めない。
スタート台の横を、第一コース、第二コースと飛び越えていく。
彼女が向かう先は、やはり金網に隠されたあの穴だ。
そもそも追いついてどうする？　どう説明する？　こんなナリの

奴が言う事を信じてもらえるはずが無い。
それならいっそ口を封じ……。
やめろ、やめろやめろ違う俺は違う違う――。
浮かんだ考えを無理やり消し、彼女の足を止める言葉を考える。
走っている、プール。
「プールで走ると危ないぞ！」
出てきたのは、くだらな過ぎる言葉だった。　言った瞬間頭を抱えたくなる。
「え？」
その所為で、片瀬は可哀想に思える程間抜けな顔で振り向き、そして――。
コケた。
俺の言葉に言霊が宿った訳は無く、あまりのアホらしさに彼女の膝から力が抜け、頭の中が運動をつかさどる部分まで真っ白になったせいだろう。
どうあれ、彼女は生粋のドジっ子でもこうはできないだろうと言うほどに綺麗にコケ、頭から今日は人を徹底的に愛するらしい地面につっこんだ。
「だ、大丈夫か？」
そのサマに、俺は原因が自分である事も忘れ、小走りに駆け寄った。
「こ、来ないで！」
しかし、その足を竦ませるに相応しい声が、夜のプールに響いた。
片瀬は怯えている。
目は見開かれ、小さな口から覗く歯は、かちかちと絶え間なく打ち合わさっている。
４と書かれたスタート台にすがりつき、必死に足を動かしているが、震えるそれは足の裏と大地の接触を許さない。
どうしようもない拒絶のポーズだ。　どの国だろうがこのボディランゲージが示す意味は変わらないだろう。

一瞬、頭に血が上りかけた。　俺だって、好きでこんな口をしている訳じゃない。

しかし、その熱は上ったのと同じ速度で唐突に冷める。

……でも、そりゃそうだろう。　それはそうだ。

俺はマフラーで、いまだ破れている口の端を隠した。

だからこそ俺だって、この口の事を隠して生きてきたんだ。

誰もこんなもん受け入れられるはずが無い。　自分でも不気味だ、吐き気がする。

「……ごめん」

反射的に謝ってから、俺は言葉を続けた。　顔を逸らし、声をしぼり出す。

「本当に、その、お前を食おうなんて、思った訳じゃないんだ。こんな口で、説得力が無いだろうけど」

片瀬のしゃくりあげるような呼吸が耳に響く。

「普段も、別に片瀬の事を驚かしたいわけじゃないんだ。ただ、ただ……」

俺がおかしな事をするのは、口が裂けそうになった時に突飛な行動を取っても不審に思われない為。　それが第一だったが、もう一つ。

普通に振舞っていても、俺のいびつな部分を誰かに見破られそうで怖かった。

例え口が裂けなくても、俺の精神構造は普通の人間とは異なっているのではないか。

それが日常の受け答えに出て、それで俺の正体が発覚してしまうのではないか。

それが怖くて、俺はいつでもおどけていた。

しかし、怯えきった彼女に、そんな自分の内情を語るのも空しい気がした。

どれだけ悲惨な事情を言われようが、怖いものは怖い。

言葉を尽くしたって、それが化け物の口じゃ無駄だ。

「……お前の前にはもう現れないようにするから、この事は秘密にしてくれ」

結局言いかけた言葉をしまい、そう告げて俺は彼女から背を向けた。

多分、部活はやめる事になるだろう。　更には学校も。

彼女が話したなら、家だって出て行かなければならない。

じゃなきゃ実験動物だ。

両親も、綾菜にだって迷惑がかかる。

アイツにだけは説明しようか。　いや、同じ顔されたらその場で死にそうだ。

だからって、俺には彼女を食い殺す事なんて出来そうになかった。

それをしてしまえば、俺が今主張している一切合財が嘘になる。

俺は正真正銘、化け物に成り下がるだろう。　いや、もう充分化け物だけどさ。

「ま、待って！」

歩き出した背中に声がかかる。

俺は思わず足を止め、勢いよく振り向いていた。

びくりと片瀬が体を震わせた後、ぶるぶると首を振った。

なんだ、何でもないのか。　ため息をつき、また首を戻す。

「ち、違うの！」

またも背後からそう叫ばれる。

もう一度、今度はゆっくりそちらを向く。

ぶるぶるぶるぶる。

首を前に戻す。　今度こそ歩きだす。

「まって、違うの、止まって！」

さっきとは立場が逆だ。　しかし彼女は俺の足を止める言葉を持っていた。

「私は、貴方なんて怖くない！」

もう一度、振り向かざるをえなかった。

「超震えてるじゃん」

そして、つっこまざるをえなかった。
彼女は相変わらず目の端に涙を浮かべ、体は見て分かるほど震えている。
「ふ、震えてない！」
片瀬が自分の体を抱き、そう叫ぶ。
俺は口を開け、直りかけていた頬を破って見せる。
「ひっ」
片瀬が悲鳴を上げる。
そりゃそうだ。　あぁ、そりゃそうだ。　諦めて、俺は立ち去ろうとした。
いい加減独楽のように回転しすぎて目が回りそうだ。
しかし、その時、温かいものが俺の手を包んだ。
「……ッ！」
片瀬が、俺の手を握っていた。
もう振り返るまいと決めていたのに、首を回し、顔を彼女に向けざるをえなくなる。
「怖く、ない」
片瀬は、相変わらず震えながら、俺を見上げ、笑って見せる。
その時の俺の衝撃が、理解できるだろうか。
彼女の目の前にいるのは、人間ではない。
彼女はそれが分かっていない訳ではない。　体の震えがそれを証明している。
それでも、片瀬は俺の手を取った。
あるんだ、こんな事が。
言葉が出なかった。
そして、握られた手をどうして良いのかも分からなかった。
先程から片瀬が俺を引き止めたにも関わらず逃げようとしたのは、彼女に期待してしまうのが怖かったからだ。
化け物の俺が、もしかして受け入れられるのではないかと。
それが今、叶えられている。

夢じゃない。彼女の体温が、震える手がそれを証明している。
本当に良いのか？　この人を信じてしまって良いのか？
俺は……。
「怖くないよ」
気づけば、俺の手のほうが震えていた。　彼女に向き直ると、握った俺の手にもう一方の手も重ね、笑顔を深くする。
もう、我慢できなかった。　俺は彼女の手を振りほどく。
そして彼女の背中に両手を回し、思い切り抱きついた。
「え、あ、ちょ！？」
「こんな事をしても？」
試すように、彼女に問いかける。
実際は、彼女に甘えたくて甘えたくて仕方なかった。
目の前にずっと待ち焦がれたものがあるのに、我慢などできない。
この口が耳まで裂けても、そんな事は言えないが。
「うん、大丈夫……」
体は相変わらず震えていたが、片瀬はそう答え、俺の背中に手を回してくれた。
そしてぽんぽんと、俺をあやすように背中を叩く。
自分の足も震えているくせに。　まぁ支えるのにちょうど良かっただろうと、俺は自分に都合よく考えた。
「もっと色んな事して良い？」
「それは……もうちょっと仲良くなってからかな」
余裕が出てきて軽口を叩くと、彼女もそれに応えてくれる。
そうか、こういう子なんだな。　抱きしめてからそれを知った。
軽く笑って、名残惜しいが体を離す。　考えてみたら、女の子抱きしめるなんていうのも初めてだったな。
しかし、彼女の足を見た時に気づいた事があったのだ。
「片瀬、膝から血ぃ出てる」
「え？　あ、本当だ……」
転んだ時に擦りむいたのだろう。　彼女は困り顔をしているから

拭くものなど持っていないようだ。
「まったく、ハンカチ持ってる大輔さんに感謝しな」
制服を漁ると、びっくりする事にハンカチが入っていた。しかもフリル付き。
そういえば綾菜に返してなかったな。今朝綾菜に血を吹かれたとき、強奪したままだったと今更気づく。
ここに来るまで動転していて、着替える気が起きなかったのも幸運だった。
「あの」
屈もうとした俺に、片瀬が呟く。
「ん？」
「姫足が良いな、呼び方」
そんなことを言いながら微笑むのだから、もう一回抱きしめられても文句は言えまい。
グッと堪えて、俺は頷いた。
「わかったよ、姫足」
「うん、大輔ちゃん」
「ちゃん！？」
「い、嫌かな？」
「嫌ってか……」
呼ばれた事ないぞ、そんな呼び方で。
しかしまぁ、うん、なんか悪くない響きだ。新鮮でもあり、なんか懐かしい。
「いいよ、大輔ちゃんで」
屈み、片瀬……姫足の膝にハンカチを押し当てながら返事をする。
目を細めてしまったのは、その呼び名がくすぐったかったのと、彼女の足が夜闇にまぶしかった所為だ。
「うん、大輔ちゃん！」
多分姫足は、足よりももっとまぶしい笑顔で頷いた。
見上げられないのは、更にもっとまぶしいものが見えてしまう可

能性があるから。
今は、自分のこんな真っ赤なチェリーっぷりも微笑ましい。
「……でも、学校では言わないほうがいいかもな、それ」
三橋に睨まれそうだし。　鹿子にからかわれそうだし。　綾菜に冷やかされそうだし。
「それじゃ、秘密だね」
「あぁ、秘密だ。もちろんふぉの口の事もな」
笑いながら、口の端を破かないように指を差し入れて見せる。
「うん！」
あぁ、姫足はやっぱり眩しい笑顔で頷いていた。
見上げてしまってから、それに見惚れる。
ごめんなさい、僕は穢れない純情ボーイにはなれそうもないです。
姫足のスカートの中は穢れなき純白ガールでした。
そこで、そういえば、と思い出す。
結局彼女があのメモを寄越したのか？　いや、彼女の態度からしてそれは無さそうだ。
では――。
ドボン。
と、彼女の足の間から見える景色。　そこを何かが通過した。
それは水音を立て、プールの反対側に落下する。
姫足もそれに気づき、振り向いた。
俺は立ち上がり、何が落ちたのか確かめる。
すると、月に照らされ、水中に何かが影を落としているのが見える。
俺達の直線状にある四番コース。　そこに筆で線を引くように、黒いモノが伸びていく。
「え？」
「大輔ちゃん！」
「え？」
混乱している俺を、姫足が突き飛ばした。

尻餅を痛がっている暇も無い。
スタート台の下から一気に飛び出した何者かが、姫足の頭上から彼女に覆いかぶさる。
そしてそのまま顎で着地し、ジェットコースターのレールのように体を滑らせ、俺の前でそれは鎌首をあげた。
後には、姫足の姿が無い。
「え？」
それの見た目は、巨大な蛇だった。
体長五m。鱗は夜より黒く、月の反射を受け滑らかに輝いている。
腹は人の肌のような質感を持っており、作り物ではない証にゆるく上下していた。
横幅が広く、頭が大きい。その頭が上を向き、喉がゴクリと動いた。
あぁ、口に入れたものを飲み込んだんだ。
口に入れたもの？
そこにいない、姫足に決まっている。
いや、今まであの口の中に納まっていたのか？　いくら大きいといっても、頭の大きさは一m程度。それに蛇が獲物を飲み込むには、長い時間をかけると聞いた事がある。
呆然とする俺を蛇が笑った。口の端を上げ、確かに笑った。
これは、蛇じゃない。
蛇の皮を被った、化け物だ。
まるで睨まれた蛙のように、体が動かない。
それでも、凍った体を何とか地面から引き剥がそうとする。
熱源は、握られた手の温もり。
それを頼りに、俺は腰を浮かし、相手を睨む。
――この、化け物！
腰のバネを使い体を一気に起こすと、俺はそいつの頭をめがけ口を開いた。

蛇が驚いたかのように、まぶたが無いはずの目を見開く。
瞬間、頭の中に何かが過ぎた。
それが何かと考える前に、口が閉じていた。
大きく開けたはずの俺の口は、唇の端を破いただけに留まり、まるで蛇に接吻するかのような距離で留まっている。
蛇の目が細められたかと思った時には、奴は首を捻り、凄まじい速さでプールサイドを駆け抜けていた。
そして、急に曲がり金網の一角に体当たりする。
それはあっさりと倒れ――当たり前だ、立てかけてあるだけなのだ。　蛇はそこからしゅるりと屋外へ逃げ出した。
追い、かけなければ。
顔を突き出した間抜けな体勢を引っ込めるのに、かなりの力を要する。
俺が思考のまとまらないまま蛇を追おうとすると――。
ビー！　ビー！　と、突然大きな音が夜の学校に響く。　びくりと体が震えた。
ビ……。
が、布団に遮られた目覚まし時計の如く、それはすぐに鳴り止む。
なんだったんだ、なんなんだいったい。
走って追わなければ。　そう思うのに、体がのろのろとした歩みしかしない。
意味が分からない、沢山の事が起こりすぎて。
正体がバレて、追いかけて、拒絶されて、受け入れられて、でも、その子が食われた。
俺は永遠に彼女を……いや、追いかけなければいけない。
俺は立ち上がった。
まだ消化されてないかもしれない。　あんなにあっさり飲み込まれたのに？
今、腹を割けば助かるかも。　御伽噺じゃあるまいに。
とにかく追いついて……。　あの速さじゃ無理だ。

『本当は分かってる』
違う！
『あれは助からない』
「違う！！」
叫んで、違和感に気づく。　今俺が叫び返したのは、何だ？
見回した俺の側には、倉庫しかない。　姫足が気にしていた、開けずの扉だ。
そういえばあの時にも、声を聞いた。
「誰か、いるのか？」
問いかけるが、返事は――。
『ええ』
あった。　短く、はっきりと。
混乱する頭。その限界が今まさに訪れようとしていた。

双子と皮と冷蔵庫

『閉じ込められてるの』
その声は、確かにその倉庫に中から聞こえてきていた。
倉庫の中に？　そんな、この倉庫は開けずの間で、少なくとも俺が入部してからは誰も空けていなかったはずなのに。
『助けて』
戸惑っている俺の耳に、催促の声が響いた。
その声は落ち着いているような、忙しないような。
閉じ込められていると言うなら、後者は当然かもしれない。
「それなら、後で来てやる！　今は鍵を探してる時間なんて……」
『鍵ならもう壊れかけてる』
「だから俺は――」
『思いきり引っ張れば開くわ』
「人の話を――」
『早くしなさい』『このビビり』
「だぁぁ！」
その声の挑発に乗り、俺は開けずの扉に手をかけ、思い切り引っ張る。
一瞬引っかかる感触がしたが、声の言う通り、開けず扉はあっさりと開いた。
扉を開き、まず目に飛び込んだのは真っ白な四角形だった。
開けずの扉の中は物が乱雑に積まれているが、一番上にあるそれは、色と俺の顔四つ分ぐらいの大きさのせいで、やたら目立つ。
なんだこれは。　俺がそう思考し始めた刹那――。
ズルッ。
正解を教えようとお節介を焼いたのか、その物体が滑り落ちて正体を明かし始めた。
そうか、物を詰め込みすぎて、開けると絶対崩壊するから開けず

の扉だったのか。
でも、だからって、だからこそ――。
「何で冷蔵庫ぉ！？」
それの正体は、大型の冷蔵庫だった。横向きに、しかもわざわざ上に詰まれたそれが、ここを開けずの扉にした最大の要因に違いない。
ズルズルと、それは俺の身長以上の長大な全長を晒しながら落下してくる。
「うわあぁぁぁ！！」
足が動くより先に、口が叫び声を上げていた。それは、俺の本能だった。
瞬間、俺の上顎がバリバリという音と共に、意思以上の速度で跳ね上げられた。
視線が月を捉えると同時に、下顎が何かの重みを検知する。
自重で降ろされた上顎もそれを捉えると、それは勢いそのままに歯の裏を滑っていく。
前歯、小臼歯、大臼歯、更に人間には存在しないはずの奥の奥歯を通り、唾液に塗れた舌をスロープのようにし、俺の口蓋垂――のどちんこをこすりながら奥へと滑り込んでいったそれの正体を、俺はもちろん分かっていた。
喉の奥が陵辱されていく感触と、埃の味、その他諸々のせいで、目に涙が滲む。
ガチン！　長大なそれが通過した途端、まるで特定の歯を押すと手が挟まれる玩具のように、俺の口が勢いよく閉じる。
唾液と共に、俺は喉奥に引っかかるそれを飲み干した。
途端に吐き気が襲い、後ろを向き自重で落ちるが如くプールに頭をつっこみ、水を口に含んで埃を吐き出した。顔を上げると、水鏡にこの世のものとは思えぬ不気味で、悪ふざけのようで、醜悪な化け物の姿が映る。
俺は、今何をした？　元の大きさに戻った頭で考える。

『食べた』
『冷蔵庫を食べた』
背後から、またしても声が響いた。　水鏡には何も映ってはいない。
『食べられるじゃない』
『口は飾りかと思ったわ』
『立派な化け物』
『丸呑みの化け物』
『『人食いの化け物！』』
「食っへねぇ！！」
思わず、俺は叫び返した。　舌がでろんと飛び出したが、目の前にいる、自分が話している相手を初めて直視し、それをしまうのを忘れる。
『そうね、食べてない』
『食べる前に躊躇った』
俺の目の前には、双子の少女がいた。　同じようにブルーのキャミソールを身につけ、同じように髪を右に流している。
いや、あまりにも高速で動いているから二人に見えるのかもしれない。　二人が体が透けて見え、そこから後ろの景色が見えるのもその影響だ。
そう思いながら、それを確認した刹那、俺はダッシュで走り出していた。
『何で逃げるの？』
『お礼ぐらい言わせたら？』
「うるさい、うるさい！」
逃げ出した訳じゃない。　俺は姫足を探さなきゃいけないんだ。
躊躇った？　何の話だ。　相手の言葉に惑わされないよう叫びながら裏門を目指す。
多分逃げたのはこちらの方向だ。　あの大きな音もこちらから鳴った。

『もう追いつけないわよ』
『それに消化されてるわ』
「まだ分からないだろ！」
叫びっぱなしで口の端が治る暇も無い。　走っているのに、声はまるで離れない。
裏門に到着。　そこで――。
「ギャァッ！」
そこで俺は、思わず大声を上げた。
蛇が、あの大蛇が裏門の鉄扉に寄りかかっていたのだ。
『違うわ』
『よく見て』
双子に言われ、大きく開けかけていた口を閉じ、それをまじまじと見つめる。
よく見れば、それは所々鋭角に折れ曲がり、ストローの袋のように縮こまっていた。
目の部分に瞳は無く、レンズのような透明な膜だけが残っている。
『蛇の目はまぶたが無い代わり、そういう透明な薄皮で覆われているのよ』
『鼻の穴まで分かるわ。　相当綺麗に剥けたわね』
「じゃぁこれは、蛇の、皮？」
『そう、スキン』
『貴方の面の皮と同じ物よ』
「ぐっ」
双子の声が終わるより先に、蛇の皮が乗った取っ手に足をかけ、門の上に手をかける。
グシャリと嫌な感触を足元に感じるが無視。
『どうやって探すつもり？』
「どうやってって……！　あんなでかい蛇がうろついてりゃぁ」
相変わらず聞こえる声に律儀に答えながら、体を引き上げる。
『もう皮は脱ぎ捨ててあるでしょう』

『そして人間の皮を着たはずよ』
着地。　裏門から出ると、いくつかに分岐した細い路地と、それを区切る塀に囲まれた一戸建てが並んでいる。
その先がどう繋がっているか、俺はあまり把握していない。校舎をぐるっと回って正門のほうへ逃げたのかもしれないが、あちら側は人通りも多い商店街だ。　あんなでかい蛇が現れれば騒ぎにならないはずがない。
こちらから先だって、近くにデパートもあるし人通りが無い訳じゃない。　でも、何だって？　人間の皮を、被った？
考えて、頭に占める『もしかして』の可能性が、むくむくと、ヘビ花火のように大きくなっていく。
「皮ってのは、もしかして」
恐る恐る、俺は背後を振り返った。
どうやったのか、体が透けたそっくりの双子は裏門に腰掛け、俺を見下ろしている。
「これの事か？」
破れた頬、そこへばりついているかのような自らの皮膚を引っ張って見せると、彼女達は満足げに頷いた。
『『分かってるじゃない』』
同時に言い、同時に首を縦に振る。
そうか、やはりそうだ。　やはりアレは、俺と、俺と……。
『そう、アイツは皮を被り、人間のフリをして生きてる』
『貴方と同じように』
人ならざる化け物。　それが俺に近しい存在だと気づいていた。
いつから……？
『だから、貴方も躊躇ったんでしょ』
『相手が人間だ、って』
「俺は……」
冷蔵庫を一瞬で飲み込める口。それが、頬を破く程度で留まったのは、あの瞬間、その可能性に気づいてしまったからだ。

蛇にびびったとか、腹の中にいたかもしれない姫足を考慮したとか、そんな事ではない。

『でも、それは勘違いよ』

『貴方もあいつも、人の皮を被った化け物だもの』

そんな事は言われずとも分かっている。分かっていたのに、俺は躊躇った。

そして、もう一つ分かったことがある。あいつが人間の姿で、駅や商店街に入り込めるなら……もう探しようが無い。

もう、追えない。ようやくそう悟り、俺は裏門に背を預け、座り込んだ。

『多分、口に入れられた時点で手遅れだったわよ』

『貴方だって、食べた冷蔵庫は吐き出せないでしょう?』

慰めているつもりなのか、幽霊……双子は俺の左右に別れて囁いた。

確かに、俺の胃には先程食べた冷蔵庫の感触などない。あの冷蔵庫はどこに消えたんだろうか。そして姫足は。

マフラーで口元を隠す。隠してから、俺はようやく頬の皮が繋がった事に気づいた。

汝は化け物なりや

「それで……お前らは、何なんだ」
学校から少し離れた市民公園。　そこで俺は、ガムが裏にこびり付いたベンチに座り、双子に問いかけた。
頭は冷えているとは言いがたいが、先程よりマシな状態だ。
『化け物』
『貴方と同じね』
俺の左右に座った双子はそう答えながら、意地悪そうに目を細めた。
こいつらは、どうしても俺に自分が化け物だと認識させたいらしい。
「……化け物って言うより、幽霊に見えるんだが」
宙に浮くし、透けてるし。　おまけにすれ違った人間にはまったく認識されなかった。
幽霊のテンプレで型作って、ポンポンと二個押し出したら出来ましたみたいな奴らだ。
しかもこいつら、先程から歩けど歩けど一定距離を保ってついてくる。
双子がその辺を見回していようが、完全に後ろを向いていようが俺から離れる気配はない。
「しかも俺に取り憑いてる……」
『失礼ね』
『皮を借りてるだけよ』
皮ってのは俺の頬みたいに、露出すると困る化け物の本性を隠す為、化け物なら誰でも持っている擬態機能らしい。
で、それを故意か不意に剥いで、正体を現すのだ。　逆に言うと、この皮を持っているのが化け物ってことだろう。
「借りてる？　ってことはお前ら自前のを持ってるんだよな」

『なくしたのよ。この体じゃ自力で動けない』
『だから貴方の皮に掴まってるって訳』
……訂正、持ってない奴もいる。　何でそんなもの失くせるんだ。
「じゃぁお前らも、皮被ってりゃ普通の人間？」
『人間として暮らせる』
『貴方や、あの蛇みたいにね』
俺の問いに、双子は皮肉めいた笑みでそう答えた。
そうか。　あの蛇も、やはり人間に混じって暮らしているのだ。
そして、多分――。
「……この街で起きてる行方不明事件。　あれもアイツの仕業なのか？」
問いかけると、双子は同時に肩を竦めた。
『多分ね』
『貴方が無意識に食べてる、とかじゃなければ』
双子のくだらない冗談を流し、俺は考える。
やはりあいつが人を殺して、その人達が行方不明扱いになっている。　そう考えるのが自然だろう。
今日の、姫足のように。
我知らず、拳に力が篭っていた。　立ち上がり、ポケットの小銭でコーヒーを買う。
「お前らも飲む？」
『それ嫌味？』
『だからモテないのよ』
俺が尋ねると、音もなく着いてきていた双子は同じ形の皺を眉間に刻んだ。
それから自販機に腕を突き出してみせる。　するとまるで出来の悪い３Ｄゲームのように自販機に手がめり込んだ。
「もっかい聞くけど、幽霊じゃないんだよな？」
ぎょっとなって再度問いかけつつ、ベンチに座りなおすと、俺は缶の蓋を開けた。

『しつこいわね』
『私達は死んだ覚えもないし、お経で成仏する気もないわ』
「幽霊は皆そう言うんだよ」
再び、同じように左右に座った双子に俺が言い返す。
軽口を叩くと楽になる自分に安堵と嫌悪を感じ、それを俺はコーヒーの苦味で流した。
「お前ら……俺らみたいなのって、沢山いるのか？」
言いかけた時点で双子が顔をしかめたので訂正すると、彼女達は出来の悪い生徒を許す教師のような笑顔で頷く。
『どうかしら？』
『組織はここ十年で五十匹処分したって言ってたけど』
なんとなしにした質問で、いきなり未知の単語が出て唖然としてしまう。
頭を振って、俺はそれについて尋ねた。
「なんだ組織って。化け物を闇から闇に葬る凄腕エージェントが揃ってて、存在は絶対秘密みたいな奴か」
『あら、知ってるじゃない』
『概ねその通りよ。どこで知ったの？』
茶化すつもりで適当に並べたら、合っていやがったらしい。
双子がまじめに頷くので、こちらがびっくりしてしまった。
「ゲームと漫画だよチクショウ。んなベタなもん作りやがって」
『人間の対処としては、それがベターなんでしょ』
『未知なる生き物に遭遇した時のね』
だからってもうちょっと虚をついても良いだろう。話は早くてありがたいが。
誰だかに文句を言いつつ、俺はコーヒーを啜る。
「……つうか、それならその、組織って奴は今回の件で動いてないのか？」
俺らみたいな一般人でも……と、俺は人間じゃないんだよ、な。
まぁ、ニュースでもやっている事を、その組織とやらが知らない

訳は無いだろう。
『もちろん動いてるわ』
『私達の悩み所もそこ』
尋ねると、双子はコーヒーを飲んだ訳でもないのに渋い顔をした。
「なんで？　黙ってても、そいつ等があの蛇を何とかしてくれるんだろ」
その反応に、俺は首を傾げる。
こいつらにとってはどうでもいい事のはずだ。　蛇と関係があるわけでも無し。
『組織には、人食いの化け物か人も食えない化け物かなんて大した違いじゃないの』
「嫌味かそれ」
『重要なのは、化け物かそうじゃないかだけ』
『見つかったら、どっちにしろ処分よ』
「処分……ね」
件の蛇だけを殺し……処分して帰ってくれるというわけではないようだ。
つまり、俺達は害虫みたいなもんということだろう。
アブラムシ取る時に、良いアブラムシと悪いアブラムシが区別されないように、その人格経歴なんかは問われず、化け物ならば問答無用で駆除されてしまうと言う訳だ。
「迷惑な話だな」
『相手もこっちをそう思ってるわよ』
『異端なのはこっちなんだから』
人の皮を被った化け物。　確かにそんなものが全人口より多いとも思えないし、イレギュラーなのは”こっち”なのだろう。
俺も確実に、蛇と同じカテゴリに属している。　少なくとも、この世界にとっては。
「……でも、お前らならそう簡単に見つからないんじゃないのか？」
そんな考えを振り払って、俺は双子に尋ねた。

消えるし触れられないしで、こいつらならどんな奴でも見つけられないし捕まらないはずだ。
大体こいつらも普段は人間と変わらない姿をしている、という話だし……。
『貴方ならともかくね』
『でも、そうも行かない。何故ならあちらには占い師がいるから』
思考を読んで皮肉を言われた気がする。
が、こいつらのそれに付き合っていてもしょうがないと理解し始めた俺は、後半に出た新しい単語に反応した。
「占い師？　なんだそりゃ」
俺の問いかけに、双子は満足そうに笑うとふわりと浮かび上がった。
ぎょっとする俺を尻目に、歌うように語る。
『曰く、どんな化け物も半年で見つける』
『曰く、人間と化け物を判別する』
『組織を組織たらしめている最高のエージェント』
『見つけた化け物数知れず』
俺の目線より少し上で、踊るように漂う。
そしてその言葉達には、聞き逃せない部分があった。
「ちょ、ちょっと待て。占うって具体的にはどうするんだ？」
『本当に占うかは分かってないわ』
『あくまで伝聞』
『水晶玉を使うかもしれないし、相手の髪をちぎるのかもしれない』
『一匹だけ見つけるのかもしれないし、同時に複数見つけるのかもしれない』
特に後半に力を篭めて、左右から俺を見つめながら双子は告げた。
「……つまり、俺達も見つかる可能性があるって？」
『貴方だけ見つかってお仕舞いってこともあり得るわ』
『蛇はそれを期待してるんじゃない？』
足をぶらぶらと揺らしている双子に言われ、俺はハッとなった。

人を丸呑みにする化け物。　さっき考えた通り、人から見れば、俺だってあの化け物と一緒なのだ。

こんな口をしていて無害な化け物ですなんて、信用されるはずがない。

そう思っていたからこそ、俺だってずっと口の事を隠し続けてきたのだ。

しかし、蛇は俺の秘密をどこかで知り、あのメモを俺に送りつけた。

片瀬もきっと何らかの手段で呼び出して、あわよくば俺に食わせようとしていたのだ。

だが俺が目論み通りに動かないと知ると、自らが彼女を食った。

その罪を俺に被せる算段が、奴にはあるのかもしれない。

しかしそんな事、今はどうでも良い。　あいつがどういうつもりだろうと、関係ない。

「そんな事の為に、片瀬……姫足は殺されたのか」

そいつのくだらない策略の駒にされて、姫足は死んだ。　それだけは、確かだ。

あんなに小さくて、怖がってばかりで、それでも勇気を絞って俺の手を握ってくれた少女を、殺した――いや、もっと悪い。消してしまった。

許せない。　だったらどうする。　止められるのか、俺に。　先程蛇を食い損ねた光景が、頭の中に蘇る。

しかし、俺がやらねばならないだろう。　俺が、アイツを……。

『何か思いつめた様子だけど』

『貴方には蛇を食べて欲しくないの』

「……なんで？」

双子の意外な言葉に、思わず睨むような表情で顔を上げてしまう。

『蛇を助けたいわけじゃないわ』

『もちろん貴方を心配してるわけでもない』

俺のガンつけにも双子は動じた様子はない。　超然と、俺を見下

ろしている。
「そりゃ、見れば分かる」
先程からの双子の言動は、どう見ても俺や蛇の心配をしているようには見えない。
今俺を見る冷えた視線もそれを語っていた。
こいつらに腹を立てても、いろんな意味で無駄だ。
ため息をつき、双子に話の続きを促す。
『貴方が内緒で蛇を丸呑みにしたとして、占い師にそれは伝わらないでしょ』
『調査がすぐに打ち切られる事はない』
いい子ねとでも言いたげに双子は相似形に笑ってから、話を続けた。
それも、そうだ。　だが俺が「蛇は退治しました」なんて手紙を出す訳にもいかない。
匿名の手紙ってのがどんだけ神経逆撫でるかは、今日身をもって知ったし。
「だったら……どうするんだよ」
『あいつが、占い師以外の組織の人間に見つかるのが一番ね』
「そんなのいるのか？」
『貴方が言ったんじゃない』
『化け物を闇から闇に葬る凄腕エージェント』
まだ不機嫌な俺の顔を、双子がからかうように覗き込む。
『見つけるのが占い師』
『実際に葬るのが、狩人』
組織というのは、あまり凝った名前をつける連中ではないらしい。
しかしシンプルな名前だけに、自分が人間扱いされていないことをひしひしと感じる。
『原則、狩人と占い師は二人だけで事件に当たる』
『片方がいればもう片方も街に潜入しているはずだわ』

「二人って……少数精鋭にも程があるだろ」
ずいと寄ってきた双子の顔を押しのけよう……として手がすり抜ける。
決まりの悪い両手を、俺はコーヒーを飲むことで誤魔化した。
先程から細かいようだが、律儀につっこみを入れていかないと素面では聞けない話だ。
馬鹿馬鹿しい。　何より自分がその馬鹿馬鹿しい話の一端を担う馬鹿馬鹿しい化け物なのが馬鹿馬鹿しい。
こんな口がでかいだけの化け物を狩る為に、あちらも組織を作った訳じゃないだろうが。
『それで成果が出てるんだから、文句を言う人もいないんでしょ』
『こっちからすれば不満タラタラだけど』
あの蛇みたいのを、二人……いや、狩人一人で倒しているとすればとんでもない話だ。
いや、化け物というのはあの蛇が飛びぬけているだけで、俺や双子みたいな大したことないのが大半なのかもしれない。
二人ってのだって、組織とやらが四畳半で暮らすような小さな物だからなのかもしれないし。
……しかしそうなると、蛇を探すにもどうにかするにも役立ちそうにないな。
見つかるのは嫌だが、かと言ってこれ以上被害が出るのも気分が良くない。
二律背反という奴だ。　一応まだ、俺の視点は一般人寄りのつもりである。
『まぁ、どうしても食べたいって言うなら、止めないわ』
『誰に見つからなくても、普通の人間のフリは出来なくなると思うけど』
微笑みながらどこか冷めた目で、双子は俺を見下ろした。
化け物とはいえ、それを食ったなら俺は多分、この人間としての視点を失うだろう。

蛇が何故人を食うかは知らないが、俺は奴の同類と呼ばれても反論できなくなる。
今のところ俺と奴を線引いてる事柄は一つだけだ。
人を食ったか、食わないか。しかもそれは、自分の中での線引きでしかない。
奴と同じレベルまで落ちてまで、蛇を殺したいか？
いや、普通の人間ならそんな事考えるまでも無く、目の前で大切な人が殺されたら復讐しようとする物なのではないのだろうか。
天秤にかけている時点で、既に俺の思考は人間と異なっているんじゃないのか？
だからといって、そんな人間らしさの為に奴を殺すなんて、それもおかしい。
『保留ってことで良いかしら』
『冷えてきたわ』
煩悶する俺の思考を、しかめ面の双子が遮った。彼女達は同じように丸出しの肩を抱いている。
そりゃそんな格好なら冷えるだろ。しかし今までそんな仕草まったくなかったぞ。そもそも温感機能がその体に備わってるか、非常に怪しいところだが……。
「まぁ、一旦家に帰るか」
実は、綾菜にはデートだと言って出てきたのだ。今夜は帰らないかもと言ったが、あの女まるで信じていなかった。
その抜群の信頼を裏切ってやってもいいのだが、俺の体も冷えてきたしな。
「お前ら、他の人間には見えてないんだよな」
『そうね、皮を借りてる貴方以外には姿も見えないし声も聞こえないわ』
『その所為で苦労したわけだしね』
改めて確認すると、マフラーを緩めて足を自宅へと向ける。
『それと、気づいてる？』

『貴方の正体を知ってるって事は』
が、双子の言葉に緩めたマフラーを、また口元に引き上げる。
拒否のサインが伝わったのか、そこで双子は言葉を切った。
俺の正体を知ってるって事は、俺も、蛇と知り合いの可能性がある。
それだけじゃない。蛇は、あのプールの金網を当たり前のように倒した。
アレが既に壊れている事を知っているのは、俺達、水泳部員だけだ。
「……まずは家に帰ってからだ」
半ば自分に言い聞かせるようにして、俺は自学へと向かった。

双子と双子

我が家に入るのに、何を緊張する必要などあろうか。
家についた俺は、俺は息を大きく吸い、それからなるべく静かにドアノブを回した。
「おかえり～」
だというのに、やたら暢気な声がそれに反応し、声を出す。
声の感じからして居間にいるのだろうが、それにしても耳が良い。
もしや蛇が綾菜を狙うのではないか。　なんて考えもしたが、ひとまず無事のようだ。
心配なんてしちゃいないが、ほっと息を吐く。
『途中で急に青くなって』
『慌てて帰ったくせに』
「うるせぇ」
茶々を入れる双子を睨む。　つうか今、そんなに分かりやすい反応したか、俺？
「なに～？　何その反抗期真っ最中みたいな返事」
自分が言われたのだと思ったらしい。　居間から綾菜が不満げな声を出す。
やはり双子の声は聞こえていないようだ。　確認した俺は、靴を脱ぎ居間を覗いた。
そこではパジャマ姿の綾菜が、股を開いた正座で足を折りたたみ、反り返っている。
声だけでなく見た目も充分バカっぽい。
「さてはフラれたんでしょ、大輔」
中身もバカ確定。　居間に入り、綾菜の両肩を押さえつけてやる。
「いたたたた」
多分風呂後のストレッチでもしているのだろう。　悲鳴を上げながら綾菜は体を倒し、押されるに任せた。

『ふぅん』
『そっくりね』
おそらく俺の頭の上からひょっこり顔を出したであろう双子が、そう呟いた。　お前らには言われたくない。
綾菜は痛気持ちいいといった様子で、目を細めている。　しばらくして手を離すと、今度は足を伸ばし、体を前に倒しながらこちらを見た。
「へいへい」
意図を悟り、俺はため息をつきながら背中を押してやる。
その背中は外から帰った俺とは対照的に火照っており、触れると汗が滲んだ。
柔軟してから風呂に入れば良いのにと思うのだが、本人に言わせると、こちらの方が寝付きが良いんだそうだ。
「ん、ふっ」
綾菜はそんな俺の考えも知らず、床と体を接触させている。
――例えば、俺がここで、今日あった出来事を話したらどうなるだろう。　その柔らかい体を今まさに育みながら、俺はふと思いついた。
忠告ぐらいはするべきかもしれない。　俺は蛇に目をつけられているのだろうから。
しかし何が言えるっていうんだろう。
姫足は明日学校に来ない。
水泳部には人食いの化け物が紛れ込んでいるかもしれない。
というかお前の弟がそうだ。
……言えはしない、何も。
「どうしたの、大輔？」
表情も見えないくせに、綾菜が俺に問いかける。　こいつが敏感なのは、耳ではなく気配になのかもしれない。
「別に何でもねぇよ」
一際大きく押すと、ごつっと音が鳴った。

「いったぁ」
額を押さえて、綾菜が顔を上げる。
ニヤリとした顔で立ち上がる俺に、奴は文句を言おうと口を開いた。　が、開いて、一度つぐんで、真面目な顔で別のことを言った。
「何か相談があれば乗るよ。割とマジで」
化け物がいるのだから、超能力者だっているのかもしれない。
占い師って奴もその一種のようだし。などと姉の顔を見ながら考える。
「相手がミーヤならなって思っただけだよ」
もう一回笑って見せた。　が、すぐに目を逸らしたのは失敗だったかもしれない。
綾菜の顔を再度見ることが出来ないまま、俺はきびすを返して二階へと上がり、自分の部屋へ入った。

「はぁ……」
俺が自分の部屋のドアを閉めると、双子がそこからにゅっと顔を出した。
中々シュールな光景だ。　少々呆れ顔なのは、さっきの俺の対応のせいだろうか。
とにかく色んな事があった。　シャワーを浴びてすっきりしたい気もするが、それをすると蛇への怒りや姫足の手のぬくもりまで消える気がする。
――というか、そもそも普通の人間なら、もっと取り乱したり、現実を受け入れられずに泣いたりするのではないだろうか。
だが俺は、こんな存在自体が冗談のような双子と、漫才まがいの会話までしている。
『何深刻な顔してるの？』
『似合わないわよ、それ』

「よく言われる」
まぁ、仕方ない部分もあるよな。　こうやってずっと茶々入れられ続けていれば。
と、そこまで考えた所で俺は重大な事に気づいた。
「つうか、もしかしてお前らトイレまでついてくるつもりか？」
こんな小さな不安が先に立ってしまうのは、やはり俺が人間とは違う精神構造を有しているからなのだろうか。
尋ねると、双子は露骨に顔をしかめた。
『そんな趣味ないわ』
『貴方の性癖に付き合う気もない』
「趣味性癖の話じゃねぇ」
双子はその顔のまま扉を抜け出、俺の前に立つとそっと頬を撫で――。
『『えいっ』』
たのは一瞬で、刹那、やたらと可愛い声で俺の頬を引っ張った。
べりっと音がして、それぞれの手には肌色の、布切れみたいなものが摘まれている。
慌てて頬を押さえると、口は閉じているはずなのに、ばっちり歯の感触とコンバンワ。
「い、いきなり何す……って今触れた？　ていうか今持ってる！？」
叫んでから、デビルイヤー綾菜が階下にいることを思い出して口を塞ぐ。　もちろん破れた横の方は塞ぎきれなかった。
『やっぱり破れやすいわね』
『よく今まで見つからなかったわね』
俺が口を塞いでいるのを良い事に、双子は勝手なことを言いながら、手に持ったそれをヒラヒラと振る。
やっぱり、持ってるよな……。
『持てなきゃ、自分の皮だって被れないでしょ？』
『ついでに、これがさえあれば』
言いながら双子が、部屋を見回す。　そして奴らは俺のすぐ傍の

壁にかけてあった人形に視線を向けた。
綾菜がゲーセンで取ってきたもので、そのまま俺に押し付けたものである。多分引き抜かれる前のマンドゴラをモチーフにしていると思われる不気味な人形であった。
双子は空中で優雅にバタ足をしながらそこまで泳ぐと、手を入れて人形の頭と腕を動かす、いわゆるマペット人形を……掴んだ。
うん、掴んでいる。マペット人形のブサイクな顔が、双子の手によって更に不気味に変形させられている。
「……突き抜けないのか？」
『皮越しならね』
『この間、手は人間と変わらなくなってしまうけれど』
言われてみれば、俺の目の前にある双子の手の平だけが、先程までのように透けていない。
つまり今なら物も持てる代わりに、ダメージ判定もあるってことか。
「て言うかそれ、俺の、その、頬の皮だよな」
『そうね、貴方の化けの皮』『組織はスキンと呼ぶようだけれど』
「英語にしただけじゃん」
つっこむが、双子は肩を竦めるのみ。私達に言われてもってところだろうか。
組織とやらがネーミングセンスに拘らないのは分かったが、いくらなんでも無頓着過ぎるだろ。
『普通の化け物は、スキンを脱ぎ捨てて活動する』
『でも私達は、皮を脱ぎ捨ててもそこから二ｍぐらいしか離れられない』
考えている間に、双子はマペットの中に手を突っ込み、それをベッドの上に投げた。
その双子の手が透明に戻っている。
『でも、皮から皮に飛び移る事は出来る』
『こんな風にね』

重力など関係ないだろうに、双子はぴょんと跳ねる仕草をすると、ベッドの上、更には言えば人形の上に正座で飛び乗った。
スカートを押さえるのが細かい。
「えーと、それなら離れても平気な訳か？」
『そ……ね』『トイ……もお風呂でも……ばいいわ』
答える双子の声は、まるで電波の悪いラジオのように妙に遠く聞こえる。
「何言ってんだ？　よく聞こえない」
俺が言うと双子は眉根を寄せる。
そして、まるでベッドが泥になったかのように、ずぶずぶとその中へ体をめり込ませていった。
「　び、びびるから唐突にそんな事すんなよ」
言ってる間にも、今度は二対のマペットが同時にぴょこんと立ち上がる。
「貴方が聞こえ辛いって」
「言うからでしょ」
そして、喋った。　はっきりと、空気を震わせて。
「うぎゃぁ！」
思わず叫ぶ。　バリッと直りかけていた口の端がまた破れた。
マペットの手が、態々自らの耳を塞ぐ仕草をする。
「なななななんで、喋って……」
「喉と口の部分に」
「スキンを当てたのよ」
「いや、それ人形だろ!?　声帯なんて無ぇじゃん！」
やはり喋っている。　俺の鼓膜を震わせている。
「細かいわね」
「私達はそういう生き物なのよ」
そんな無茶苦茶な。　思いながらも俺はハッと気づき、俺は慌ててベッドに駆け寄った。
マペットを掴み、上下に振る。　するとポトンと肌色の、俺のス

キンがその中から落ち、半透明の双子がその中からまるでランプの精のように現れた。
尻餅を憑いたようなポーズをしているのは、抗議の一環か。
「部屋の中から幼女の声なんかしたら、綾菜に通報されるだろうが」
顔を寄せ声を潜めた俺が言うと、双子は俺にダブルで頭突き……のような仕草をして頭を突き抜けさせた。
『貴方の方が余程うるさいわよ』
『貴方に乗り換え直したわ。これで良いでしょ』
文句を言う声がクリアに聞こえる。なるほど、俺に乗り移り直したのか。
「無茶苦茶だな、お前ら」
『冷蔵庫を食べる』
『貴方に言われたくないわ』
俺が自分の頬の皮を、迷った挙句ゴミ箱に捨てながら言うと、双子は俺の頭から自分達の頭を引っこ抜き、ひどく心外そうな声を出した。
そもそも食わせたのは誰だよ。
と、こいつら閉じ込められてたって言ったんだっけ？
「……そうだ、何であんなところにいたんだ？」
思い出し、聞いてみる。
すると双子はベッドから舞い上がり、白い下着を晒しながら交互に語りだした。
『二ヶ月ぐらい前かしら』
『ある日、蛇の皮を見つけたの』
「皮って……あいつが被ってる人間のか？」
『違うわ。細長い蛇の皮よ』
『貴方も見たでしょう？』
「あぁ、あっちか」
興奮はしないが妙に落ち着かないので、俺はベッドに座ってそれを見ないようにする。

双子の説明が正しいなら、蛇は俺と同じく、普段は人間の姿をしているはずだ。
『蛇は二種類の皮を着ている』
『と推測されるわ』
『脱皮できる大蛇の皮』
『そして人に紛れる為の人間の皮』
ややこしい。そんな所のお洒落に気を遣わなくても良かろうに。
なんて思っている俺の左右に双子が舞い降りてき、同じようにベッドに腰掛けた。
「そういえばあのでかい皮。学校に置いてきちまったけど、明日騒ぎにならないか？」
『大丈夫よ。スキンは化け物にしか見えないもの』
『化け物でも、注意して見ないと気づかなかったりするけれど』
今更気づいて俺が尋ねると、双子は同じように指を立て、そう答えた。便利にできているものだ。
それから彼女らは同時に話を戻すわよと言い、先程の続きを話し始める。
『私達が、自分達のスキンを脱いで、蛇の皮で遊んでいる時』
『事件は起きたの』
蛇の皮で、遊ぶ？
双子は手を上げ、がおーとジェスチャーしている。被って獅子舞遊びでもしてたんだろうか。
『……風が吹いたの』
「風？」
『ええ、それで私達の皮は飛んだわ』
「ちょっと待て、お前らの皮ってのはダッチ……空気人形みたいな奴なのか？」
『下種な配慮をありがとう』
『風船みたいな物だと考えてもらえばいいわ』
嫌そうな顔で双子は俺に礼を述べた。なるほど、ソーセージみ

たいなものか。　双子だけに。
　その中身が抜けると、多分ペラペラのローラーで潰された奴みたいなのになって、それが空を飛ぶ。
「ギャグ漫画じゃねぇか」
『重大事よ。　私達の皮は』
『貴方みたいに簡単には再生したりしないんだから』
　んなこと言われても、こうなっているのだから仕方ない。　唇まで指でなぞり、俺は自分の皮が、双子の言うとおり再生した事を確かめる。
『そのうち、蛇の皮も小さくなったわ』
『脱いだ後は縮んでいくんでしょうね』
　裏門に引っかかっていたものも、きっと明日にはソフトボールぐらいの大きさに縮んでいるはずと、双子は言った。
　女性用下着のような奴だ。
『で、乗り変えた蛇の皮も風に飛ばされて、あの倉庫に引っかかったって訳』
『流石にこの二ヶ月、退屈だったわ』
　乗り換えたっていうか、乗り移っただろう。　口には出さず俺はつっこむ。
「……そうか、お前らって皮から皮へ渡り歩けるんだよな」
　そこでふと、俺は妙案を思いついた。　双子に尋ねると、彼女らは同時に頷く。
「だったら、俺がお前らを連れ歩いて、水泳部員に引き合わせれば良いんじゃないか？」
　で、乗り移ろうとしてみれば良いのだ。　できればそいつが犯人。
　できなければ、少なくとも我が部員の潔白は証明できる。
　うん、我ながらいいアイディアだ。
『それは不可能』
『出来ないわね』
　だが、双子は俺の提案をあっさり却下する。

「なんで」
『正しい入り口が分からないと』『化け物の体には入り込めないの』
「お前ら壁とか通り抜けられるじゃん」
『化け物の体の境目というのは、超合金の壁よりも分厚いものなの』
『もしくは貴方の人生観より薄っぺらい物』
「うるせぇ。　どうせ人の生なんて謳歌してないわ」
俺が言い返すと、双子は何故か満足そうに頷いてから、更に言葉を続けた。
『私達が皮に入り込めるのは、相手が皮を剥いだり着たりする瞬間』
『もしくは相手が精神的に弱っている時ね』
そういう時は穴が広がるの、と双子はのたまう。
「あー、弱ってる人間には悪霊が入りやすいって聞いたことあるな」
なるほど。　そういう所もそっくりな訳だ。　俺が納得して頷くと。
『『……』』
双子は正座したまま俺を睨んだ。
『本当に憑り殺すわよ？』
『貴方の安眠を妨害するなんて簡単なんだから』
「やめてくれ。　全身に文字書く元気なんて今日は無い」
とにかく、それなら怪しい人間に手当たり次第取り憑……いや、入り込んで見るって作戦は使えない訳だ。
……怪しい人間。　候補は一応、水泳部の人間って事になるんだろう。
あの中に、殺人鬼……もとい殺人蛇が居るとは思いたくない。
それも、俺が食う必要があるかもしれないなんて。
何とか話し合いで解決できないだろうか。　なんて、姫足が食われた事も忘れて弱気な考えが浮かぶ。
そんな自分を嘲笑いつつ、俺は呟いた。
「話なんて通じないか。　蛇だけに」
『何それ』

『いきなり何？』
「蛇って耳が無いだろ。　だから聞こえないっていう……」
双子が怪訝そうな顔をするので説明してやる。　すると彼女らは余計首を捻った。
『でも蛇って音は聞けるらしいわよ』
『骨伝導みたいな仕組みで』
「へぇ……」
ギャグが滑って罵られるところまでは想定していたが、まさか根本が間違っているとは予想していなかった。
……別に俺が罵られて喜ぶ変態って事じゃない。　ただ、姫足を殺した奴と和解しようなんて考える軟弱さを誰かに否定してもらいたかっただけで……。
途中で姫足の笑顔が思い浮かび、慌ててそれを打ち消す。　彼女の、最期。　それと共に、俺には一つ思い出した事柄があった。
「しまった、ハンカチ落としたまんまだ」
『『ハンカチ？』』
「こう、ピンクのふりふりで真ん中にアニマル系のプリントついてる奴」
『何それ』
『気持ち悪い』
「お前らもうちょっと言葉選べよ！」
つうか俺の趣味でも所有物でもない。　全面的に双子の姉が悪い。
しかし今から戻るというのもなぁ。　部活の後に落としたとでも言えば問題ないか。
……人が死んだというのに、俺はまた自分の身の安全ばかり考えている。
ふとそれ気づくと、暗澹たる気持ちになってきた。
もうどうにでもなってしまえという捨て鉢な思いも沸いてくる。
『何だか、今日はお疲れみたいね』

『細かい話は明日にしましょうか』
俺の表情をどう思ったのか。　双子がそう提案してくる。
「悪いけどそうさせてもらうわ」
その提案に乗って、俺はマフラーを解いてベッドに倒れこんだ。
顔が枕に接触すると、一気に眠気が膨れ上がっていく。　最後の力で体をずらし、布団を口元まで引き上げると、俺はあっさり眠りに落ちた。

両側にイカ腹のある生活

朝、目を覚まして左を見ると、腹があった。
右を見ても腹がある。　何事かと頭の上を見ると、すやすやと眠る二つの顔。
双子が俺の頭を挟んで、お互いに向かい合って眠っていた。
あぁ、昨日の出来事が夢じゃないってことぐらい分かってる。
アレが夢だってなら、この口自体が十年以上続く悪夢だ。
ていうかこいつら、睡眠必要なのか？　それと、俺は起きても良いのだろうか。俺が動くと、こいつらはこの寝そべった体勢のまま引きずられていくのだろうか。
こんなこまっしゃくれた奴らの寝起きがどうだろうと知った事ではないとは思うのだが、寝ていれば可愛いって表現も出来なくはないんだよな。
間違いなく間違いなんだけど、両耳が温かい。
まるで双子に体温があるみたいだ。もう少し耳を寄せれば鼓動が聞こえるだろうか。
あ、やべ。　また眠くなってきた――。

『可愛い寝顔だったわよ』
『一生寝てれば良かったのに』
予鈴と共に正門へと滑り込んだ俺を、双子が囃す。
二度寝で危うく遅刻する所だった。
荒い息を整え口の端を確認した俺は、教室の中へと入った。
「よぉ大輔」
「うっす柊。アレ上手く行ったか？」
「おはよう大輔」
「やぁ南。風邪治った？」

「何だ、今日は遅いな大輔」
「遅刻常習犯に言われたくないなぁ」
「……はよ」
「やぁ、今日も可愛いね」
「キャー、大輔クーン」
「うるせぇ双子の姉」
側を通った奴らと一言二言交わして席に着く。
俺を置いてさっさと登校した綾菜を責める事はしない。部屋に入るのを禁止しているのは俺だからだ。
――寝ている間に大口でも開けてたら、隠しようが無いからな。
夏場でも口元まで布団を被せるのは、小さい頃からの癖だ。
『本当によく喋るのね』
『普通黙らない？　そんな口してたら』
席に着くと、双子が耳元で囁きかけてきた。
「笑っといたほうが良いんだよ。普段から必死で口閉じてると、面の皮が硬くなる」
俺は小声で言い返す。　少なくとも、俺自身はそう思っていた。
顔の筋肉は強張るものだから、マッサージしましょうなんてのはよく言われることだ。
大体鉄面皮なんて噂が立ったら、それを崩してやろうと考える人間だっているだろう。
不意打ちで笑わせに来られたら、我慢できる自信はない。
世の中は面白いのだ、憎らしいほどに。
「俺なりの処世術って奴だ」
『あら意外』
『昨日の考え無しは別人かしら』
こいつらはストレートに憎たらしい。
昨日のは、そう、普段真面目にしてると、たまにはっちゃけたくなるっていうか……。
「つうか、遊んでて自分の大事なモノ飛ばされたお前らに言われた

くねぇ」
言ったところで担任の岡崎ちゃん（二十五歳女教師）が入って来、俺は口を閉じる。
『へぇ、それを言う』
『言ってくれるのね』
……おかげでＨＲ中、双子は言い返せない俺をひたすらなじり続けた。
こいつらとの会話を打ち切るタイミングには注意しよう。俺はそう心に誓った。

立島大輔は見られている

女子更衣室のドアが壊れているという騒ぎはあったが、部活は中止にならなかった。
俺がプールから上がると、サイドで座っていたいるかちゃんがこちらに近寄ってくる。
「おめーよぉ、本気で泳いでんのか？」
そうして、チンピラみたいに凄んでくる。
「ま、マジでやってますって。俺に隠された力とか無ければ」
隠している正体はあるが、あれは泳ぐ上でまったく役立たない。
というかあんな重い頭で泳ごうとすれば、確実に溺れる。そして正体が何であろうと、凄まれれば怖い。
「おめーの言葉には説得力がまるで無ぇ。あと顔」
「部長っていう、水泳部の顔やってる奴と同じ顔なんスけど」
あと、先生は言葉にも顔にも威圧感バリバリッス。
そもそも今日のタイムが伸び悩んだのは、背中の双子がうるさかった所為である。
揺れるだの息継ぎが不細工だの背中で言われ、集中できる訳が無い。
「あっちは優等生ヅラも出来るからいいんだ。お前はいっつもその顔だろ」
言われ、普段の自分の笑顔が画一的なモノになっているのではないかとビクリとする。
いやいや、笑顔は相手と状況に合わせて五種類用意してあるはずだ。落ち着け俺。
「あ、あ、ははは。でも本気で泳いでるつもりですよ」
顔の引きつりを誤魔化す為に、多少大げさに笑ってみせる。
いるかちゃんは胡散臭そうに俺を睨んだが、ため息をついて俺の笑顔ナンバー2にコメントするのはやめた様子だった。

「俺は、お前はもうちょっとぐらいは伸びると思ってる」
「え？　あ、光栄、です」
ため息の後に、いるかちゃんは悔しそう――いや、歯がゆそうな顔でそう言った。
それこそ、彼に似合わない顔だ。　俺は、なんと返して良いか戸惑う。
いるかちゃんは顧問だが、自分では泳がない。　たまにする指導も的確だし、例のオリンピックに出損ねたなんて噂も本当なのだろう。
それが今は若い身空で弱小水泳部の顧問というのには、どんな理由があるのか。
「という訳で、特別訓練を命じる」
と、勝手に彼の経歴や心情を構築しようとした罰だろうか。　いきなりそんな言葉が耳に滑り込んだ。
「はい？　いやいや、居残りとかはちょっと……」
「俺もお前の為に残ってやるつもりはねぇ。　特訓っても火の中に放り込むわけでも鉄球で押しつぶす訳でもないしな」
「何させようとしてんスか、いるかちゃん！」
「てめぇ、次その呼び方したら本当にやらせるからな」
歯を見せてギロンと睨まれたので、俺は慌てて口をつぐむ。
「お前の泳ぎ映したビデオ見たら、ちょっと気になることがあってな」
「ビデオ？」
そんなの何時の間に撮っていたのだろう。　口の事もあるんで、写真を取る時も五分はお化粧の時間もらいたいぐらいなんだけど。
「あぁ、三橋の個人撮影だ。　許可貰ってダビングした」
「俺は許可した覚えないんですけど！？」
盗撮じゃねぇか！　あまりの不意打ちにビビッて、俺は裏返った声を上げた。
ていうか、そんな事までしてたのか、三橋……。

『それだけ観察されてるってことは』
『バレててもおかしくないんじゃない？』
双子が現れ、いるかちゃんの両脇に立つ。
その姿に視線がいかないようにしながら、俺は指摘されたその可能性について考えた。
双子が言っているのは、三橋が俺の正体を知っているのではないかという話だろう。
昨日が特別だっただけで、俺はそう毎日頬を破るようなヘマをしている訳ではない。
表立って、口の事で騒ぎになった事はないし。
ただ、何かに撮られてじっくりと観察されれば、どこかでそういうシーンが見つかるかもしれない。
そうじゃなくても、例えば俺の表情、立ち振舞いに人間とかけ離れた異質な物が混じっていたり――。
「お前は腰に頼りすぎ。　という結論に達した」
またも意識を別の所に飛ばしているうちに、いるかちゃんの話が先に進んでいた。
「プレイボーイだから、つい腰に頼っちゃうんですよ」
咄嗟に出たにしては、良い反応だったと思う。
俺がビキニパンツの腰を回すと、いるかちゃん、ついでに両脇の双子も顔をしかめた。
「その腰を去勢する」
「はい！？」
「もしくは矯正する」
「ビビらせないでくださいよ。そんな事したらステディ達が悲しむ」
涼やかな視線で肩を竦めて見せる。　イメージは爽やかで誰にでも優しいが、裏には危険な顔を持つ生徒会長。
しかしいるかちゃんはまたしかめっ面に戻り、双子はふんっと鼻で笑う。
『似合わない』

『身長が足りない』
背は関係無ぇだろ背は！　思考を読まれた気がするので、心の中でそうつっこむ。
くそ、やっぱ生徒会長は好青年好成績高身長なモノなのか。
「まぁ俺がやるとやりすぎるからな。三橋に作ってもらうことにした」
「え、いや、それは……」
再びその名前が出、俺はうろたえてしまう。
「時間外のロードワークやマッサージもしてくれるそうだぞ。良かったな」
「でも、その……」
「そんなに嫌か？」
言いよどむ俺に、眉間に皺を寄せるいるかちゃん。
「嫌って言うか……今ちょっと忙しいって言うか」
俺は別に三橋のことが嫌いな訳じゃない。彼女が下心無く俺を慕ってくれているというのなら、確かに嬉しいことだし。
いや、それでも盗撮は困るけど。
しかし、彼女の思いが本物だとしても、俺はそれを受け入れるわけにはいかないのだ。
「大丈夫だそうだぞ、良かったな三橋」
「だから先生……って、三橋？」
いるかちゃんが、俺の頭のてっぺんに視線を向けている。
「はい、私がんばります」
「うぇっ！？」
違った。　俺の後ろにいた三橋を見ていたのだ。
飛びのいた俺は透明な双子の左のほうを突き抜け、いるかちゃんの後ろへと下がった。
『足踏んだ』
『ひどい』
「あ、ごめん」

双子が膨れ顔をするので反射的に謝る。
……つうか踏んだ感触なんてなかったし。　そもそも全体突き抜けたぞ今。
「あぁ、その反応は謝ったほうがいいぞ」
「ちょっとだけ傷つきました」
振り向いたいるかちゃんは呆れ顔。　三橋は苦笑という面持ちである。
「三橋もすまん」
改めて謝り直す。　も、と言われて二人は首を傾げたが、追求はしてこなかった。
「じゃ、後は三橋に任せた」
「だ、だから生徒の話を……」
「大輔」
「はい？」
「腰を愛えよ。　ヘルニアは辛いからな」
いるかちゃんがまた、呼吸を止めて一秒真剣な目をした。
その瞳には哀しみが宿っている。　もしや彼が水泳を諦めた訳は、腰が理由なのではないか。　だから俺の腰を気にかけて……。
「んじゃ、よろしくやれよー」
「って、ちょっと!?」
なんて考えているうちに、いるかちゃんはスッと俺の横を通り、更衣室の横の事務室に向かっていた。
逃げられた。　あたいを何度もポワンとさせるなんて、あの人実は詐欺師かエロゲ主人公にでもなったほうが良いんじゃないかしら。
もしくは俺、もうちょっといるかちゃんの話を真面目に聞いた方がいいかも。　あの顔と見つめ合うことを、どうも本能が拒否するんだよな。
「……あの、大輔さん」
「お、おう！」
俺がいるかちゃんに、昭和系少女マンガチックな視線を注いでい

たのが悪かったのか。
三橋が俺の横、いつの間にか肩が触れ合う距離まで近づいてきていた。
……肩の位置が俺より高いのは、気にしないでおこう。
「一緒に、がんばりましょうね。二人きりで」
「二人でがんばりましょうの方が、スマートで良いと思うな」
「それでは、含みが持たせられません……」
「いや良いから。持たせなくて良いから」
また一歩下がった俺に、向き合った三橋がふふっと笑う。
しかし、彼女と和やかに会話していて良いのだろうか。そんな疑問が頭を掠める。
なんたって、水泳部の誰かが犯人かも知れないわけだし……。
というか、今正に目の前の彼女がそうかもしれない。
あんまり考えたくないのだが、蛇は俺の秘密を知っている。
俺を昨日呼び出したのが蛇ならばだが。となると彼女、三橋愛華には疑うべき所が一つある。
「それは置いといて、三橋、ビデオなんて撮ってたの？」
ビデオ。巻き戻し、停止、複製、やりたい放題の極悪人だ。
俺が苦手な機器でもある。操作の事ではない。ふとした拍子に口が破れている様を記録されてしまえば、それでアウトだからだ。
つまりこれで、彼女が俺の正体を知った可能性は無いだろうか。
「あ、はい。三テラバイトほど」
「多ぐね？」
思わず訛ってしまった。
……あんまり聞きなれない単位が聞こえたんだけど。
それだけ撮られてれば、俺じゃなくても顔に穴が開きそうだ。
「三橋、その、盗撮とかはやめてくれない？」
「盗撮、ですか？」
そんな危険に怯えながら部活をするなんて、耐えられそうにない。

俺が進言すると、意外そうに首を傾げられた。
「部活動の助けになると思って、やっていたのですが……」
続いてしゅんと俯き、三橋は悲しげにそんな事を言う。
うっ、確かに考えてみれば、マネージャーが部活風景を記録するって普通のことか？
現に彼女が撮影したビデオが、部活の助けになっているわけだし。
いやいや、いるかちゃんは個人撮影って言ってたぞ。　大体俺に許可も無い訳だし、ここははっきりと……。
「いやぁ、ハハ、あんまり恥ずかしい所映ってたら嫌だなと思って」
『ヘタレ』
『意気地なし』
双子が心底失望した声で、俺に囁く。
そう言ったって、仕方ないだろ……だって。
「大丈夫です、先生に渡したのは再編集版ですから」
「編集前には映ってたの！？　ていうか再ってことは、その前にも一回編集してるってことだよね！？」
と、双子に心の中でさえ反論する間もなく、三橋が次の問題発言をかます。
この娘、分かっていてやってるんじゃなかろうな。
「ふふふ」
あるいは俺のリアクションを楽しんでいるかだ。
「……他の奴に渡してないよね、それ」
「他、ですか？」
配付なんてされていたら目も当てられない。
「お願いされましたが、断わりました」
そう思い聞いてみると、意外な答えが返ってきた。　お願い、された？
「お願いって誰に？」
「言いたくありません」

ぷいっとそっぽを向く三橋。　髪の毛がふわっと流れ、良い匂いがした。

……自分の可愛さが、よく分かっていらっしゃる。

と、そんなことに感心している場合じゃない。　それを欲しがったって奴が、どんな意図を持っていたのか分かりはしないのだ。

「……気になりますか、大輔さん？」

黙りこんだ俺の顔を、三橋がかるく腰を曲げながら覗きこんだ。

それで目線が合う。

「いや、俺のファンだったら勿体無いなぁって」

「……」

その三橋の眼が、きゅっと鋭いものになった。　鹿子がびびったのもこれの所為か？

しかしその表情も一瞬で消え、三橋はすぐにいつもの柔和な笑顔に戻る。

「内容が気になるようでしたら、今度持ってきましょうか。　フォーム改善の手助けにもなると思いますし」

「え、あぁ、それじゃぁ頼む」

その切り替えの早さにたじろぎながら、俺はそう答えた。

やはり傍から見た俺の姿というものは気になる。　事件解決の助けになる情報も映っているかもしれないし。

「分かりました！　明日色々と用意してきますので！」

俺の答えに三橋は弾んだ調子で頷き、ぺこりとおじぎをして更衣室へと向かった。

なんだかどっと疲れ、俺もまた更衣室へ向かう。

脱衣所とプールの間にあるシャワー室から脱衣所を覗くが、平井はもう帰ったようだ。

友達甲斐のない奴め。　冗談でそう考えながらシャワーの蛇口をひねる。

『あぁいうのは、はっきり言ったほうが良いわよ』

『ストーカーは迷惑ですって』

「いや、ストーカーって訳じゃ……」
シャワーを頭から浴びているというのに、双子の声ははっきりと耳に響く。
その不思議な感覚を味わいながら、俺は冷えた体にシャワーを当てていった。
「それが普通の、人間の対応、か？」
『今みたいに弄んでるよりは』
『誠意はあるんじゃない？』
「やっぱ弄んでるように見えるか」
ため息をつきながら体をこすっていると、双子が目の前に出てきて同時に首を傾げる。
『違うの？』
『違うの？』
「俺は口ベタだから、どう言えば良いのか分からんのだよ」
『『はぁ？』』
双子が憎たらしい声を上げる。
うっわ、触れられるなら叩きたいコイツら。
なんて思いながらシャワーを止め、俺は更衣室へ向かう。
タオルを出し、頭を拭きながら考える。
それだけが理由ではないが、俺は化け物だから、もしかして彼女を不必要に傷つけてしまうんじゃないだろうかなんて恐れがあるのは、事実だ。
そう俺は、人間じゃない。　だからその精神構造も、正常な人間とは違っているのではないかと思う時がある。
例えば姫足が食われた時も、あっさり立ち直ったり。　こうやって世にも奇妙な双子と普通に話したり。　他人が何に悩んでいるのか分からなかったり。　泣けると評判の映画で、内心大爆笑してしまったり。
そういう俺だから、相手の感情など理解できないのではないか。
そんな不安があるから、俺はいつも人の顔色を窺い、反対に突飛

過ぎる行動を取り、相手にヘンな奴と思われようとしているのだ。
「普通、女の子を振る……じゃなくて、女の子と距離を置くにはどうすれば良いんだ？」
三橋は何らかの好意を、俺に抱いていると思う。しかしそれを受け入れる訳にはいかないとも分かっている。
だって俺は、化け物なのだから。
だから彼女が自然に俺を諦めるようにしたいのだが……。
『分かる訳ないじゃない』
『私達、人間じゃないもの』
「だよなぁ」
俺だって人間じゃない。だから、分からない。違う、逃げとかじゃない。
「つうか後ろ向いてろ。着替えられないだろ」
『あら、良いじゃない』
『どうせ、恥ずかしい所は全部撮影されてるんでしょ？』
「ここまで撮られてたら、流石に金請求するわ」
双子が文句を言いつつ後ろを向いたのを確認して、俺は水着に手をかけた。
やっぱり三橋にも、もうちょっとちゃんと注意したほうが良いかなぁ。

軌跡

塩素でパサついた髪を撫でながら、俺は更衣室を出た。
夕暮れが自然と目を細めさせる。　おかげで妙に渋い顔になるが、このダンディさに騙される女子はいないだろうか。
などと隣にある女子更衣室の入り口を見ると……いた。
生乾きなのか、いつもよりキツくウェーブがかかった金髪が重たげに揺れている。
夕日が反射しキラキラと輝きを放つそれは、塩素など寄せ付けない気配があった。
俺に気づくと、彼女――椎名雅は、いつも通り俺を睨みつけてくる。
「やっほ、待った？」
まるで二人は神田川。　俺の優しさが怖かったのか。　彼女の眉間に皺が寄る。
「何で、分カッタ」
「そうだよね、待ってませんよね……ハイ？」
またも幻聴かと思ったが、違うらしい。
そういえばなんだか顔が赤い。　そうか、彼女は俺が好きだったのか。　いつも睨むのも、俺にツンデレってたせいだったのだ。
……ごめん、顔が赤いのは夕日の照り返しのせいだった。
「何か用？」
都合の良い妄想は切り上げて、俺はミーヤに問いかけた。
「……センセイの話」
何が気に入らないのかやはり彼女は俺を睨みなおし、ポツリと切り出す。
「いるかちゃんがどうかした？」
「チガウ。センセイの話じゃなくてセンセイの……」
なんと言って良いかミーヤは迷っているようだ。

彼女が普段言葉少なめなのは、俺と話したくないからだけでない。
彼女は自身があまり日本語が達者で無いのを気にかけており、それを人に晒すのが嫌なようなのだ。
「先生がさっき話していた事について？」
「ソウ……」
口を尖らせ、ミーヤは頷いた。
こうやって会話も成り立っているし、そう恥ずかしがる事もないと思うのだが。
それに入部してからの半年で、ミーヤは語彙もやたら増えた。
この調子だと来年には多種多様な言葉で罵倒されることになるかも。
ちょっと楽しみだ。
しかし、ミーヤはそれ以上言葉を続けない。　先程のように言葉が見つからないのではなく、俺に考えさせようとしているらしい。
「んー、いるかちゃんの話ねぇ」
まぁミーヤの方から、俺にアクション取ってくれるなんて稀だ。
謎かけを楽しむと言うのもステディな関係っぽいし、まじめに考えよう。
しかし、前提条件であるいるかちゃんの話をまじめに聞いてないな。
「あぁ、分かった！　一緒に更衣室の下着を盗む計画！」
「シネッ！」
ポンと手を打ってから指差すと、今度は間違いなく赤面した。
違うらしい。　こういうところで機会潰すから、俺ってモテないんだろうなぁ。
「じゃぁ……」
俺の特訓の話？　いやいや、あの時ミーヤはいなかったし。
「この街では、半年で十人以上行方不明者が出テル」
耐え切れなかったようで、ミーヤが自分から答えを言った。
彼女の言葉に、俺の心臓が跳ねる。
……昨日の話じゃないか。　落ち着く為に皮肉げに考えてみるが、

動悸は治まらない。
「発覚してイナイ件も含めれば、もっとかもしれナイ。　被害者は老若ナンニョ問わず」
　ミーヤが珍しく長文を話す。　ナンニョの発音も気になったが、それよりも気になることがあった。
「被害者？」
　割り込み、問いかけるが、ミーヤは訂正したり戸惑ったりしない。
　強い視線で俺を睨みつけるのみだ。
　言い間違いなどではないようで……。
　確かに何かの事件に巻き込まれなきゃ、こんな事にはならないだろう。
　それでも、被害者と言い切った彼女の言葉に違和感を覚える。
　彼女は知ってるんじゃないのか？　これが、人外の者による殺人事件だということを。
　いや、それよりも今、もっと疑問なのは……。
「何で、そんな話を俺に？」
　肩を竦めて再度問いかける。
　……とぼける、と言ったほうが正しいだろうか。　面の皮が引きつらないように注意しながら笑みを浮かべる。
「自分が、一番分かってるんじゃないノ？」
　雅もそう受け取ったらしい。　その瞳に剃刀のような、強い光が宿った。
　どうしようか。　笑顔を維持しながら、腹の底で考える。
　そこへ――。
「ミーヤー？」
　更衣室のドアが開いて、能天気な顔がひょっこりと飛び出した。
「カコ……」
　振り向いたミーヤが和らいだ声を上げる。　出てきたのは雅と同じ一年。　アホの有馬鹿子だった。
「あ、居た。ちゃんと髪乾かさないと風邪ひくよー」

彼女の手にはドライヤー。　二人は同学年な事もあってか仲が良い。
　というか無愛想な雅――ミーヤの世話を鹿子がよく焼いているようだ。
「……うん、分かった」
　彼女の言葉にミーヤは頷いて、更衣室に戻っていく。　ドアに手をかけた所で振り向き、俺をひと睨みすることを忘れない。
　俺はそんな彼女にひらひらと手を振った。
「何の話してたんですか？　先輩」
　ミーヤが扉を閉めてから、視線を扉に向けたまま鹿子が俺に問いかけた。
「二人の楽しい未来についてかな」
　嘘はついていない。　あのまま続ければ、そういう話になったはずだ。
「……セクハラで済む程度にしてくださいね」
「げっへっへ、お前がミーヤの代わりになるなら考えよう」
　下卑た声を出すと、鹿子がズカズカと近寄ってきた。
「ほれ」
　そして彼女はブラウスの胸元に指を入れ、手前に引っ張った。
　ザッ。　反射的に首が左に振れ、目に優しいランニングコースの緑が目に入る。
　……綺麗だなぁ。
「どうせ実物目の前にしたらヘタレるくせに」
「ちちちち違うわい。　いきなりだからその、ちょ、ちょっと心の準備ができてなくて」
「片瀬先輩みたいになってますよ」
　なんか勝手に決め付けられてるが、別に俺はそんな貧相な物を恥ずかしがって視線をそらした訳じゃない。
　ていうか普段ならガン見するからね。
　良いからちゃんと見て描写しろ？　何を言っているのかねこのエ

ロス小僧は。
今更見られるものか。　いや、別に見たいわけじゃないよ?
しかし、それでチラ見とかになっちゃったら余計かっこ悪いじゃない。　しかももう仕舞っちゃってたりしたら、倍率ドンだ。
ていうか今してるであろうニヤついた鹿子の表情を見たらきっと立ち直れない。
「まだ開放中ですよ」
チラ。　視線を戻すとニヤついた鹿子が視界に入った。　胸元は第一ボタンまできっとり留められている。
「うわぁぁぁん!」
耐え切れず、俺は泣きながら逃げた。

「さてと、どうすっかな」
涙をぬぐい鼻をすすってから、俺は呟く。
いやーミーヤとシリアスっぽいやり取りをしてしまった。　その後の記憶はとんとないが。
『スケベ』
『その上ヘタレ』
双子の罵倒なんて知ったことか。
とにかく俺がやるべきは、占い師より先に蛇を見つけ、できれば狩人に引き渡すことなのだが、ヒントはおろか調査の取っ掛かりすら、鹿子の胸のように絶壁である。
「お前らが皮を見つけたのって、どの辺りなんだ?」
危ない奴だと思われても困るので、携帯電話を取り出し耳に当てながら双子に尋ねる。
せめて蛇の行動範囲が分かれば。　そう思ったからだ。
俺が尋ねると双子もようやく今まで散々していた揶揄を止め、二人して同じように唇に人差し指を当て、考える仕草を見せた。
『大きな犬を飼ってる紐飴が美味しい駄菓子屋の裏手の路地と』

『噴水とターザンごっこのできるロープがある公園の前』
「お前ら、何気にこの街満喫してるんだな……って二箇所なのか？」
意外と健康的に遊びまわっていたらしい双子が交互に言う。
『えぇ、駄菓子屋の時は三ヶ月ぐらい前』
『私達の皮が飛ばされたのが公園』
「聞いてないぞ、そんなの」
『言い忘れただけよ』
『聞かれなかったし』
つっこむが、双子は反省した様子も無くそう切り返した。
こいつらだけが情報源というのは、今更ながら危険すぎる気がしてきたな……。
駄菓子屋と公園……公園は何となく覚えがあるな。　俺は携帯電話を操作し、周辺地図を表示した。
「ここか？　咲珠アスレチックパーク」
『確かそんな大層な名前の公園だったわ』
『名前の割にこじんまりしていたけれど』
指を指して双子に確認を取ると、彼女らは揃って頷いた。　赤い点でマークを打つ。
続いて駄菓子屋はっと……。
『近くに上り棒がある小学校があるわ』
『それと病院も』
「この辺？」
細かい指示に従いカーソルを動かすと、しばらくして双子はそこねと頷いた。
こいつらが地図の読める女子達で助かったな。
ここもマーク。　更に昨日が学校と。
それからその全てが見えるように、縮尺を小さくしていく。
更に三つの点が納まるように視点を変え、更に見易くする。
えーと、現在位置から大体北東で三ヶ月前。　二ヶ月前が南東。
昨日が南西。

「と、これって」
『何？』
『何か気づいたの？』
俺の呟きに反応し、双子が左右の肩に乗り携帯電話を覗き込む。
「全部俺の家から等距離だな」
三つの点をバランスよく画面に配置しようとすると、俺の家が中心に来る。
更に直線距離の話だが、全て家から学校までの距離と等しい。
大体五ｋｍ程といった所だろうか。　気がつくと、双子が冷ややかな視線をこちらに注がれていた。
「いや、俺じゃねぇよ！？　昨日のどんだけ自作自演なんだよ！」
こいつらの視線の意味は、俺がふらふらと同じ距離出歩いて人を食っているのではというとても不名誉な物だろう。
いろんな意味でありえない。　俺は断固抗議した。
『じゃぁ貴方の片割れ』
『双子揃って化け物』
間髪入れずに、双子が次の可能性を示唆する。
「やめろ」
それを聞くと、自分でも驚くほど、冷たい声が出た。
全員を疑う方が正しいと頭では分かっているのだが、何故か双子の姉を疑うのは脳が拒否する。
あんなスカでポンでタンな奴を特別視しているなんて認めたくはないのだが。
双子と顔を合わせられない。　今彼女らは、そして俺はどんな表情をしているだろう。
「大体、まだ三つだろ。　偶然の可能性だってある」
誤魔化すように、俺はそう言った。
俺の家を中心に、円を描いて犯行を重ねてるだって？　そんな安易な。
『偶然かどうか』

『調べてみればいいじゃない』
「……飯を食ったら探してみるか」
双子に答えると、俺は家に帰った。

それから三時間後。　俺は大金持ちになるチャンスを全力で投げ捨てていた。　何故なら大量に蛇の抜け殻を見つけたのに、それを放り捨ててきたからだ。
駄菓子屋の裏から、俺の家を意識しつつぐるっと回り込むようにして双子が飛ばされたという公園に向かうと、五分ほど歩くとまず一つ、公園につく前に更に二つ。
次に公園から学校へ向かう道で三つ。　三つ目ではない。　つまり合わせて九つ。
それだけの皮が、俺の家からほぼ一定距離。　しかも半円を描くようにして見つかったのだ。
皮が無ければ生きられないからなのか、双子の皮に対する嗅覚は凄まじく、飯を食ってから外に出、二時間でこれだけのものを見つけてしまった。
そう、見つけてしまった。　という感想が最も当てはまる。
つまり蛇はこれだけの人を食ったという事なのだ。　それも大雑把な探し方だったし、取りこぼしもあっただろう。
それなのにこの結果。　あまりの事態の大きさに、知りたくなかったなんて言葉まで浮かんでくる。
しかし、知ってしまった。　姫足のような犠牲者がこんなにもいる事を改めて思い知った今となっては、見なかったふりなどできない。
「何でこれだけ人が死んでて、大きなニュースになってないんだ……」
『あくまで行方不明だし』
『組織の手も回っているのかも』

学校までたどり着いた俺が嘔吐するように呟くと、双子が変わらぬ調子で答える。

それで自分達が派遣する人員は二人かよ。　力の入れ所が間違ってないか？

胃がムカムカしてくる。　本当に吐いてしまいそうだ。

「しかし、何なんだこの軌跡」

俺が犯人だと思わせる為の工作？　いや、皮は化け物にしか見えないというのだから、そんな事をしても意味が無い。

まさか本当に綾菜が？　いやいや、あんな晩飯で冷凍ピラフ（未解凍）出してくるような奴が大量殺人鬼だなんて、そんな事ある訳が……。

こうなると気になるのがこの先である。　円の軌跡の先。　つまりは、学校の次の犯行現場だ。　これが罠だとしても、行かざるをえないだろう。

「そうだよな、行くしかないんだ」

携帯を片手に呟くと、俺は歩き出した。

ヘビ対ドリル

――それから三十分ぐらい経った頃だろうか。
駅前に沿った大通りから離れると、この街は途端に田んぼや畑で溢れる。
シャレた街というイメージをつけたいんだか、書く事がないんだかで、基本的にガイドブックには書かれない箇所である。
そこも抜けると、目の前に廃ビルがぽつんと立っていた。
四階建ての物で、前市長が新たな都市開発をしようとして失敗した名残だ。
人には見つかりそうがないが、つまりは同時に人の気配もない。
こんな所に来るのは、俺みたいに廃墟めぐりが趣味の人間だけだろう。
汗をマフラーでぬぐい、俺はため息をついた。
ここまでで見つかった皮は無い。　今までこれほど間隔が空く事もなかった。
つまりはまだ、蛇はこの辺りでは犯行を行っていないのだろう。
「そりゃそうか。　いくらなんでもそう毎日食ってるはずが……」
ドダァン！
無い。　と言いかけた所で、俺の安堵交じりの思考をぶち壊す音が響いた。
発生源は、多分あの廃ビルだ。　というか他に建物が無い。
『あったみたいね』
『ダイエットとは無縁みたい』
双子が肩を竦める。
「マジかよ……」
『とにかく』
『入ってみましょ』
ふっと笑った後、ゆるゆると双子は前へ飛んでいく。

俺が動かなきゃそれ以上はいけないのだが、引っ張られるように俺の足も進んだので、その進行は非常にスムーズだ。
これじゃ立場が逆だろう。心中で呟いたが、そもそも俺がこいつらをリードできた事などない気もする。
ため息をつきながら、俺はビルに近づいていった。
――ビルの入り口は、扉など残っておらず簡単に入る事ができた。

明かりも死んでいるが、ガラスも張ってない窓から差し込む月明かりのおかげで、内部が見えないという事もない。
室内は壁が取っ払われていて、柱が剥き出しの鉄骨を晒していた。
慎重派の頭が前進を躊躇わせる。
だが、足はもはや片方ずつ双子と紐で結ばれており、目は多分あいつらの尻を人参か何かだと思っている。
双子が進むと、俺の足も嫌々ながら動いた。
右奥の隅を見ると、二階に上がるための階段が残っている。
例の如く双子が先行するのでついていくと、ビシィという鞭のような音が響いた。
もはや駄馬同然の体が、竦んで止まりかける。
だが、双子が振り向いて上を指差すので、俺は渋々老朽化し瓦礫に埋まった階段に手と足を置き、四つんばいで慎重に上がった。
ひょこりと二階部分に顔を出すと、バシィとまたも破裂音。
ひゅっと空気を切り裂く音がして、またバシィ。
……あの蛇って、こんな音立てたか？
「くそ、何が起きてるか見えないぞ」
流石に月明かりでは視界に限界がある。
俺より視界に自由が効くはずの双子が、俺の体からギリギリまで体を伸ばしているが、結果は芳しくないようだ。
『距離が遠いわ』
『もっと近づいて頂戴』
「…足動かすのは俺なんだぞ」

簡単に言ってくれる双子を、上目遣いに睨む。
『良かったじゃない』
『好きなステップを刻んでいいのよ』
「スキップと忍び足しか知らねぇ」
もちろん忍び足を選択し、俺は鉄骨に隠れながらそれに近づいていく。
……気づくと、部屋の中を何か甘い匂いが満たしていた。
何だか、嗅いだ事のある匂いだ。　そんな事を考えながら部屋の中ごろまで進むと、そこでは二匹の生物がぶつかり合っていた。
二匹、で良いのだろうか。
一匹目は昨夜見た蛇。　あの黒い体が、月明かりに照らされ浮かび上がっている。
そして、それに立ち向かっているのは、鮮やかな緑色をした、蔓だった。
幾本もの蔓が明らかに意思を持って、月の光を反射しながら蛇を襲っている。
あるいは蛇に巻きついて動きを封じようと、あるいは蛇を強かに打ち据えようと、あるいはその根元に近づかないよう牽制し。
そして、その根元。　蔓は、なんと人間の腕に繋がっていた。
鮮やかな金の髪を翻すそのシルエット。
そうだ、嗅ぎ覚えがあるはずだ。　あの蠱惑的な、植物のような匂い。
少女、椎名雅は右手の先を蔓に変化させ、蛇に立ち向かっていた。
『あら、貴方の知り合いね』
『つくづく変わった知り合いが多い事』
双子が茶化すが、それどころじゃない。
俺はその戦いから隠れるように鉄骨に背中を預けた。　心臓がドンドンと肋骨を叩いている。
『蛇と戦ってるってことは、狩人？』
『でもあれ、どうみても化け物だわ』

例えばミーヤが俺の正体に疑いを持っていて、しかも化け物を狩る狩人だというなら今までの敵意も頷ける。
しかし、そちらは推論だ。　だがこれは、今の彼女の姿はどう見たって俺の、双子の、そして蛇の同類――。
視線を落とすと、床にゴム手袋のような物が落ちている。
が、それは青白く、五本の突起の先には、人間の爪がついていた。

厚みはまるでない。中身がない、人間の、手の皮だ。　皮だ。
双子はスキンなんて言っていたっけ。
バシィ！　と、一際高い音がし、俺がそちらに視線を移すと、蔓が蛇を思い切り横薙ぎに払っていた。
これは、あの、ミーヤ、雅の手が収まっていた、皮だ。
彼女もまた、自らの皮を脱ぎ捨て、その本性を晒す――化け物だったのだ。
『それにしても強いわね』
『貴方じゃ入る余地無さそう』
雅は前述の通り、右肘の先を蔓に変形させ蛇を翻弄している。
そして見え隠れする蔓の集合点には、銀色の針――いや、杭の様な物が飛び出していた。
つまり彼女の本命は、蛇を捕らえてあれで串刺しにする事だろう。
そして蛇も近づきたいのは同じなようだ。
地を素早く這ったと思えば跳躍し、鉄骨に体を巻きつけ、飛ぶかと思えばまた地に戻るという目まぐるしい動きをしているが、雅は惑わされることなく着実に蛇を追い込んでいく。
「……パンピー名乗って良いかな」
『だぁめ』
『化け物でしょ、お互い』
化け物が四――五匹も集うこの空間は明らかに異常だ。
腰の下がぐにゃぐにゃとして、現実感がない。
そりゃ、俺だって一応誰が化け物でもおかしくない、と覚悟して

きたつもりだった。
だが、目の前で知った人間が、化け物、になった時、その衝撃は予想よりはるかに大きかった。
ついでに、彼女を化け物と呼んでしまうことに酷い罪悪感を感じる。
誰だって嫌だろう。化け物呼ばわりされて生きていくなんて。
『あら、動いたわ』
『これは蛇の負けかしら』
……こいつらは、そうでもないみたいだが。自らを進んで化け物と呼ぶ双子は楽しそうに戦いを観察している。
そして、その注目の蛇と雅の戦い（この表現でも眩暈がする）にもついに決着がつきそうだった。
雅の蔓が――我々に慣れ親しんだ言い方で言おう。一本の触手が蛇を捕らえたのだ。
それは糸が糸に絡むよう。次々に他の触手もそれに混じり、グネグネと黒と緑が絡まりながら丸まっていく。
蛇は触手に牙を突きたてようとするも、その頭部を残った触手がぴしゃりと叩く。
そうして、蛇がぐったりした頭部だけを露出させた蛇団子が完成し、距離にして十mほどの場所から、雅はゆっくりとそれに近づいていく。
『串刺しね』
『わくわく』
ごくりと、息を飲みながら俺は彼女の杭を見つめ続ける。
雅が狩人なら、彼女が蛇を殺し、事件解決が一番いい形なのは分かっている。しかし、なんだろうこの焦燥感は。
分かっているのか雅は。あれは、相手は化け物だけど、だけど俺達の知り合いかもしれないんだぞ。
分かっているのか俺は。あれは、相手は化け物で、姫足を食い殺した相手なんだぞ。

自身が何に不安を感じ、何に焦っているか分からないまま俺がヤキモキしていると、蛇の様子に変化があった。
頭を叩かれ、ぐったりとした様子だったそいつが急に顔を上げ、するりと蔓から抜け出したのだ。
あんなぐにょぐにょしたものを拘束しようとしたのが間違いだったのか、蛇は地面に体をつくやいなや、再び跳躍。
雅へと飛び掛った。
だが、それに対しても雅は慌てなかった。あるいはそれが彼女の狙いだったのか。
「シネ」
雅は低く呟くと、腰を低く沈ませた。
キュイイイン！
同時に彼女の腕から、甲高いモーター音のようなものが発せられる。
それと共に触手が彼女の腕へと、ほどけ、暴れながら巻き取られていく。
触手の群れに煽られ、ぶつかられながらも蛇の突進は止まらない。
空中の蛇に対し、雅が跳躍した。
触手は杭へと巻き突いてゆく。肘のほうへ行くほど多くの触手が巻きつき、その形は円錐状。まるで糸を巻いたベーゴマのようだ。
もしくは――。
『『ドリル！』』
彼女はそれを、口を開けようとした蛇の下顎へと叩き込んだ。
ブチャッという音がして、先端が蛇に突き刺さる。
双子の表現通り、その途端触手の塊は再び甲高い音を立てながら回転を始めた。
回転しながら、円錐がドンドン小さくなっていく。
あれはきっと、あの傷から凄まじい勢いで蛇の内部に触手を抉り入れているのだ。

脳があるなら、今まさに直接かき回されているのだろう。　蛇の体が声もなくビクビクビクと激しく痙攣している。
「ハジケロっ！」
雅の声と共に、バァンという爆発音。　蛇の頭部のいたる所から触手が突き出た。
更に彼女が腕を振りぬくと、蛇の頭が四散し、ちぎれた胴体がずしゃりと地面に落ちた。
そして雅も着地。　彼女が腕を一振りすると、ピシャァンという音と共に地面の叩きつけられた蔓が、周囲に蛇の肉片を撒き散らす。
俺は鉄骨の裏に隠れなおし、荒い息を吐いた。
「俺、よくあの子にシネ！って言われてたんだけど」
『『へぇ』』
「トーンがまったく一緒なんだ」
『冗談を言わない子なのね』
『有言実行なのね』
恐らく実行される予定があるはずだ。　俺の正体がバレれば、それは確定事項となる。
「逃げよう」
俺の決断は早かった。　そっと一歩を踏み出す。
ベチャ！　その踏み出した先には、蛇の黒い肉片が転がっていた。
活きが良かったのかしれないが、そんな派手な音を出さんでも良かろうに。　死骸で仇とはいえ、その生々しい感触に鳥肌が立つ。
「ダレ！？」
だが、悶えている暇もない。　案の定ミーヤが鋭い声を発した。
もう逃げられるとは思えない。　仕方なく俺は鉄骨の影から全身を晒した。
そしてそんな俺の目の前に写ったのは、俺の姿を見、目を見開いた雅、それに――。
「まだだ！」
それを認識した瞬間、俺は叫んだ。　自分でもその事態が信じら

れなかったが、叫んだ。
雅の足元、胴体だけになった蛇が動いたのだ。　更にその中からにゅるり、粘液に塗れた頭が飛び出した。
亀かあいつは！　と俺が内心ツッコミを入れる間にも、蛇は俺の方を向いている雅に対し、のっそりゆっくりと鎌首をもちあげていく。
「ミーヤ、後ろだって！」
俺の二度目の呼びかけで、雅はようやく後ろを向いた。
蛇は彼女が振り向くと、びくりと動きを止め、器用に軌道変更をしその足元を這い抜けた。　そして奴が向かう先は――。
「俺かよ！」
奴は、一直線に俺へと向かってくる。
叫びつつ、俺は一瞬口を開くか逡巡してしまった。
今口を開けば、雅に俺の正体がバレてしまう。　だからと言って、開かなければ俺の生涯がジ・エンドだ。
死ぬよりはマシってので借金を重ねていくと、雪だるま方式に増えていって最後にはあの時死んだほうがマシじゃないかって思うような結果になる。
ふとそんな言葉が思い浮かんだが、今回はそれに当てはまるのか？　このまま終わって良い訳……。
などと長考している余裕はもちろんなかった。　蛇は俺の目の前まで迫っており――。
「うわぁぁぁ！」
しかし、俺が予想していたような食う食われるの関係は、発生しなかった。
ごつん！　と代わりに俺の下顎にひどい衝撃。
生え変わった蛇の頭が、俺にアッパーを決めていた。
吹っ飛ばされて後ろに倒れた俺の上を、蛇がずろろっと這っていく。　その独特の感触に、俺は口を開くどころではない。
蛇は俺の上を通過すると、ガラスの嵌っていない窓から飛び降り

た。
　放心したまま俺は、半ば朦朧とした頭でその後ろ姿を見送る。
それから粘液に足を滑らしながら急いで立ち上がり窓枠に取り付くが、もう遅い。
　周囲はただだっ広い田んぼだというのに、視線を巡らせても蛇の姿は既になかった。
　なんだったんだ、今の動き。　あれじゃまるで……。
　考えながら左右を見回し、隣で同じ動作をしているミーヤに気づいた。
「に、逃げられちまったね」
　ぎこちない笑顔で、話しかける。　叫んだ時に口が裂けたかと心配したが、そういうことは無いようだ。
　俺が確認の為に自らの顔に触れると、ぬめっとした蛇の粘液が指についた。
　ミーヤはそんな俺をギッと睨んだが、それが如何に手加減した表情か今は分かる。
　いや、かと言ってこの背中に流れる冷や汗は止められないのだが。
「何で、ココにいるの？」
「いや、でっかい音がしたんで何かと思って」
　俺にそう言われると、ミーヤは慌てて窓の外を再度見渡した。
「大丈夫、周りには俺しかいなかったよ」
　あくまで多分。　俺が彼女を安心させる為にそう言うと、彼女はほっと息をついた。
　しかし、すぐに俺を再度睨む。　バツの悪さもあってなのか、視線ビームの強さは更に三割減していた。
「ええと……」
『一般のフリをしなきゃ』
『化けの皮を被って、人間のようにね』
　どう話そうか迷った俺に、双子が唐突に助言した。　心臓に悪いからやめてほしい。

「映画の撮影、とかじゃないよね」
『古い』
『ベッタベタ』
皆がする反応だから、ベタって言うんだろうが。
粘液でベタベタの体を気にしながら、内心で毒づく。笑顔が引きつるのを抑えられない。
しかし、ミーヤはその笑顔を不審には思わなかったようだ。
理由は多分、俺の視線が一瞬、彼女の右腕――いまだにウネウネと動く触手に向けられた所為である。
「別に、無理しなくて良い。怖いのが普通ダカラ」
睨んでいた視線をはずし、俯き、ミーヤは自虐的な笑みを浮かべた。
そりゃ、誰だって化け物と罵られたり、恐れられたりするのは、辛い。
彼女だって俺と一緒だ。そう思うと急に胸が締め付けられる。
こんな時俺ならどうして欲しい？　なんて言って欲しい？
――彼女は、どうしてくれた？
「大丈夫、忘れさせてアゲル」
思い出そうとしていた俺の思考に、ミーヤの言葉が割り込んだ。
いつの間にか顔が近づけられている。
え、何？　唐突に色っぽい展開？　いやいやいや。
俺は窓と彼女から後ずさりして離れた。
雅の表情は、先程の弱弱しいものから、ゾクりとするような冷たいもの。　蛇を始末した時のようなお仕事モードに戻っている。
これはまずい。　何をされるか分からないが、猛烈にやばい予感がする。
何か、彼女を思い留まらせる素敵な言葉は無いか？
「今日の素敵な君を、忘れたくないな」
その言葉に、ミーヤが怯む。
皮肉だと思われたか？　いや、違うんだ。　別にその姿が変って

言いたいわけじゃなくて……。
しかし彼女を慰めてる場合ではない。　ミーヤは再び俺に近づいてきている。
他に彼女の歩みを止める言葉はないか。　俺は頭の中を必死で探り――。
「昨日も蛇を見た！」
叫ぶと、ミーヤの足が止まった。　口を開けすぎて、端が少し破れたが
彼女が完全に留まったのを確認して、更に一言足す。
「それで、今日も奴を探してたんだ。そしたら――」
「詳しく話して」
よし、食いついた。
ミーヤの右手のにょろにょろも興味深げに揺れている。　そう考えるとあの腕もちょっとだけ可愛いものに思えてきた。
俺自身の混乱も治まってきた。　充分だと判断し、俺は喋っていた口を一旦閉じた。
「……どうしたの？」
「この先は、君の知っている事と交換でどうよ」
肩を竦め、両手をかるく挙げてながら言ってやる。　グローバルなジェスチャーのほうが分かり易かろう。
「取引する気？」
対するミーヤは生意気、とでも言いたげである。
「一応君より先輩なもんでね」
あくまで学校の中では、だが。　世界的に年功序列って通用するんだっけか。
言ってやると憮然とした表情になり、ミーヤは考え込む仕草を見せる。
考え込む彼女の返事を、俺は冷や汗を流しながら待った。

化け物の生態

「……」

「……あ、あの、ミーヤ？」

ミーヤとの取引を提案した俺だったが、彼女からの返事は一向に返ってこない。

考え込んだ様子で下を向いているだけである。

そうしていても仕方がないので、俺は先程から気になっていた場所を調べる事にした。

背中を向け、逃げる気がない事をアピールする為に殊更ゆっくり歩きながら、蛇がミーヤに貫かれた所、そしてあの蛇が唐突に起き上がった地点へと向かう。

するとそこには――。

『皮ね』

『皮だわ』

言いながら、双子がふわりと俺の目の前、地面に横たわるそれを挟んで降り立った。

そこには、真っ黒で細長い、目をつけてやれば鯉のぼりとして通用しそうな鱗の跡のついた物体があった。

多分、蛇の皮だと思われる。　さっき散々拾った物より大分大きいが。

「完全に吹っ飛んでるよなぁ、頭の部分」

俺が先程鯉のぼりと喩えたのはその為だ。

蛇の皮にはあの凶悪な頭部分がなく、巨人の履くニーソックスのようになっている。

「化け物って、こんなに無茶苦茶なモノなのか？」

俺はしゃがみ込み、あくまで独り言のような口調で、双子に問いかける。

ゾンビだって頭潰されりゃ何とかなるのが、ホラー映画の定石だ

というのに。
もしかして、化け物って死なないんじゃないのか？　なんて事まで頭に浮かぶ。
『貴方だってその一部なのよ』
『まぁ、ここまでしぶといのは稀だけど』
不死身だなんて、そりゃ無いか。　じゃなきゃ狩人なんて存在しないだろうし。
「じゃぁ、何で……」
『脱皮したからじゃない？』
『そうすれば完全回復なのよ、本人的に』
「体力ゲージ制かよ。　ゲーム脳だろこいつ」
振り返りかけた俺の目の前に、双子が回りこんで答えた。
「ていうかそんな思い込みで生き残れるなら、病弱少女も幽霊少女もいねぇよ」
いや、後者は俺の目の前にいるが。
本人達に言うと怒られるだろうが、まぁ事実かどうかは関係なく属性的な話だ。
『私達化け物と人間の違いはね』
『その思い込みで進化できる事なのよ』
「進化ぁ？」
哺乳類から爬虫類になってるじゃねぇか。　俺が胡散臭げな声を出すと、双子がしぃっと人差し指を口の前に置いた。
いや、しかし胡散臭げな声が出てしまったのは、仕方ないと思っていただきたい。
『私達の生態は、スキンを持つ事の他は全て、本人の意思で決定されるの』
『そう思ったようにしか変化しない。　そしてそうだと思ったならそう成れる』
「無茶苦茶だ」
『他の生き物の進化にだってあるでしょう？』

『まず飛ぼうと思ったから長い時間をかけて飛べるようになったとか』

思っただけで、人間が一代で空飛んだりエラ呼吸できたり出来るようになっても困る。

進化論に対する冒涜だ。ダーウィンだかミケランジェロだかの先生だって怒るだろ。

「お前らの言ってるのは、想像妊娠で本当に子供生んじゃうみたいな事だぞ」

『あら、分かってるじゃない』

『私達はそれを、皮の下で本当に育むの』

双子は愛しげに腹を撫でている。まるでそこに自分達の可能性を抱いているように。

じゃぁ種はどうなる。その子供を育てる栄養は？　仙人だって霞食えるようになるまでは相当時間かかるんだぞ。

……まぁ、冷蔵庫を丸呑みする化け物が物体を透過する幽霊――化け物にそれを問うても空しい事である。

だったら受け入れるか？　いやいや、負けると分かっていてもレジスタンスするべき局面が世の中にはある。

「……じゃぁ俺が世界最強だって思い込んだら、そうなるってのかよ」

『もちろんなるわ』

『純粋に、ただひたすらに、いっぺんの疑いも無くそう思えるならね』

計四つの目で、双子はできるの？　と問いかけてきた。

――俺は、自分の事を常識人だと思っている。頭吹っ飛ばされたら、考える脳が無くなっちゃうじゃんとしか思えない。

そもそもこの変幻自在の頭に脳が格納されているか怪しいが。

できるなら女の子にモテモテのヌルヌル人生を歩みたいと思っている。

だが、同時に自分が人の生など歩めないだろう事など、双子に指

摘されるまでもなく知っている。
誰かに急にそう言われたからって、あぁそうだ俺は最強なんだと思える奴なんて、幼稚園のそれもサンタに気づいてない時期の子供ぐらいだろう。
そんな子供達だって大半は、無意識に気づいている。都合が良いから見て見ぬフリをしてるだけだ。
性悪説なんて大層なものを振りかざす訳じゃなく、人間はそういうズルい部分を生まれつき持っていると、俺は思う。
化け物が人間について考察するってのもおこがましいから、この辺にしておくとして。
ともかく、まぁ、俺には無理だろう。
逆に言えば、それができる蛇の頭は、そういう単純な構造をしているという事か？
しかし俺は、そいつにハメられ、罪をなすりつけられそうになっている。なんなのだろう、この犯人像の矛盾は。
「て言うか、今流しそうになったけど、俺は人間を食いたいなんて思った事はねぇ」
今更気づいて、俺は双子に反論した。本人がそう望まなきゃ変化しないっていうのであれば、おかしな話である。
俺はそもそも口がでかくなって欲しいなんて、思った事もない、はずだ。
『小さい頃の話なら、断言はできないんじゃない？』
『スイカを丸ごと食べたいなんて思ったかもしれないし』
そんな些細な夢でこの有様は酷すぎる。
いくら幼い俺でも、そんなバカな事を口が裂けるほど熱望する訳……。
な、無いよなぁ、大丈夫だよなぁチルドフッド俺。
「だったら、何でお前らはそんな格好なんだよ」
尋ねると、双子は同時に一瞬表情を消して、口だけを笑いの形に戻して答えた。
『決まってるじゃない』

『なりたかったからよ』
それは多分、パパやママを驚かせたいとか、可愛らしい理由ではあるまい。
どういうことか尋ねようか俺が迷っているうちに、双子は俺の中へと消えた。
「うーん」
様々な事に対して俺が頭を捻っていると。
「ｕｍｍ・・・・・」
背後では何だかグローバルな唸り声が聞こえた。
そちらを見るとミーヤが、何かを探し回っている。　右手を押さえて触手をユラユラさせて…だからきっとアレだろう。
俺は自分が先程までいた、鉄骨の影まで移動して、屈みこんだ。
そこにあったのは、血が通っていない為か、いつも以上に青白い、ミーヤの手の皮。
抵抗が無いといえば嘘になるが、それをひょいと拾い上げて、俺は彼女に手を振った。
「お探し物はこれかな？」
「え、あ、ウン……」
俺がそれを発見した事を見て取ると、ばつの悪そうな顔になる。
これは、全ての化け物に共通する、いわば化け物の証左だ。
それを一般人（あくまで彼女の視点ではである）がもっていれば落ち着かないだろう。
分かっていながら、俺は埃を払い、中に砂利が無いか確かめつつ、彼女に近づいた。
「ほら、手ぇ出して」
人間の形をした、左手を出すミーヤ。
俺はそれをかわし、右手の、蔓を取った。
「そっちじゃなくてこっち」
「あっ！」
取られたミーヤは、驚きの声を上げて固まってしまった。

俺はそのまましばらく待つ。
ミーヤから硬直が融けていくと共に、奥から不安そうな顔が覗いた。
多分、「怖くないの？」だ。
本当に、判り易い子だ。　俺が昨日同じ経験をしているのも、関連してるんだろうが。
――こんな時、彼女はどうした？　どうしてくれた？
「ええと、どうやってはめれば良いのかな？」
なんでもない風に尋ねると、ミーヤは戸惑いながら、ちょっと待ッテ、と言う。
間があって、彼女の右手の触手がするすると音を立て、縮み始めた。　おそらく掃除機のコードのように触手を巻き取っているのだろう。
どこに？　それは聞かない約束だ。
やがて雅の右手は、銀色の円錐に蔓が張り付き、その頂点でまとまりきらなかった蔦が五本飛び出すパーティーハットのような形状に変化した。
「ここにはめれば良い訳ね」
俺は彼女の肘に手を添え、、手の皮を近づけ――。
「そっち、ギャク」
「失礼」
親指に小指の皮を被せてしまった。　やり直して彼女の腕へと皮を被せていく。
まるで結婚指輪をはめるように、丁寧に一本一本、指の皮に中身をつめると、彼女の手の皮に赤みが差し、息づいていった。
「ミーヤの指は綺麗だね」
「あ、アノ……」
鼻歌でも歌おうかと言う俺に、ミーヤがたまらずといった具合に声を出した。　あぁ、彼女が聞こうとしている事は分かっている。
こんな時、姫足なら――いや、あれは俺には真似できない。

俺は五本の指に血が通った事を確認すると、彼女を制して言葉を放った。
「ミーヤってさ、乳輪大きいよね」
「ナァッ！？」
猫のような悲鳴を上げ、ミーヤが手をほどき、後ずさった。
どうして良いのか分からない、と言った感じの右手が鉤型でピクピク動いている。
皮との継ぎ目もないし、なるほど便利なもんだ。
「イイイイ、イツ見た！？　テ言うか大きくナイ！」
「そうだね、乳首と比べて大きく見えるだけかも」
「シ……だから、私は――」
多分死ねと言いかけてやめた可愛らしいミーヤを、俺は軽く手を上げて遮った。
「その程度の違いだよ、大したことじゃない」
なるべくいつも通り、笑ってみせる。
ミーヤは何か言おうとし、口をもごもごと動かしたが、結局大きなため息を一つ吐きつつ力無く呟いた。
「アンタが、どうしようもないバカだっていうのは分かッタ」
そうして、後ずさった分、こちらに歩み寄ってくる。
「むしろ、今までそう思われてなかったのが光栄だな。　あと大きさは気にしないほうが良いよ。　おっぱいがもっと大きくなれば自然と――」
ガスッ。
「あいたぁ！」
「再、確、認、シタ！」
スネを蹴り上げて、ミーヤは悶絶してしゃがみ込む俺の脇を通り過ぎてゆく。
「あ、ちょ、ちょっと」
「場所を変エル。ココじゃ人が来るかもしれないシ」
「大きな音もしたしね」

「ウルサイ！」
振り返って怒鳴られた。　そのままスタスタとミーヤは階段を下りて行ってしまう。
とりあえず、置いて行かれることは無いようだ。　取引も成立ってことだろう。
それはそれとして、痛みにしゃがみ込んでいた俺の前に、双子が再びふわりと現れた。
『今、普通に皮を拾ったわね』
『化け物にしか見えない物なのに』
「あ……」
失念していた。　が、ミーヤはそれを咎める様子もなかったな。
助かった、のか？
『ねぇ』
『本当に思ってるの？』
俺が今更胸を高鳴らせていると、双子が唐突に、そう問いかけてきた。
「何が？」
一応とぼけて見たが、うん、こいつらが聞きたい事もよく分かっている。
『『自分（化け物）が人間と大して違わないだなんて』』
双子は珍しく、ステレオで別々のことを言ったがまぁ内容は、一緒だ。
どうせ、こいつらだって分かってるんだろう、俺の答えなんて。
息を吐いて、それでも俺は答えた。
「そんな訳、ないだろ」
答えが分かりきっていても、口に出すと出さないとでは、大分違う。
胃の奥が、きゅうっと冷えていく。
あぁ、俺は彼女に、同じ悩みを抱えているはずの雅に、一時しのぎの嘘をついたのだ。

姫足の真似など、出来るはずはない。　俺は相変わらず最低の、化け物野郎だ。
『安心した』
『仲良くしましょ、これからも』
今まで見たことがない優しい笑みを浮かべて、双子は俺の頬を撫でるような仕草をしながら、俺の中へ潜っていった。
返答次第ではどうなっていたのだろうか。
……俺は別に、お前らの意見に全面賛成って訳じゃないんだからな。　心中で、俺は双子に舌を出す。
人間と化け物、その二つを区別しない奴がいたって良いと思う。怖いと思っていても手を差し伸べてくれる奴がいるのは、尊い事だと思う。　まぁそれはあくまで、そいつが人間だった時に限るのだが。
今俺が雅の目にどう映っていようと、本性が化け物で、本質的には人間を――化け物をも恐れている俺が言っても嘘にしかならない。
彼女を真に救ってやりたいなら、キャラメイクを種族人間でやり直す事をお勧めする。　俺はどうやったって、口裂けの化け物なのだ。
「ダイスケー？」
「はいはーい」
かけられた声に返事をして、俺は外へと向かった。

楽しい日本語講座

「私はハンター」
椎名雅の正体は、すぐに知れた。
駅前まで帰ってきた俺達は、そこにあるハンバーガー屋の二階で、並んで座っていた。
昨日殺人事件があり、今日も蛇が暴れまわっていたとは思えないほど、窓の外の人々は忙しそうに、あるいは平和そうに行きかっている。
「キョウカイに所属し、さっきみたいな化け物……ミミックを狩っている」
ミミックねぇ……。擬態して人間に紛れ込んでるから、って由来で良いんだろうか。
まさかＲＰＧが語源ではあるまい。
「教会って、ミーヤもしかしてシスター系？」
更にもう一つ、気になる単語があって、俺は雅に尋ねた。妹系という意味ではない。
あの修道服を着てお祈りする方だ。異端者狩りなら定番と言えるかもしれない。
「チガウ、Ｃｈｕｒｃｈじゃなくてｓｏｃｉｅｔｙ」
だが、ミーヤはそれを流暢な英語で訂正する。
俺にはパッとその意味を思い出せず、しばし沈黙。
「あーと、協会ね。十に力が三つついたあのむさ苦しい漢字の」
しばらくし、俺が納得した声を上げると、今度はミーヤが首を捻る。ジャパニーズジョークは理解し辛かったか。
「ともかく、当協会には宗教的な主義主張は一切含まれてイマセン」
「なしてそんな業務口調」
「一度、これで宗教戦争になりかけた」
ぽつりと、至極真剣な顔でミーヤ。

「ぶっ」
俺は思わず、口に含んでいたオレンジジュースを吹きそうになる。
口を塞いで我慢したが、逃げ場をなくしたジュースが頬の皮を突き破りそうになった。
そんな俺の横で、ミーヤが羽の生えたミミックを天使と見間違えた宗教関係者が云々とたどたどしく言葉を続けている。
まぁいいや。なんか恐ろしそうな話だし、つっこまないでおこう。喩えでなく、薮から蛇な話はこれからなのだ。
「あいつらは、ミミックは人間を殺して愉しんでる。悪い生き物。だから、やっつけなきゃいけない」
などと考えている俺の横で、ミーヤがあっさりと聞き捨てならない事を言った。
例えば俺が人間なら、あ、そうなんだと納得するぐらいの気持ち良い断言っぷりだ。
俺は今はその真っ当な一般人間のフリをしているので――。
「あ、そうなんだ」
と納得しておいた。化け物マストダイ、なんて勢いの組織なのだから、まぁそんな認識なのかもしれない。
変に感情移入すると、本来の目的である化け物を排除するっていう基礎が揺らぐ。
だからその協会としては、俺みたいな例外は存在せず、化け物をイコール絶対悪でまとめておく必要があるんだろう。
先程の業務口調と一緒だ。組織が存在する為の前提であり注意書きである。それを疑う奴がいても、根本はそれを信じる奴で構成される。
そもそもそんな組織必要なの？　とは化け物である俺が疑問を挟める事ではない。
だが、そうなると一つの、大きな大きな疑問が頭をもたげる。
「質問なんだけど」
はいと軽く手を上げると、ミーヤは二つ目のチーズバーガーにか

ぶりつきながら、どうぞと俺に手を向けた。　意外とノリは良い子なんだよな。

「ミーヤとお――あいつらって、なんか違うの？」

その質問に、やはり、案の定、ミーヤは租借する口を止め苦い顔をした。　ハンバーガーのCMだったら、降板ものの表情だ。

本来この疑問は、彼女から散々情報を聞き出して、余裕があったら聞くべき物だった。

どう考えたってデリケートな質問だ。　例えば妙齢の女性の年齢のように、ベッドの中で念願を遂げられた後でも聞かないほうが良い類の。

正に薮蛇になりそうなこの質問をしたのは、これから会話するにあたって俺の立ち位置を決め直したかったからだ。　表面上の態度はともかく、心中での彼女への見方を。

別に、イラっと来て衝動的に聞いたわけではない。

「……チガウ」

しばらくの間の後、ミーヤははっきりと答えた。　そして忌々しげに、チーズバーガーをもうひと齧りする。

「私は、人に危害を加えたり、人を殺して喜んだりはしない」

しかし、その理由は先程の化け物の説明と同じだ。

ミミックは人間を殺す悪い生き物。　ワタシチガウ。　イコールで私は化け物じゃないって話だ。

馬鹿馬鹿しい。　それなら俺も化け物ではなくなるし、天を仰いだら目があったこの双子だって、化け物ではなくなる。

「中にはひっそり暮らしてる奴も――」

「いない、ミミックはみんな人殺し」

断言しやがった。　目の前で頬を破って「ここにいるぜ！」とか叫んじゃろか。　しかしこの剣幕だと、即座にドリルを叩き込まれるだけだろう。

『ひどい話よね。こんなに静かに暮らしてるのに』

『こんな狭屋で慎ましく生きてるのに』

うるさいわ。　俺が嫌なら、とっとと相撲取りにでも乗り移れ。
　まったくひどい差別だ。　誹謗中傷だ。　こんなデマ信じる奴はどうかしている。　しかも同じ皮剥ぎの化け物がだなんて。
――とはいえ。　俺の頭に、ミーヤの憂い顔が蘇る。
彼女とて、それを心から信じられている訳ではないんだろう。
自分が化け物ではないと真に思っているなら、あんな怯えた目をしない。
　信じられないから、怖いからこそ化け物を殺すのだ。　そしてその砂の城を一生懸命補強し、繕っている。
「ドウシタノ？」
　俺が頭を振ると、雅は怪訝そうにこちらを見た。
『同情できる立場じゃないでしょ？』
『ほら、もっと聞き出さなきゃ』
　双子はガラスを通り抜け、窓の外を浮いている。
　本当にうるさい奴らだ。　その指示に従う訳ではないが、俺はミーヤに質問を重ねた。
「それで、この街には他の、協会のメンバーは来てるのか？」
　例えば占い師とか。　とは言えず、まずは曖昧に聞いてみる。
「タブン……」
　ミーヤの答えは先程までの断言っぷりが嘘のような、俺以上の曖昧さだった。
「タブンって？」
「一人は、来てる、と思う」
「……思うって？」
「知らされてない。私は協会に信用されて、ないカラ」
　問い詰めると、ミーヤがシュンと小さくなる。
『何いじめてるの』
『そんな小物だから、私達も窮屈なのよ』
　ちょっと待て。　お前らの居住スペースって俺の心の広さなのか？
……大体、俺は虐めている訳じゃない。　虐めているのは、多分

協会って奴の方だ。
ミーヤが言うもう一人ってのは、多分占い師って奴のことだろう。
それが、狩人であるミーヤに所在さえ知らされてないってのは、明らかにおかしい。
それじゃ守りようもないし、狩る相手も分からない。仕事の果たしようが、無い。
やはり、皆殺しを主とした組織に、その対象が紛れているというのは、俺の想像を絶する軋轢があるのだろうか。虐めなんて軽い言葉で済まされない、ひどい扱いを受けているのかもしれない。
狩人なんて役目も実質鉄砲玉で、任務とやらも失敗するように仕組まれているのかも。だから、ミーヤも必死になっているのだ。
先程まで彼女に憤り、現在進行形で騙しているこの俺が怒る権利などは無いのだが。
大体これは俺の推測な訳だし、彼女に同情する前にもっと話を聞いておこう。
「そ、それじゃ大変でしょ。なんか指示とか来ないの？」
「半年前に命令を受けて以来、追加の連絡は無い」
虐められてる。絶対虐められてるよこの娘。くそう、やっぱ組織許すまじ。
「さ、最初はなんて言われてきたのさ」
「行方不明事件の調査。そして占い師の保護」
……出た、占い師。
俺は一拍間を置いてから、それが初めて聞く単語の如く反応しようと試みた。
「うらしない？」
『バカ』
『それじゃ言語中枢破壊されてる反応よ』
少しやりすぎたようだ。そりゃ占い師なんて単語ぐらい、一発で聞き取れるか。
「違う、占い師。間違いやすいけど」

「易いんだ!?」
俺以上に言語中枢メタメタな子がいた。　ミーヤは俺の間違いに呆れるでも笑うでもなく、真剣な顔で首を横に振る。
間違えないって。　占い師をその、うらしない？　とか。
むしろこんなくだらないこと言ったのが、猛烈に恥ずかしくなってきた。
「そ、それで占い師ってどんな奴なの？」
気を取り直して、俺は彼女に聞いてみる。
「化け物を探し当てる才能を持った人間」
それも知らされていないのでは、と思ったが流石に杞憂だったらしい。　ミーヤがそう説明する。
「探し当てるって、具体的には？」
「知らない……」
「いい転職先あるんだけど、紹介しようか？」
かと思えばこれだ。　あまりにも不遇である。　割と本気で、俺はミーヤに提案した。
新たな就職先は、俺の嫁という三食ピロートークつきの素敵な職場に決定だ。
「これは別に知らされていない訳じゃナイ。　協会でも知っている人間はホボいない」
自分が何も知らされていないお子様だと思われるのが嫌だったのか。　ミーヤがむくれながら付け足した。　その態度が実にお子様っぽくて良い。
「へぇー」
「ダイスケ、信じてない」
「いつでも貴方を信じてますよ、お嬢さん」
爽やかに笑ってやるが、ミーヤは胸を高鳴らせた気配も無くジト目のみを俺に向けた。
まぁ、言ったのが大嘘だったからかもしれない。
気分的には手を取ってキスしてやりたいぐらいだけど、ヘタに手

を出すと三個目となったチーズバーガーを奪われると勘違いされそうだから、やめておこう。
　今時好物でキャラ付けしようとか安易ですぜお嬢さん。
「……ダイスケ、その二段重ねのハンバーガー何個め？」
「五個目」
　今時大食いキャラとか流行んねーし。
　ともかくミーヤの話が本当だとすると、占い師の正体は手がかり無しというわけだ。
　しかし、それならそれで疑問が一つ沸く。
「ミーヤはあの蛇、どうやって見つけたんだ？」
　占い師とも連絡がつかないなら、彼女があの蛇を見つけたのは自力ということになる。
　俺のように脱皮跡に気づいたからだとしても、昨日の学校に彼女は現れなかったし。
「カン」
　俺の疑問に対するミーヤの返答は、非常にシンプルだった。
「カンってミンカンとかアンカンとかのカン？」
「ウン」
　童女のように首を縦に振るミーヤ、
「いや、それだとさっぱり意味通じないから」
　彼女が言いたいのは『勘』だろう。　麻雀で化け物の位置が分かるなら、苦労はない。
　ミーヤがぶっきらぼうに喋るのは、きっと長く喋るとボロが出るからだ。
　アレ？　もしかして今のウンってのも、肯定じゃなくて『運』？
　まぁどちらにしろ、論理的な根拠があってあそこにいた訳ではないらしい。
　しかしあそこは、結構な僻地だ。　偶然であんなところ通るか？
　そんな風に俺が考えていると――。
「私は話した。ダイスケも話シテ」

ミーヤがこちらに、鋭い眼光を向けていた。
狩人の目だ。　彼女の狙う獲物は今の所俺でないハズなのだが、怖気が抑えられない。
彼女が言っているのは、俺が取引条件に使った、昨日のプールでの出来事だろう。
本当の事は話せないが、早期解決の為には彼女に協力したほうが良さそうでもある。
実は嘘だったなんて言ったら、ぶっ飛ばされて貫かれそうだし。
「話シテ」
考えている間に、ずずいっとポテトを突きつけられた。　形状的に先程のドリルを思い出させ、俺は思わずそれを食ってしまう。
怖い物は思わず食ってしまうのが、悲しいかな俺の習性だ。　いっそミーヤも食べてしまおうか。　いや、口でじゃなくてね。
「んー、女の子に食べさせてもらうポテトは格別だね」
「あ、アゲテナイ！話してって言っタノ！」
俺の行為に怒ったミーヤは、報復とばかりに俺のポテトをいくつかぶんどって頬張った。　まぁ、俺のほうが先輩だし広い度量を見せてやろう。
「もう一個サービス。あーん」
俺は手に持ったポテトを差し出すが、ミーヤはぷいっと横を向いて食おうとしない。
「……食ってくれなきゃ話さない」
小声でそう言ってやると、ミーヤはいつも通りギンと俺を睨む。
だが、しばらくの葛藤の後、俺が指で摘まんでいたポテトにパクついた。
「うむうむ、味わって食うのだぞ」
めちゃめちゃ睨んでるけど、上目遣いが心地良し。
ご満悦の俺だったが、彼女の歯は俺の指まで上ってき――。
ガブリ！　次の瞬間、俺が持っていたポテトを一口で全部歯の内側に収めていた。

今咄嗟に離さなかったら、指をバッツリいかれてたぞ！？
や、やっぱ怖いこの子。
「さぁ、話せダイスケ」
「はい……」
『弱っ』
『そんなだから呼び捨てなのよ』
くそう、仰るとおりです。
「えーと、どっから話せば良いかな。　まず蛇を見つけた場所だけど――」
「学校のプール？」
「よく分かったね」
「女子更衣室のドアノブ。普通の壊れ方じゃなかった」
アレをやったのは俺なのだが、　まぁ言う訳にもいかないので蛇に罪を被せてやろう。
あっちだって俺に罪を着せようとしたんだから、おあいこだ。
「俺もその壊れ方が気になって中に入ってみたんだ」
「そもそも何で夜の学校に？」
「え、ミーヤが水着とか下着とか忘れ物してないかチェックに――」
言いかけた俺の前で、ミーヤが左手で自らの右手首をつかむ。
「冗談だよ、そんな宇宙海賊みたいなポーズ取らないで」
しまったな、呼び出されたとも言えないし。
「えーと、忘れ物したんだよ。……んー、あっ、ハンカチ」
「ハンカチ？」
ミーヤが不審そうな表情になる。　やばい、ちょっと考えすぎたか。
「ほら、ミーヤに投げ飛ばされた時、手とか拭くのに綾菜に借りたじゃん。　それを落として。　借り物だから早く返さないとって思ってさ。　結局見つからなかったんだけど」
『喋りすぎ』
『あせってるのがバレるわよ』

双子に窘められるが、いや、だってミーヤがずっと首を捻ってるし……。

「あぁ、ハンカチってあの布」

……今ハンカチ自体を理解してなかった？　ハンカチーフって英語だよね？

いや、気のせいだろう。　時々発音はおかしいけど、一応意思疎通は出来ているはずだし。　うん、スルーしよう。

「で、プールを覗いてみたら、姫……片瀬がいて」

あの時彼女と話した……というか俺があそこに追い込んだ事を誤魔化す自信がない。

「片瀬センパイが、なんで？」

「それは、分からない」

なので、ここはこう言っておこう。　色んな意味で苦しいが、俺も彼女が何故あそこにいたのか分かってはいないのだ。

話を進めていく内、俺の頭の中で昨日の出来事が再生されていく。

「そしたらそこに、蛇がどっかからプールに飛び込んできて……」

息を一旦吸う。　別にミーヤを脅かしたかったわけではない。

俺があの事を人に話すのに、ちょっと準備が必要だっただけだ。

「片瀬を、食った」

言いながら、俺は表情筋を動かさない事に全神経を使う。

もちろん不自然だろう。　だが、今の胸中が表に出たらどんな表情をするか、自分でも分からなかった。

手を握られただけでこんなに入れ込むとは、俺はどれだけ重たい男なんだ。

そう茶化して心を落ち着けようとするのだが、心の奥の俺が、「だけじゃねーよ！」と必死で抗弁している。

お前どんだけ姫足好きになってるんだよ。

……普通の、人間ならこんな時どんな表情をするんだろう。

俺が感情のまま出す表情は、化け物のそれではなかろうか。　そ

う思うと、中々表情を変える事が出来ない。
「ダイスケ、大丈夫？」
今までに見せた事がない、本気で心配そうな顔をしてミーヤ。
やはり無表情は不自然だったか。　それとも、何らかの感情が表に出てしまっていたのだろうか。
「うん、いや、平気」
昔先達が言っていた。　どんな顔をすればいいか分からない時は笑えば良い。
その通りに、俺は手で顔をごしごしと拭ってから苦笑して見せた。
『いつもアホ面だから』
『余計違和感があるのよ』
前も言っただろ、それ。　双子を睨んでから、俺はミーヤに視線を向けなおした。
「それで、蛇は凄い勢いで穴から逃げていった」
「アナ？」
「ほら、昨日俺が金網を倒してできた」
言うと、ミーヤはまた、あぁと頷いた。　アナ、穴は分かるよね。
ミーヤにもいくつか開いてるやつだよ。
口に出したら、こっちにも穴もう一個増やされそうだから言わないけど。
「でも、あの金網が壊れているのを知ってるのは……」
「やっぱり、そう思うよな」
またしても、俺は言葉を切る。　そしてミーヤも言葉を続けない。

今の俺達は多分シンクロ状態だ。　思いついた事も、それを言いたくない気持ちも。
だから先に俺が言う。　こういうのは先輩の役目だ。
「水泳部の中に、犯人がいる可能性がある」
告げると、ミーヤは眉間に皺を寄せ、じっと俺を見つめた後、耐え切れなくなったかのようにぷいっと顔ごと視線を逸らした。

「……金網の上に上ろうとして、倒しただけかも」
いじけた子供のように俯いて、彼女はそう呟く。
「かも、しれないね」
その様子がなんだかいじらしく、俺はひとまず彼女に同意する事にした。
蛇が逃げる時、態々あそこに向かった光景を思い出すと、あれが偶然とは思えない。だが俺にそれを見せ付けた意図も不明だ。
あれが挑発ならまだしも、外部犯が犯人を水泳部員だと思わせるようなミスリードだった場合、俺が偶然説を否定する事でミーヤの考えを狭めてしまう。
彼女が身内を疑いたくないって気持ちも分かる。
俺だって、そこは同じな訳だし。
「でも、もし犯人が水泳部員なら、まずいかもしれナイ」
そんな風に考えている俺の横で、ぽつりと、ミーヤが顔を逸らしたまま言った。
「まずいって何が？」
「占い師も、水泳部にいるかもしれないから」
「はぁ！？」
ミーヤの言葉に、俺は頭の上から声をあげてしまう。
「それだと最悪狩人と占い師と犯人が小さいうちの部に密集してる事になるんだけど」
「私は任務を受けた時、あの学校の水泳部に所属するように命令された。だから、それぐらいの偶然なら、有りエル」
「いやぁ、でも……」
それだけではない。その他に俺という化け物までこの部には紛れ込んでいるのだ。
いくらなんでも密集しすぎだろう。
『化け物同士は』
『引かれあうのよ』
そんなどっかの漫画パクったような設定は、今すぐポイしなさい。

とはいえ、偶然以外の理由があるならそれはそれで恐ろしい。
そんなことになったら俺達全員の配役を知っていて、それを一堂に集めた裏の支配者みたいな奴がいるなんてシナリオだってクラフトできてしまう。
……またキャストが増えているじゃないか。
大学内のサークル恋愛じゃないんだぞ、もっと広いスケールで争えよ。　もしくはこじんまりとした部活らしく、何が盗まれたとかの小さな事件にしてくれ。
俺が頭を抱えていると、ミーヤは四つ目のハンバーガーにかぶりつき始めてしまった。
「えっと、で、その占い師かもしれないってのは誰なの？」
租借以外の為には口を開かないと決めたような態度の彼女に、俺は改めて尋ねてみる。
ミーヤはしばらく黙ったままハンバーガーに齧り付いていたが、手の中のそれが無くなると、口を尖らせながら言った。
「立島、綾菜先輩。　貴方の、お姉さん」
そしてその名前は、俺の中で一番意外なものだった。
綾菜が、占い師？　化け物を探し出して殺すって言う、あの？
「計算が合わない」
気がつくと、早口に俺はそう言葉を返していた。
蛇が事件を起こしたのは、半年以上前のはずだ。　そのずっと前から、綾菜は俺とこの街で暮らしている。　まさかあいつが、バカ姉の皮を被った偽者って訳じゃあるまい。
半年前に入学した鹿子や転入してきた姫足ならともかく、綾菜では辻褄が合わない。
「綾菜さんがいるこの街で、偶然事件が起こっただけかもしれない」
「で、その犯人も偶然水泳部にいたって？」
「それはまだ、推測……」
「じゃぁミーヤは、何で綾菜が占い師だって思うんだ？」

ミーヤが言い終わるか終わらないかのタイミングで、俺は次の質問を繰り出す。　自分でも気づかないうちに、肘を彼女に近づけ、体を捻り身を乗り出していた。
ミーヤはそんな俺を、狩人らしくない少々怯えた目で見る。
『ちょっと』
『何カッカしてるのよ』
俺の左右に双子が位置しなおし、窘めるような声を出した。
「悪い」
ミーヤの目とその二言で俺は我に返り、大きく息を吐く。　そしてそれと共に短く謝った。
何故こんなにイラだっているのか。　自分でも理由は分かっている。
辻褄が合わないなんてのは後付けの理由だ。　理由はもっと単純。あいつが、綾菜が殺しの手伝いしてるなんて、思いたくはなかったのだ。
俺はスリーサイズとまではいかないが、生まれた日も好きな食べ物も歩くペースも知っている。
そんな俺と十七年間一緒に暮らしてきたあいつが、俺の知らない所で俺と同じ分類の生き物を殺している。　そんな想像が恐ろしくて仕方なかった。
しかし、そんな事情はミーヤに言う事などできない。
ミーヤはしばらく俺の言葉の続きを待っていたようだった。　だが俺がそれ以上口を開かないと悟ると、先程の話を再開した。
「先輩は、この事件を調べてる」
「え？」
「深夜に複数回の徘徊。　行方不明シャの関係シャと接触してる」
「マジかよ……」
『一緒に暮らしてるのに』
『全然気づかなかったの？』
その通り。　まったく気がつかなかった。

一緒に暮らしている俺だけではない。　両親にさえも気づかせず、綾菜はそんな事をしていたというのか。

「で、でも、占い師って化け物が分かるんだろ？　だったら調査の必要なんて……」

「占い師ハ、特殊なセンスを持ってる訳じゃなく、優れた調査能力を持つ人間の称号なのかもシレナイ」

俺が反論すると、ミーヤは考えを整理しつつ母国語を日本語に変換しながら話しているようで、いつも以上にゆっくりと、慎重に自らの意見を述べた。

……俺は唸らざるをえない。　人外に囲まれ過ぎて居て当然だと思っていたが、超能力者なんて本当にこの世界に存在するか分からないのだ。

確かに彼女の言う事の方が、よほど現実的である。　丸呑み男とドリル女と幽霊幼女が集まってする話でなければ、もっと。

とにかく、それなら半年かかるという話にも納得できる。

二人で一緒に考え込んでいると、はっとミーヤが何かに気づき顔を上げた。

「アッ、デモ、後はダイスケが気にする事じゃない」

「え、何で？」

「アブナいから。　ダイスケは今日の事を忘れて」

「流石に今更過ぎない？」

「今更もナニもナイ」

ジト目でつっこむと、ミーヤが上目遣いで俺を睨み返す。

て言うか今気づいたんでしょうお嬢さん。

しかし、ミーヤに言われ俺もふと考える。　確かにここが引き際ではないだろうか。

彼女には俺が化け物ではないと印象付けられたし、俺が一緒にいても出来る事はない。

第一あのアホの姉を、俺が命を張って守ってやる義理は無い。

俺が化け物でアイツは人間って意味では、義理の姉弟ではあるが。

しかも、アイツは占い師って言う、俺の天敵とも言える存在なのかもしれない訳で。

ぶつぶつと頭に並び立ててから、俺はそれをドーンと崩した。

「綾菜には、借りがあるんだ。一個や二個じゃなく、長い事生きてきて貯まってきた負債っていうか」

先程までの自分に聞かせるようにして、俺は口を開く。

ミーヤは俺が真剣な顔をした為、背筋を伸ばし手元のチーズバーガーを置く。

……これからするのは、そんなに大層な話じゃない。それを示すため俺は彼女に笑いかけながら軽い調子で話し始めた。

「俺、昔は凄く無口だったんだ」

「『『ウソ』』」

早速フランクな反応を返してくれる、ミーヤ、そして双子。

「ハモんな」

「鱧？」

「いや、魚でなくて」

中空で何故か顔をしかめている双子を睨み返してから、俺は話を続けた。

「まぁ、こう人付き合いが怖いって悩みがあったんだけど」

自分の口が破れると知った当時……きっかけは思い出せないのだが、まぁ小学校の中学年ぐらいだったか。

俺がその秘密を守る手段として選んだのが、ひたすら黙ることだった。選んだというか、それしか思いつかなかったと言うほうが正しい。

人に話しかけられても無視し、どんなグループにも混ざらない。

更に頬を隠す為に女顔が髪まで伸ばしていたので、俺は格好のいじめの的だった。

「そんな俺を、綾菜は庇ってくれた。そんで言った訳さ。喋って友達を作ろうって」

それが出来たら苦労なんてしない。彼女の提案を初めは断った

俺だったが、心の内では普通の人間のような生活を、望んでいた。
だから、強引に俺を連れまわす綾菜にもついていくことにしたのだ。
「で、それから綾菜の特訓が始まったわけ。漫才の練習したり、知らない女の子ナンパさせられたりもしたな」
「それで、喋るノは上手くなれたノ？」
自分はあまり喋りが達者でない様子で、ミーヤが俺に尋ねる。
「まぁ、効果はあったんじゃないかな？　今こうやって君と楽しくお話できてる訳だし」
少し考え、俺はそう答えた。根本的な部分での人間恐怖症は直らないが、口をずっとへの字に結び、周りを睨むように見据えていた頃と比べればずっと良い。
「楽しくなんてナイ」
「そりゃ残念だ」
こうやって凹むような返しをされても、表面上は軽く受け流せるようになったし。
「でも今までは、ダイスケが犯人だと思ってツメタクし過ぎてた。ゴメン」
「え、あ、いや、別にいいよ？　ていうか何急に」
「……ダイスケが寂しそうな顔したカラ」
……流したと思ったのに、ばっちり表情に出ていたらしい。俺の面の皮は何時になったら俺の命令に従うのだろう。
気まずくなって、俺はコホンとひとつ咳をした。
「ともかく、そんな訳で俺は綾菜に感謝してるんだ。あいつが危ないっていうなら、放ってはおけない」
この言葉は誤魔化しではない。それが伝わるようにじっと彼女を見る。
俺が根負けし、ミーヤのおでこに接吻でもしようとした所で、彼女がため息をはいた。
「ワカッタ。　でもアブなくなったら逃げること」

仕方なく、といった感じではあるが彼女は俺が関わる事を認めてくれたようだ。
俺は嬉しさのあまり彼女の口にチューしそうになったが、寸前で我慢する。
「あぁ、ミーヤの邪魔にもなるしな」
代わりにそう答えると、ミーヤはウンと大きく頷いた。
相変わらず歯に絹も木綿も着せぬお嬢さんだ。　精々邪魔にならないように、地味に恩返しするとしよう……。
静かにそう決意して、俺はミーヤと共に店を出た。
組織は活動資金も出し渋っているという事なので、会計は各自持ち。
外に出ると、街灯に髪が照らされ淡く光を放つミーヤが、反則的に可愛く、しかも小さいことに気がつく。
「とにかく今日は、俺が綾菜見ておくから」
そう告げるが、ミーヤはやはり不安そうな顔をしていた。
俺の正体を知らない彼女には、そんなセリフじゃ何の心強さも補充されないだろう。
もっとも、正体を明かせば化け物でもあるし、更にもっと赤裸々にしてしまえば冷蔵庫ぐらいしか食えない役立たずだ。
……我ながらミーヤを安心させる要素がまるで無い。
ならば、彼女を安心させるにはどうするか。　現代っ子らしい手段を一つ思いつき、俺は唸りだしそうなミーヤに言葉を重ねた。
「あ、そうだ。ケータイのアドレス教えて」
定時で連絡を取る事ができれば、彼女の不安も多少払拭されるだろう。
ケータイ依存症の子供達が云々と騒がれる世の中だが、やっぱり繋がってるという安心感は素晴らしいものだ。
できれば体も繋がりたいものなのだがと、俺は若者らしい軽薄さで考える。
ところが。

「ケータイ？」
ミーヤが首を傾げる。　先程の不安さと相まって、頭が肩につく勢いだ。
「携帯していらっしゃらない？」
「ケータイ……」
えーと、この子は何を悩んでいるんだろう。　まさかと思い言い方を変えてみる。
「携帯電話」
「オゥ」
すると、ミーヤは実にグローバルなリアクションをした。
凄いや、この子マジでケータイの意味が分からなかったんだ。
日本来て半年だよな？　ＣＭでよく聞くよな？　日常会話でも使うよな？
……もしかして俺が油断してるうちに、このケータイという言葉はギャルの間でナウくない言葉になっているのだろうか。
俺がそんな不安に駆られていると、ミーヤが鞄から取り出した携帯電話を手に固まっている。
「どした？」
「……説明書が無いから、また今度」
「貸しなさい。　お兄さんがやってあげるから」
要するに操作が分からないらしい。　機械もダメなのかよ狩人。
しばし躊躇った後（しかも本当にできるの？みたいな表情浮かべやがった）、ミーヤは携帯電話をこちらに渡した。
例の協会の物という事で少し緊張したが、外見は一般に販売されている機種に見える。
銃になったり変身デバイスになったりはしなさそうだ。　表面の控えめなデコレーションは、鹿子の手によるものだろうか。
開き方を教えようとするミーヤを制し、そいつを開いてみせると、双子が俺の両肩に顎を乗せるポーズで現れた。
『協会への連絡先は？』

『意外な人間関係があるかも』
人のケータイ漁るってのも下世話な話だ。
だが、この双子は肉体を脱ぎ捨てても、そういう汚い心は捨てられなかったらしく、ワクワクした様子で俺を急かす。
いや、俺だって興味が無いといえば嘘ん子祭りだけど――。

登録件数：一件　有馬鹿子

パタン。思わず一旦閉じた。
もう一度開いてよく見ると、待ち受けも鹿子とのツーショット。
すげぇ馬鹿子独占率だ、このメカ。　何だろう涙が止まらない。
「デキナイ？」
「いや……」
手早く俺のアドレスを登録。　で、俺んところに『抱いて！』って件名でメール送ってこっちも登録完了。
女一色だった百合の園に進入したと考えれば、ちょっとエロい行為かもしんない。
綾菜も登録ぐらいしてやれば良いのに。
三秒ごとにメールが来そうなんで、俺も三橋にアドレス教えてないけど。
「ほいよ、これで俺と君はぶっすり繋がったわけさ」
「アリガトウ…」
俺の日本人的暗喩にも気づかず、ミーヤは普段と比べれば格段に素直に礼を言った。
どうしよう、罪悪感チクチク。
「寂しい夜は電話してきなさい。半裸で行くから」
「クルナ！」
よし、罵ってもらえた。　これでＯＫだ。　何がかは自分でも分からない。
「んじゃ、また明日」

「あ、あの」
別れの挨拶をすると、ミーヤが俺を呼び止める。
「ん？」
「センパイを、守って」
何かと思えば、ミーヤはケータイを胸に抱き、懇願するような口調で言った。
あの勇ましい狩人と同じ娘だとは思えない可憐な姿に、思わず首を縦に振りたくなる。
「任せて。　とは言い難いけど、そのつもりだよ」
だが、流石に安請け合いはできない。　この体は、いつでも俺の心を裏切るのだ。
「それと……ダイスケも、気をつけて」
そんな俺に、ボソッと、ミーヤはそう付け足した。
彼女が愛想でそんな事を言う娘ではないとは、今日の会話だけでよく分かっている。
逸らした横顔がうっすら紅潮しているように見えるのは、流石に俺の欲目か。
まぁその顔を見ているだけでも、抱きしめたい衝動が限界ギリギリなんだけど。
「ミーヤこそ気をつけて」
言い返すと、彼女は大丈夫と力強く頷いた。
本当にミーヤは分かっているのだろうか。
「化け物は、すぐ近くに潜んでるかもしれないんだぜ」
具体的には君の目の前とかに。
俺の内心も知らず、再度コクンと首を縦に振るミーヤ。
頭撫でるぐらいは良いんじゃなかろか。　そう思って伸びかけた手をヒラヒラと振ることで、俺は無意識の行動を誤魔化した。
「それじゃ」
こう何度も別れの挨拶を繰り返してると、自分がバカップルにでもなった気がする。

今日はこの美しい幻想だけで我慢しておくしよう。　俺は彼女に背を向け歩き出した。

ミーヤが応じて手を振りかけて、慌てて背中を向ける仕草を確認しながら。

今日の何が収穫って、彼女の可愛らしい姿を大量に見られた所かもしれない。　他にも色々ショッキングなシーンを見せられはしたが。

『化け物はすぐ近くに、ね』

『誑し込めたほうじゃない？』

店を出てから黙っていた双子が、いきなりに人聞きの悪いことを言う。　もうちょっと、甘い思い出に浸らせてくれはしないのだろうか。

嫉妬しているというのなら可愛げがあるのだが、そういう事ではないようだし。

せっかくの気分が台無しだ。　俺が無視して歩いていると、双子の声が先程より後ろから響いた。

『分かったわ』

『貴方が姉にそっくりな理由』

振り返ると、俺の影が街灯に照らされ長く伸びており、その先に双子が立っている。

彼女達の影は、無い。　いや、そもそも影が無いと輪郭や凹凸なんてほとんど見分けられないのだから、うっすらと影はついているはずなのだ。

しかし逆光に当たってもその顔は翳ることなく、相似形のニヤけ笑いが浮かんでいる。

「あ？　理由ってそりゃ双子だし……」

『二卵性なのに？』

『そもそも同じタネからできたかも定かじゃないのに？』

……割と下品だよなこいつら。　言ったのは後に喋ったほうだが、どうせシモネタに関しても、こいつらはシンクロしてるんだろう。

「何が言いたい？」
『貴方が姉にそっくりなのは』
『貴方がそう願ったからよ』
「はぁ？」
またトンデモ理論だ　思わず、周囲の人も忘れ思わずガラの悪い声をだしてしまう。
だが、同時に何か聞き覚えのある話だとも感じた。
『忘れてない？』
『その面の皮は、偽者だって』
双子が同時に、意地悪げに右の口の端を上げた。
俺はぺたりと手を頬に添える。
『言ったでしょ？』
『私達は、望んだように変わっていくのよ』
例えば双子のこの姿。　例えば無茶苦茶な脱皮をし、人を食べて成長する蛇。
まさか、俺が綾菜に似ているのは目の前の双子のように、双子であるからではなく。
――綾菜を模した、化け物だからなのか。
心臓がバクバクと鳴っている。　口は否定したがっているのだが、俺の胸はそれが真実なのだと訴えていた。
『まぁ、胸まで似なくて良かったわね』
『身長はもう少し高くできたかもしれないけれど』
双子のからかいも半分しか耳に入らない。　とにかく綾菜の顔が見たい。
俺は逃げるようにして、自宅へと早足で向かった。

もしくはパンドン

息を整え、自宅の玄関を開ける。
靴を脱いでただいまと声を出すが、居間の電気はついているのに返事が返ってこない。
慌てて居間に飛び込むと、フローリングの床で綾菜が横たわっていた。
……大きないびきを掻きながら。
脱力しながら、俺は双子の姉の顔を覗き込む。
「似てるかぁ？　こんなアホ丸出しのが」
口も開いてるし、何の悩みも無さそうな面してやがる。
まったく、慌てて損した。
『そっくりじゃない』
『特に今』
双子が口々に言うが、流石にここまでは緩みきってないと思いたい。
……口の端から涎まで出てるし。
「オラ、起きろこんにゃろ」
足でも良かったのだが、俺は一応しゃがみ込み、頬を手で叩いて起こしてやる。
「も、もうひゃくまんえん……うにゃうにゃ」
ダメだ、こいつ札束で頬張られている夢見てる。　しかも悦んでいる。
続いて頬を引っ張ってみる。
バリッ。　……とはいわないな、当たり前だ。　ていうか超伸びる。　実はゴム人間じゃないのか？
手を離すとパチン、とは鳴らなかったがぷるん、と震えた。
で、目のほうが、そういう玩具かのようにパチンと開く。
「あ、おかえり大輔」

起きていたのかと思うほどに、綾菜ははっきりと俺を見る。
その視線に、思わず背後を気にしてしまうが、綾菜に双子が見えている様子は無い。
「ううん、強大な権力に必死で抗う夢を見た」
「その割には、緩みきった寝顔だったぞ」
ていうか絶対屈してた。
「ん～、背中痛い」
「こんな所で寝るからだろ」
伸びをする綾菜に、俺は呆れ顔で言ってやる。
なして居間の、しかもフローリングの上で寝るかこいつは。
……もしかして、俺を待っていたのか？
「ダメだ、眠い」
などと思っていたが、綾菜はバッチリ目覚めていた瞳が一転、ふにゃりと締りの無い半眼になった。
「だいすけー、だっこー」
「やだよ重い」
綾菜が幼女のような声をあげ、両手を伸ばしてくるが、俺は立ち上がって拒否した。
何が悲しくて、実姉をお姫様抱っこせにゃならんのだ。
「じゃぁせめて手ぇ貸してー」
なおも伸ばされる手。
……ミーヤの話が本当なら、こいつは色んな化け物を告発し、殺させてきた占い師、ということになる。
言うなれば、俺の天敵だ。
それでも、俺は綾菜の手を取った。
「よっ……と」
「あんがと」
引っ張りあげると、本気で眠いらしく、綾菜が足を頼りなくふらつかせた。
「お前がこうやってデブになってくれれば、見分けもつくから俺も

ありがたいな」
肩を抑えて支えてやりながら、照れ隠しにそう茶化してやる。
「バストとヒップが大きくなったんですー」
それに対して、綾菜は恥ずかしげも無く堂々と大胆な嘘をついた。
大きくなっているのは胸と尻ではなく、その肝っ玉じゃなかろうか。
「はいはい」
色々悩んでいたのがバカらしくなってくる。俺は背中を向け、部屋に戻ろうとした。
「ていうか重くなんてなってないぞこのやろー」
が、その背中にいきなり衝撃が走った。物理的な意味で。
俺の背中に、綾菜が突然寄りかかった所為である。
「ね？」
耳の裏に息が吹きかけられ、体が縮み上がる。
俺が縮まされてどうする。コイツより小さくなるなんて絶対にゴメンだ。
振りほどこうと思ったが、先に綾菜の腕が俺の首に巻きついていた。
「軽さを、アピールするなら、もうちょっと、自分で立つ努力を……」
俺は綾菜をひきずりながら、階段前まで這うように歩く。体を押し付けられている状態なので、普通ならふくらみやらを堪能できるシチュエーションなのだが、コイツの場合はそれがあまり無い。
しかし、男の俺と比べれば、やっぱり柔らかいもんなんだよな。
もちろんいやらしい意味ではなく、男女の性差を確認しただけだ。
と、後ろで何やらもぞもぞと動く気配がする。
俺はそれを察知すると、両手を下げ、腰を屈めた。
「よいしょっ」
予想通り、綾菜がおぶさってきた。
巻きつけられた足を、手でホールドする。

「お前なぁ……」
「あのまま上がるとあぶないじゃん？」
「ソロでやってくって選択肢は無いのかよ」
文句言いながらも、階段を登っていく俺。
「大輔、今の私達、まるで……」
「あぁ？」
「エティンみたいだね」
「……何それ」
「双頭の怪物」
「もうちょっとこう、ロマンチックな例えは無いのか？」
「幻獣だよ？　正確には人怪だっけ？」
「そういうことじゃなくて……」
大体、怪物――化け物なのは片一方のほうだ。
もう一方はそれを燻りだす役目。　一塊の生物じゃまずいだろう。
俺がそんなふうに考えていると。
「特徴的な女の子の匂いがする」
綾菜が急に、そんな事を言い出した。
「に、匂いがうつる様な事は出来てないぞ！」
もとい、していない。　一緒に食ったハンバーガーの匂いなら漂ってるかもしれないが、どうやっても女の子の匂いとは……って。
「あぁ、本当に女の子と会ってたんだ」
本当に意外そうに、綾菜が声をあげた。
「カマかけかよ！」
振り向きたかったが、バランスを崩しそうなので思いとどまる。
つうか、階段を踏み外しそうになったわ。　一蓮托生ってのを忘れてないか、こいつ？
綾菜は、見なくても分かる、多分ニヤけ顔でふぅ～んと何かを察した声を上げ。
「大輔もそうやって大人になっちゃうんだねぇ」
と、セクハラ紛いの事を言った。

「だから、それはお前の勘違いで……」
弁明しようとする俺。　しかしその後ろで、綾菜がふぅと短く息を吐いた。
それがうなじをくすぐり、またしてもバランスを崩しかける。
俺は、弁明を抗議に切り替えようとした。　すると――。
「ま、私達も、いつまでも一緒ではいられないからね」
綾菜は、あっさりと、しかしどこか寂しげかつ口調でそう言った。
そこに含まれたのはそのどれか一つか、あるいはどれでもない物だったかもしれない。
今度は、彼女がどんな顔でそれを言ったのか、分からなかった。
足場は不安定だ。　この姿勢のまま、後ろは振り向けない。　平素でも、振り向けたかどうか分からないが。
「ここでいいよ」
階段を上がりきったところで、綾菜がそう言った。
「添い寝まで要求されなくて、安心した」
ゆっくりと太腿に回していた手を離すと、、綾菜が足をふらつかせてから、壁に手をつけるようにして地面に降り立つ。
「何時までも私の乳に頼ってないで自立しなさい、大輔」
俺が手を貸そうとしたのを見て取って、綾菜がわざと無い胸を張っておどけた。
「さっきまで自分の足で立ってなかった奴が、何を言うか」
言い返しながらも、俺の薄い胸にはその言葉が刺さる。
俺は、こいつの真似をしてこの顔、そして今の立ち振る舞いを身につけたのだ。　自立は、確かに未だにしていないのかもしれない。
「それじゃ」
俺の言葉に微笑んで、綾菜は部屋に戻った。
あいつが疲れた様子なのは、雅の言っていた深夜の調査が原因なのかもしれない。
双子が黙ったままなのも少し気になったが、短い一蓮托生を終えた俺も部屋に戻った。

腑分け

それから風呂に入って、ハンバーガーの匂いのする歯を磨いて、布団を被って五分。

俺は起き上がると、テレビをつけ、即座に音声を消した。昔、テレビでエロい番組を見る為に行った手順なので、実にスムーズである。

『何してるの？』

『ムラムラでもしてきた？』

表情まで中学生当時に戻っていたとでもいうのだろうか。双子が両の肩に顎を乗せる形に現れ、俺に囁きかける。

つうかパソコンのない中学生のエロ事情に、何でこいつらが精通しているんだろう。

「……ちょっと今日の出来事がフラッシュバックして」

ミーヤとの逢瀬で薄れていたあの、蛇と蔦が絡み合う光景が、今になって蘇ってくる。

ついでに破裂する蛇、常識外の動きをするミーヤもだ。

俺はゲーム機の電源も入れ、コントローラーを握った。

入っていたのは格闘ゲームだ。綾菜と対戦してボコボコになった記憶が真新しい。

「俺はゲーム脳になりたい」

俺の操るキャラクターが、ＣＰＵの超必殺にやられて破裂した。

しかし、次のラウンドでは何事もなかったかのように起き上がり、また戦っている。その姿は、まるであの蛇だ。

「現実とか投げ捨てて、妄想で生きれば良いんだ」

自分に言い聞かせるように、俺は呟いた。蛇は、そんな風に生きているんだろうか。

そんな奴が、人間に紛れて暮らしていけるのか？　俺は、そんな風になれるか？

「ま、無理だわ、そりゃ」
俺はすぐ飽きて、ゲームの電源を切った。　こう思っているうちは無理だろう。
「せめて死なない範囲が分かればな」
『範囲も何も』
『決めるのは貴方よ』
「それが出来ないから、困ってるんだろ」
例えばＲＰＧでも、中盤辺りで世界が広がりどこへ行っても良いとなると、ひどく困る。
頼るべき指針、普通の人間ならここでどうするかが分からないと、不安なのだ。
双子は俺が綾菜に憧れて、この顔になったと言っていた。
まぁ、間違ってはいないのだろうが、俺が真似ているのは綾菜だけではない。
俺はきっと人間の模範的な行動、ニュートラルな考えを目指して生きてきたのだ。
奇行が目立つ時もあるかもしれないが、それはあくまで口を隠す為でであって……。
「俺は常識人なんだ。　いきなり完全無欠の化け物になれって言われても困るっての」
『自分の体って言う現実は見えてないのに』
『そもそも人じゃないじゃない』
俺が愚痴ると、双子がピーチクパーチクと言い返す。
渋面になりながら俺がベッドに倒れこむと、スプリングがギィッと音を立てきしむ。
こいつらは、本当に人間という言葉に敏感だ。　逆にそうでもしないと、この非常識な体を保ってはいられないのだろうか。
……双子は多分、相当死に難いのだろう。　触れられないし、今のところ食事もしていないし。
自分が願ったからこそ、この姿になったのだと双子は言っていた。

それがどんな事情かは知らない。　だが自らの体を明確に化け物だと認識して、何にでもなれると信じ込んで、こうなったんだろう。信じて、それが叶う。　言葉の響きだけなら、素晴らしい事だと思う。

しかしだ。　本当に代償は無いのか？　タダほど高いものは無いというではないか。

例えば猿の手。　本人の願いを歪めて叶えてしまうという、意地の悪い話。

俺の考える事なんて、適当で、曖昧で、言語にすらなっていない事も多い。

実際、俺は自分の口が裂けて欲しいなんて、願った事は、ない。

俺が冗談か何かで言った事を、誰かが拡大解釈して、間違った風に実現させたのではないのだろうか。

誰が？　誰かが。

『そうね、一つ指標はあるわ』

『貴方、今まで大きな怪我をしたことは？』

長い思索に入りかけた俺を、双子の言葉が引き戻した。

俺は口の端に垂れていた涎を、枕で拭う。

「ええと……」

双子の問いかけに、俺は仰向けになって思い出そうとした。

怪我……思い返すが、大きな負傷に繋がるような事件、事故に遭った覚えが無い。

何かの拍子に顔の皮が破れる事を避ける為、喧嘩なんかも気を使って避けてきたし。

「あんまり無いな、そういうの」

寝転がった姿勢でそう答える俺。

それを見下ろす形で現れた双子が腰に手をあて、しょうがないわね、とでも言いたげなポーズを取る。

それから彼女達は重ねて尋ねてきた。

『それじゃ、小さいのでも良いわ』『出来れば最近で』
「最近だと……昨日、ミーヤに投げられてコンクリに叩きつけられた」
『何やってるの、貴方』
『投げられたって事は、どこか打ったでしょ？』
「背中ぶつけたけど……、そういや何で無事なのって皆に言われたな」
あまり痛くも無かった。アレは受身で消力が成功したからだと思っていたのだが。
『じゃぁそこは化け物』
違うのか。俺が、化け物だからなのか。
「その時手をすりむいた」
『じゃぁそこは人間』
そして、人間。俺にも人間な部分があるらしい。じっと手を見る。
『便宜上人間と変わらないって言っただけで』
『貴方は立派に化け物なんだからね』
だが、それを感慨深く思っていた俺に、双子がすぐに釘を刺す。
こいつらは、俺を一瞬でも喜ばせないという職業についていらっしゃるんでしょうか。どっから給料もらってるんだ？
「分ぁってるよ」
しぶしぶ俺がそう答えると、双子は満足そうに頷いた。
『よろしい』
『まぁ、手足は人間風味って事でいいんじゃない？』
それから、何のフォローだかそう付け加える。
俺だって、別に浮かれてた訳じゃない。手足が人間だろうと、頭と胴が化け物なら、そりゃ間違いなく化け物だ。
割合の問題ではない。体のほんの一部分でも、人にあり得ない器官が人のフリをしていれば、それは。
例えば、それが右腕の先だけだったとしても、それは……。

「ミーヤもきっと……」
彼女もきっと、自分が化け物であるという確信に近い不安を抱えているはずだ。
それを、自分を化け物を殺す正義の狩人と思い込むことで誤魔化している。
俺達は自分で作ったルールに縛られて、自分を追い詰めている。
「何にでもなれるってのに、難儀だな」
呟いて、俺はベッドに戻った。

脅迫　NTR編

翌日、俺は昨日の悩みが何だったのかと思うほど良く寝、朝起きたら双子の腹に右と左の頭がそれぞれ埋まっていた。

とんだ胎内回帰を果たした訳だが、その所為ですっかり寝過ごしてしまい。

「朝食当番すっぽかした罪でしめて九百九十八円」

「その千円切ったからお得みたいな金額はやめろ！」

などと、綾菜と並びながらさわやかなトークをしながら登校する羽目になってしまった。

昨日こいつが見せた、なんだかしおらしい態度もどこへやら、である。

そうやって並んで歩いていると、俺は前方を見知った少女が歩いているのを発見した。

俺は彼女のお尻と、運命的に結ばれているんじゃないかしら。

綾菜に止まるよう指示し、自らはしのび足でそのウェーブのかかった金髪に忍び寄る。　彼女の匂いが嗅げるほど近くに寄ったところで、俺は両手を広げ声を上げた。

「ミーヤァァァァ！」

そのまま抱きしめ――ようとした両手が空を抱く。

気がつけばミーヤは体勢を低くし、その左手の指はピンと伸ばされ、俺の喉元に突きつけられていた。

それは否応無しに、昨日のドリルを連想させる。

俺は冷や汗を流しながら、胸の前で交差した腕をまた広げ、降参のポーズを取った。

「さ、さすが狩うっ」

言いかけた喉を、ビスッっと、突きつけられた手刀で突かれる。

押されて、二歩、三歩、後退。

……本当だ。　あまり、痛くない。　自覚してみるとそれを強く

感じる。
　昨日双子に言われたように、確かに俺の喉は人間の物とは違うようだ。
　凹む。　が、今はそんなリアクション取るべき状況ではない。
　大丈夫、喉は人間じゃないが、面の皮だって人間じゃないんだ。
　う、うん……落ち込みスパイラルに落ち込む前に、演技を開始しよう。
「けほっ、けほ、けほけほ、うぉ、ぼぉうおっほ！」
　咳を開始。　うん、喉を突かれたら普通こうなるよな。
「だ、ダイスケ？　そんなに深くツいたつもりは……」
　ミーヤが困惑しながら小走りに寄ってくる。
　いい機会だから、大げさにやって反省させてやろうか、などと俺が考えていると。
　ビリッ。　口の端から、不吉な音が響く。
　やっべ、やりすぎた。　俺は急いで背後を向き、座り込んだ。
「ダ、ダイジョウブ？」
　ミーヤが回り込んで来、俺の顔を覗き込む。
　口を隠し、彼女の問いかけに必死で頷く俺。
「ココココエガ！？」
　やっべ、ミーヤが動転の極みに陥ってる。
　裏返った声で手をパタパタとふるミーヤに、彼女と同じぐらい慌てる俺。
　明らかにやりすぎている。　でも今口を開くわけにはいかない。
　口を隠した俺の背中を、ミーヤがさすってくれる。　膝小僧がまぶしい。
　直れ直れ、早く直れ。　俺が望んだようになるんだろう俺の口。
　……よし。　丁寧に丁寧に下と手で自らの口の状態を確認してから、俺はゆっくりと手をはずした。
　素早く立ち上がり、マフラーを口元まで引き上げる事は忘れなかったが。

「ブ、ブジ？」
「何とか。ちょっと変なツボに入っちゃってさ」
「むぅ……ゴメン」
うわ、あのミーヤが謝った！　しかも発端、原因、経緯含めて百パーセントこっちが悪いのに！
これが詐欺！　と思う前に心が痛い。
「いや、こっちこそごめん。　あと、ごめん。　本当にごめん」
謝り返す。　三倍返しで。　襲い掛かった事と、迂闊な発言した事と、嘘リアクションした事についてだ。
ミーヤは首を捻ったが、まぁ理解されても困る。
「えーと、とにかく、君の素性とあの蔦」
周りを見回し、聞き耳を経てている奴がいない事を確認すると、小声で告げる。
「バラバラドリルの事は秘密ね」
「そ、ソンナ名前ジャナイ！」
俺があの武器につけた名称を、ミーヤが勢いよく否定した。　ちなみにバラバラは薔薇薔薇ともかけてあるのだが、彼女はお気に召さないようだ。
「じゃぁ何て言うのさ」
「その、名前なんて、ナイ」
ミーヤにとって、この右腕は決して受け入れられるモノではないのだろう。　愛称などつける気分にならないのも分かる。
俺だって、この口に名前とか二つ名とかつけろと言われても困るし。
「んじゃ、暫定バラドリで」
「縮メルナ！」
略称までつけると、ミーヤが顔を薔薇のように紅潮させて抗議した。　うーん、バラエティアイドルみたいだしな。
「なんか仲良くない？　二人とも」
アホな事を考えていると、後ろから、綾菜がゆっくりと追いつい

てきた。
いや、タイミング的にしばらくこのやり取りを見届けていたのだろう。
一昨日も似たような事をしたが、奴が指摘している通り俺達の親密度が違う。
「おう、俺達愛し合ってるからな」
「ナァっ！？」
ミーヤが可愛い顔で驚いてくれた。
間違いました？　と顔で問いかけると、当たり前だ！　と思いっきり睨まれる。
どうやら動揺で頭から日本語が吹っ飛んでしまったようで。
うん、言葉よりこっちのほうが誤解なくコミュニケーション取れるかも。
しかし、これって使えるんじゃないか？　思いついて、俺はミーヤの肩を抱――こうとして跳ね除けられたので、ちょいちょいと合図をして後ろを向かせる。
「ちょっとハーフタイム」
綾菜が不審そうな顔をしたので、そちらを見てしばしの猶予を申請。
「よく分かんないけど分かった」
物分りの良い姉で助かる。
顔を寄せるとミーヤは嫌そうな顔をしたが、構わず囁く。
「……俺達、恋人同士って設定にしない？」
「ハァ！？」
ミーヤにこういう声を出させる事に関しては、俺は世界一かもしれない。　できれば、もっと色っぽい声担当になりたいのだけれど。
既にミーヤはアルファベットも忘れた様子で口をパクパクさせている。
「これからミーヤは綾菜を守っていく訳でしょ？　だったらより近くで見張れたほうがいいに決まってるよね」

しかし俺の言葉が続くうち、ミーヤの顔へと理性が舞い戻っていった。　そして、狩人の鋭い光が眼に宿る。
「俺と付き合ってるってことにしちゃえば、わざわざ約束しなくても教室に来れるし、俺ん家に来る理由だって出来ちゃうんだぜ」
だがすぐに、その顔に憂鬱なブルーが上塗りされた。
椎名雅。　千の顔を持つ少女である。
「デモ……」
「なんか反論ある？　生理的嫌悪以外で」
「キモチワルイ」
「それが生理的嫌悪ね。　はい決定」
ざっくり切られた心の傷を押し隠すように、俺は強引に話をまとめた。　くるりと振り返り、綾菜に笑顔で告げる。
「俺達、付き合うことになりました！」
「え、何、脅迫！？」
「ちょっと待て、何だその反応」
すると、なんかひどいリアクションを返された。　こいつまで……皆俺の事をなんだと思っているんだろう。
「大丈夫ミーヤ？」
言いながら綾菜は、俺を無視しミーヤの手を取った。
なして頬を染める、ミーヤ。
「弱みを握られたなら、私も大輔の秘密を教えるよ？　実はこいつ中学の時ビデオ……」
「やめろやめろやめろ！」
続けて綾菜が喋ろうとしたことに気づき、俺は慌てて奴の口を塞いだ。
それは例え俺がミーヤの盗撮写真を持ち、彼女の片パイぐらいを揉んでいたとしても等価交換は出来ない恥部だ。
押さえた掌の下でなおも口が動く気配がするので、俺は慌ててミーヤに呼びかけた。
「ほ、本当だよねミーヤ！」

「アゥ、ア……」
俺が必死な視線を送ると、ミーヤが押されたように何度もコクコクと首を縦に振る。
それを見、綾菜の動きがようやく収まっていった。
「本当、なの？」
手を離してやると、恐る恐るといった調子で綾菜はミーヤに問いかける。　何故そこまで疑うのか。
「本当だよね、ミーヤ」
ここぞとばかりに、俺はミーヤ側に回り込んで肩を組む。
ミーヤは俺をキッと睨んだが、事情を思い出し渋々――。
「ハイ……」
と頷いて唇を噛み締めた。　なんだろう、背中を未体験の感触が駆け上がる。
さっきミーヤに嘘をついた時は確かに痛んだはずのこの胸が、今確かに弾んでいた。
『やっぱり脅迫じゃない』
『気持ち悪い顔してるわよ』
ええい、人聞きの悪いことを言うな。　そんな意思を込めて中空の双子を睨む。
ミーヤには後でご褒美に、この綾菜の唾液で湿った右手を舐めさせてあげよう。
「そっかぁ、そういう不可思議な事もあるんだね」
ついに、綾菜は納得したようでミーヤの手を離して呟いた。
「あ……」
抗弁しようとしたのか、あるいは名残惜しかったのか。　ミーヤは空気をつかむように何度か指を動かした後、結局何も言わずに俯いた。
なんか友達以上恋人未満の二人を引き裂いてしまったようで、それには少し心が痛む。
でも同時に、暗い愉悦なんかも感じちゃったりなんだり。　俺に

も、嗜虐モードとか陵辱モードなんてあったんだなぁ。
……いや、大丈夫。男の子には誰にでもついてるスイッチだ。
決して、俺が化け物だからじゃない。大丈夫だいじょうぶだいじょーぶ。
『何を落ち込んでるの？』
『いつもの下卑た顔に戻りなさい』
自分に言い聞かせていると、双子が呆れた表情で言葉を投げかけてくる。
……最近どうも不安定でいけない。これが恋の痛みというやつだろうか。
「とにかく、まずは学校行こうか」
しばらくは紳士でいよう。そう心に決めて二人を促す。
それに応じて、ミーヤと綾菜も再び歩き出した。
「ミーヤは大輔の、どこが気に入ったの？」
歩き始めて、いきなりこの質問。
女ってこういう質問好きだよなーというのほほんという感想より、あれ、コイツやっぱ俺がモテる要素なんて皆無だと思ってるんじゃね？　という疑念のほうが浮かぶ。
「ハンサムな顔立ちだよね、ミーヤ」
「それなら私でも良いじゃん」
俺が出来るだけハンサムにミーヤへと微笑みかけると、綾菜がミーヤを挟んだ反対側から即座に反論する。
つうか実際お前のほうが良いんだ。　とは言えず俺はミーヤの答えを待つ。
挟まれたミーヤは、左右と俺達の顔を見比べ、顔を伏せ唸り声を上げた。
うわぁ、すっげぇ悩んでる。
そして彼女は、二十歩ぐらい歩いた後、ぱっと顔を上げ言った。
「ありのままの私を、認めてくれるところ、カナ？」
「カナじゃないよ、可愛いな」

小首を傾げるところとか超あざとい。　超可愛い。
「ミーヤは可愛いなー！」
あ、先に抱きつかれた。　綾菜に飛びつかれ目を白黒させるミーヤを、苦笑しながら俺は見つめる。
誤解されているが、というか、俺が意図的に騙してるんだけれど――。
俺は別に、彼女のありのままなんて認めちゃいない。
ちょっと変な腕を持っているけれど、所謂普通の女の子。　その評価は、彼女自身が抱えている理想の椎名雅の姿だ。
悪いがそんな風には、俺は思えない。　そう考えるには、俺が俺自身を、ちょっと口が広がるだけの、普通の人間の男の子だなんて思い込めないとならないからだ。
俺にはそんな事、不可能だ。　自分を無敵の化け物だと思い込むのと、同じぐらい。
そんな中途半端な存在のまま、自分が化け物だという自覚は嫌というほど持っている。
「どしたの？　大輔」
俺はミーヤをどんな表情で見ていたのだろう。
不思議そうに、綾菜が問いかけた。
「いや、似てるなぁって」
きっとミーヤも、それが自分のありのままだなんて、心の底では思ってはいない。
彼女は知っている。　自分が化け物である事を明確に分かっている。　何故なら俺達が、未だに厳然として化け物だからだ。
双子の言では、化け物は自分が思っているように進化するという。だったらきっと、自分が普通の人間だと思い込んでいれば、それが彼女のありのままになるはずである。
しかし逆に、自分が化け物だという自覚が芽生えてしまえば、もう抜け出せない。
化け物でありたくない。　人間になりたいと、そう願えば願うほ

ど、きっと自分が化け物であると自覚してしまう。
俺達は、化け物である事からは抜け出せない。
「似てる？　アタシは大輔よりテクニシャンだよ」
言いながら、綾菜がミーヤの豊満な胸をひと揉みした。
「ンッ」
ミーヤの甘い声が、朝の爽やかな空気を染めた。　恋人の前で彼女を喘がせるとは良い度胸である。だが綾菜の寝取りは、そこで終わった訳ではなかった。

時間は進んで昼休み。
「お邪魔しまーす」
能天気な声が教室内に響いた。
見ると廊下側の扉から、ちんまい女子が二名進入してきていた。
「あーん、来てくれたのねマイハズー！」
「ウルサイ」
むちゅーっと唇を伸ばした俺の顔を、ミーヤは無慈悲に押さえつけ、教室の奥へと歩いていく。
後ろから歩いてきたもう一人のちんまいの。　有馬鹿子が俺を哀れむような視線で見た。
「早速ふられたんですか？」
「まだ付き合ってもねーよ」
頬杖をつき目を逸らす俺の横で、ズズ　ズと椅子を動かす音がする。
「あれ、今日ミーヤの様子がおかしかったんで問い詰めたら、先輩と付き合ってるかもしくは脅されてるって結論が出たんですが」
「普通なんねーだろその二択！」
「いえ、本人は付き合う事になったと言っていたんですが、どう考えても脅迫されているだろうと私は」
「だからお前ら俺の事なんだと思ってる訳！？」
綾菜といいこいつといい、世間からの俺への認識はどうも良くない方向へと固まっていっているようだ。
俺が抗議の為に顔を前に戻すと、鹿子は俺の隣にあった後藤の机を移動して、俺の正面にくっつけていた。
「そして何やってる訳？」
「目の前にかわいそーな先輩がいるので、私がミーヤの代理をしてあげようかと」

「ありがたいありがたい、すげーありがたい」
「報酬はお弁当の五割。　白米は含めずの方向で」
「俺の昼食が真っ白になるじゃねーか！」
バカな事を話している間に、教室の奥まで移動したミーヤは今の鹿子と同じように、綾菜の机に空席になった隣の奴の机をくっつけ向かい合って座っている。
今朝、ミーヤの胸を一揉みした後に、綾菜は彼女に昼食の約束を取り付けていた。
そういうことは、恋人である俺の承諾を取ってから行っていただかないと困る。
偽だけど。　綾菜と向かい合ってるミーヤは凄く嬉しそうな顔をしてるけど。
「で、食べないんですか先輩？」
俺の煤けた背中をいたわる様子も見せず、鹿子は自らの昼食である、購買のパンを広げている。
ため息をついて、俺も自らの弁当を出した。
ふたを開けると冷凍食品のから揚げに冷凍食品の炒飯が入っている。
「侘しいですね」
「昨日の残りだ。　どっかのアホが間違えて二食分解凍しやがったから」
ジト目で背後を見ると、何を勘違いしたのかそのアホは手で弁当箱を隠す。
いらねぇってんだよ。
「先輩の家、今ご両親がいないんでしたっけ。　ミーヤも料理はできないから手作り弁当ってのも期待できないですしねぇ」
「あ、やっぱできないんだ」
後ろを向いたまま、視線をミーヤに移す。　彼女の方も昼食は購買のパンのようだ。
「ミーヤは手先は器用なんですけど、こう、せっかちなのと字が読

めないって所に妥協もできない真面目さってのが加わって残念な事に」

……俺としてはイメージ的に何となくできなそう、と思っていた程度だったが、理由を改めて聞くと想像以上に可愛そうな事になっていた。

後、昨日の振る舞いを見るに相当ドジッ娘だしね、あの子。

「うーん、結婚生活にはちょっと不安が残るなぁ……」

なんて慈愛の目で見ていると、その視線に気づいたミーヤがこちらをジロリと睨み、彼女も手元のパンを隠した。

だから違うって。　なんか変なキャライメージ固まってるなぁ俺ったら。

あんまり見つめているといろんな意味で惨めになってくるので、顔を正面に向け直す。

鹿子は俺の有様を見てクスクスと笑った後、取り出したきなこパンをひとかじりした。

そういう菓子パンの類って、いの一番に食べるもんじゃない気がするが……。

「……先輩って、ミーヤのどこを好きになったんですか？」

自らの偏食をなんとも思っていない様子で、鹿子は唐突にそんな事を言い出した。

今朝、綾菜がミーヤにした質問と同じだ。

問いかけられ、俺は妙に考え込んでしまう。

「うーん、あの綺麗な金髪とか、俺よりちっちゃいところとか、おっぱいとか、俺を睨む時の目とか」

「全部見た目じゃないですか」

まるでピラニアのよう。　俺の挙げた理由に鹿子が即座につっこむ。

つったってなぁ。　中身だって色々好きな所はあるよ？

笑顔が可愛いとか、ひたむきなところとか。

理性的な部分は、彼女を守って上げなきゃ、支えてやらなきゃ。

なんて思っている。
だが心の奥底。　芯の部分、俺の本性、化け物としての部分が叫んでいる。　彼女をいじめて、いじめて、いじめてやりたいと。
化け物でありながら化け物を唾棄し、殺す彼女。
椎名雅に全てをぶちまけ、彼女を罵り、絶望させ、憎しみを向けられたい。　と。
とんだサドでマゾだが、それが理不尽だと思う気持ちもあり、俺はその薄暗い感情達を心……皮の内に閉じ込めながらミーヤに接している。
だが、その辺りの理由を鹿子に言う訳にはいかない。
「あーあー、ほら、肉体と精神は絶妙なシンクロ状態であって、精神性だけを重視する現代社会の風潮は間違ってると思うんだ」
という訳で、俺は急遽適当な話をして煙に巻くことにした。
「ほほー、なんか大きいテーマ掲げちゃいましたね。　それでそれで？」
鹿子のほうにも俺が誤魔化そうとしているのはバレバレなようだが、どう着地するのかを愉しんでいるのか話に乗ってきている。
「健全な精神は健全な肉体に宿るし肌の白さは七難隠すわけよ。外見の綺麗さってのは、ソイツが努力した証拠にも……一応はなりえるわけだし」
しかしこのままでは、話が上手くまとまらなかったりつまらなかった場合は、キツいダメ出しをされた上先程の会話の内容を蒸し返される事間違いなしだ。
舌を動かしながら、俺の内心は激しく動揺していた。
「……大体、中身中身言うけどそれって重要か？　せっかく一生懸命外見を取り繕ってるんだから、そっちが本体で良いじゃん」
そのせいで、喋っている内容がまったくもってよく分からない事になってくる。
自分が何を話しているのかもよく分からない。
「中身が多少問題あったって、それを外側に出さなきゃ一生良い人

で終わる、だろ？」
だろ？　と問いかけつつ、何が？　と返されれば多分俺には何も説明できない。
何しろ今自分が何を話したのか、自分自身ですら分かっていないのだ。
「ま、それはそうですね」
なので、鹿子がそれに対して深い息を吐きながら、頷いたのには驚いた。
「何が？」
「はぁ！？」
驚きすぎて問いかけると、鹿子は机に手をつき裏返った声を出しながら立ち上がった。
しまった、つい本音が。
「あ、いや、まさか同意していただけるとは思わなかったので」
俺が慌ててフォローすると、納得がいかない顔をしつつ、鹿子は椅子に腰を下ろし直した。
「……まぁ、人間皮一つ剥けば、何が出て来るか分かりませんからね。　そのままにしておくのが一番ですよ」
それから、体がビクリと震えるような事を言った。　皮一つ剥くととんでもない物が出てくる身としては、心の底から同意せざるを得ない発言だ。
偶然か？　いや、そもそも俺がそんな類の話をしたんだっけか。
そうだ、和気藹々と一緒に弁当を食ってるけど、こいつも犯人候補、なのだった。
「……お前の中身も凄いのか？」
かまかけ、というより誤魔化しの気持ちで鹿子に問いかける。
「えぇ、そりゃもうキュートでセクシーでバインバインです」
すると奴は、先ほどまでの疑惑がどうやっても杞憂だったとしか思えないほどのアホな嘘を、堂々とついた。
「そりゃ凄い。外側からはまったく想像できないのが特に凄い」

適当に褒め称えて、気の無い拍手をする。
それをむむぅと睨んで、鹿子は一緒に買ってきた紙パックのジュース（イチゴオレ）を口に含み、俺に問い返した。
「先輩こそ、外見からしてペラッペラですけど、中身ちゃんと入ってるんですか？」
対して俺はにやりと笑い、答える。
「入ってるとも。　そりゃぁ凄いのがな」
凄みを利かせたつもりだったが、鹿子は呆れた顔でへぇーとバカにした声を出すのみだった。

それから少し後、俺は弁当を摘まみつつ廊下を歩いていた。
『行儀以前の問題ね』
『それも変人アピール？』
先程まで黙っていた双子が、俺の左右に現れ交互に喋る。
「栄養補強に、腹ごなしも出来て一石二鳥だろ？」
素で受け答えしてしまい、周りで何人かこちらを見た気もする。
俺のほっぺに米粒でもついてるせいかもしれないが。
先程まで俺は鹿子と一緒に昼食を摂っていたのだが、その内背後で許しがたい行為が行われ始めた。
なんと綾菜の奴、ミーヤに冷凍食品をアーンさせはじめやがったのだ。
彼氏の前で何たる暴挙。　羨ましい。　俺もしたい。　と現場に急行。
ところが、俺があーんとおかずを差し出しても彼女は一向に食べようとしない。
しかし綾菜に差し出されれば頬を紅潮させながら食べるではないか。　耐え切れず、教室を飛び出して来たという訳だ。
綾菜め。　あの買ったは良いが恥ずかしくて着られなくなりタンスの奥にしまいこんでいるピンクのふわふわスカートを、今度無断で売り捌いてやろうかしら。
などと考えながら歩いていると、廊下の窓側に見知った顔を発見した。
「何をやっているのだ平井」
窓の外を見、たそがれているのは平井洋一だった。
相手は男なので飛びつかずに、普通に声をかける。
「あぁ、大す……誰だお前、いや、大輔か」
弁当箱のふちを唇で咥え、顔を隠した弁当箱仮面の正体を、奴は

一瞬で見抜いた。
ため息をついて、俺をまるで悩みのない能天気男を見るような目で見る。
「なんだ、青春の悩みはこのマスクザノリベンに打ち明けるが良いぞ」
マスクをはずして正体を明かす。　更にとっておきの爽やかスマイルを見せてやった。
「別に悩みなんかじゃないよ」
「嘘つけ、そんな顔するのは悩み多き中年サラリーマンか恋する乙女だ」
「その二つが同じ表情してるのは嫌だな」
気弱に笑った後、平井は悩みって訳じゃないんだけど、と前置きしてポツリと言った。
「ただ、片瀬さんが今日も休んだなって」
カポッ。　俺はマスクザノリベンに戻った。
「何でまた弁当箱被るの」
平井が突っ込むが、もちろん表情を隠すためだ。
変身をといたヒーローに不意打ちなど、こいつはどんな極悪怪人だよ。
胸の動悸が治まるのを確認して、俺は弁当箱を顔からはずした。
「まだ二日だろ？　心配しすぎだって」
我ながら、言葉通りの表情が出来たと思う。
……極悪怪人は俺のほうだな。
「うん、だと思うんだけど……最近物騒だし、部室も荒らされてたし」
「あんなのただのいたずらだって」
部室に関しては、実質やったのは俺だし。
「それに……」
「それに？」
「何か、言おうとして口篭ったんだ。　聞き返したんだけど、何で

もないって」
姫足が口篭るのなんていつもの事じゃないか。
いや、待てよ。言い返そうとして、ある可能性に気づく。
「お前らって、もしかして付き合ってた――じゃなくて、付き合ってる？」
過去形になりかけて、言い直す。しかしそれなら、こいつが彼女をやたら気にするのも分かる。
それなら俺が数分しか見ることができなかった、怯えない姫足というのを日常的に見ていても不思議は無い。
「ち、違うよ。そんなんじゃない」
慌てて否定するところが怪しい。
……俺は、平井と姫足が仲睦まじくしている所を想像した。すると、うん、なんだかイライラしてきたぞ。
俺だって姫足が好きなのだ。死亡五分前からだけど。
どれ、もっと苛めてやろう。俺がそんな風に薄汚く思っていると。
「ていうか」
平井の表情に、すっと影が差した。
「片瀬さんは、大輔と仲良くなりたがってた、みたいだった」
平井は顔を逸らし、呟いた。
こいつは演技が出来ないタイプだな。表情に悔しさがにじみ出ている。
……俺がさっき覚えた感情を平井はもっと強く、もっと前から感じていたのかもしれない。
「そっか、俺達ライバルだな」
「だ、だから違うって！」
俺が好敵手と認めてやると、平井は真っ赤な頬を更に赤くして否定した。
リンゴかお前は。
「大丈夫、きっと来週には出てくるって」

このセリフを言う際には、反吐が出ないように注意。
俺は舌の根っこ辺りまで来たそれを、胃袋の底に押し戻すのに苦労した。
「あぁ、うん……」
平井は、やはり納得しきっていない表情をしたが、一応は頷いた。
キンコンカンコンと、予鈴も鳴ったので、俺達はそれぞれの教室に帰る事にする。
平井と別れた直後、双子が頭の中で囁いた。
『演技なら大したものね』
『貴方も大したものだけど』
「うっせ」
チャイムに紛れ、俺は小さく悪態をついたが、双子にはしっかり聞こえていたらしい。
薄く笑われた。

オモイノチカラ

部活の後、俺はプールの更衣室の隣にある、準備室に居た。
スコアや備品が保管してある場所なのだが、俺の目的はそれではない。
「んーっと、無いな……」
屈み込んでダンボールを漁る俺。　この中はプールの落し物入れとなっていた。
俺が探しているのは、綾菜のハンカチである。　アレを落としたのはプールだと思っていたのだが、見つからない。
誰かが、拾ったのか？　考えてみれば、荒れたプールにハンカチなんて落ちていたら、犯人の遺留品と思うのが普通な気もする。
警察を呼んだとも聞いていないから、指紋が採られてどうこうだとは思わないが、何か後々厄介な事になりそうな予感がする。
俺が鬱々とした気分で、ダンボール底の、何年入っているのかも分からない旧型のゲーム機まで漁り終えた所で、双子が目の前にすっと現れた。
……こいつらの唐突さには、未だに慣れないな。
『そういえば、昨日蛇に体当たりされたけど』
『その後変わりない？』
「え？　あぁ、ぶつかったって言っても……顎と尻ぶつけたぐらいだし」
話題まで唐突だ。　何で今頃と思いつつも、俺は質問に答えた。
『本当ね？』
『どこもおかしいところはないわね？』
「尻……いや、口がぱっくり割れちゃいました」
『元々でしょ』
『くだらない自虐は置きなさい』
自分でもくだらないとは思うが、そうばっさりやられると凹む。

ったく、何の話だよ。　と、俺は視線で先を促した。
『化け物は自分だけじゃなく、その周囲の物理法則まで捻じ曲げるの』
『私達を見れば分かるでしょう？』
双子が喋っている間に立ち上がり、ドアについた窓から外を確かめる。
うん、誰もいない。
俺は改めて双子に向き直り、頷いた。
確かに双子は、俺以外には見えない。　ついでに皮がなければ触れない。　こんな奴ら見たら、世の中の物理学者が首を吊るだろう。
『言ったでしょう？　化け物は思い込んだ通りになっていく』
『あの化け物が、貴方に死ねと念じれば、ただの体当たりでも見た目以上に力を持つの』
「えーと……？」
『相手が毒を持ってる、みたいな認識で良いわ』
『殺意という名の毒。　触れただけで、それは貴方に入り込んで殺そうとするわ』
「どんどん、何でもアリになっていくな」
いや、違うか。　最初から何でもアリなのだ。　改めてひどい生き物だな……もちろん俺含めて。
「まぁ、別に変わりない」
双子に言われて思い返すが、特に体の不調を感じた出来事は無かった、はずだ。
『でもあいつがその毒を持っていても』
『貴方はぶつかったぐらいで死ぬはずがないって思っている』
『だから貴方はその思い込みで、自分を守れるの』
『貴方の中の常識って言い換えてもいいわ』
化け物が常識を振りかざして自分を守るというのも、滑稽な話だ。
まぁ、要するに俺は蛇と肉体的にぶつかった時、精神的にもバトルをしていたらしい。

むしろそちらの戦いの方が激しかったようだ。
「って、それ聞いたら次から無事でいられなくなりそうなんだけど」
双子が言う事が本当なら、俺はその毒とやらを意識してしまった所為で逆に今度蛇に触れられた時、大ダメージを負うかもしれない。
俺ってダメだダメだと思っていると本当にダメになるタイプだし。
俺が不安になり、おそらく余計にその毒とやらの効き目を高めていると。
『だから今聞いたのよ』
『貴方には、今日半日大丈夫だったっていう常識があるでしょ』
双子は呆れたような顔で俺を見ながら、そう言った。
「まぁ、そりゃそうだけど……」
曖昧な返事をする俺に、双子は眉根を寄せて珍しく真剣そうな顔をした。
『それより重要なことがあるわ』
『普通の人間は、その毒に抵抗できないの』
「え？」
『貴方の片割れが蛇にぶつかられただけで』
『死んでしまう可能性もあるって事』
理解が遅い俺に、双子はそう補足してから揃って鼻を鳴らす。
そうか、だからこいつらは今それを言ったのか。綾菜への危険を知らせる為に。
『どうせ守る気なんでしょう』
『占い師を』
「え、あぁ…」
口を尖らせつつこちらを見る双子に、俺は頷いた。
いくら占い師だからって、やはり俺は綾菜を見捨てることなんて出来ない。
だが双子には、乗り移り先である俺を弱体化させてまで綾菜を守る義理は無い訳で。
「ありがとうな」

俺は素直に礼を言った。　双子はそれに対して「アンタの為じゃないんだからね」などと定番な反応はせず、長くため息をつく。
『それに、貴方だって』
『まるきり大丈夫って訳じゃないのよ』
それどころか、俺の不安を更に増すような事をのたまうのだ。
『あのドリルが』
『きっと良い例になると思うわ』
「ドリルって、ミーヤのか？」
問うと、双子は揃って頷いた。
それから童謡でも歌うように交互に喋る。
『バラバラにされても復活するはずの蛇が、逃げた』
『アレには、きっと化け物に対する怨嗟がたっぷりと籠められている』
『絶対に殺す。　生きては返さないっていう類の』
『それは多分、蛇の脱皮で助かるという思い込みには敵わなかった。でも』
『ヒヤリとはさせたんでしょうね』
「だから逃げた、か」
『貴方も変に強気にならないで』
『小ずるく逃げ回りなさい』
「へいへい」
こいつらも、一応心配はしてくれているんだろうか。　確かめたら罵倒されそうだから聞かないでおくけど。
――と、そんな事を話していると、背にしていたドアがノックされた。
振り返ってガラス窓を見てみると、そこには笑顔の生首が。　もとい笑顔を窓から覗かせている三橋愛華がいた。
「ど、どうした三橋」
ドアを開けて彼女に応対する。
先程まで双子が喋り倒しだったし、俺も聞かれてまずい事は口に

出していないはずだ。　なのに胸が跳ねたのは恋以外のなんだろう。
「大輔さんのお姿が見えなかったので……どなたかとお話していましたか？」
「い、いや、ちょっと寸劇してただけだよ」
「そうですか……」
双子は三橋が途中で射抜くような視線をした所為か、俺の中へと戻っている。
三橋は失礼しますと言いつつ準備室に入ると、きょろきょろと左右を見回した。
「じゃ、じゃぁ俺はこれで」
「あ、待ってください」
俺が入れ替わりに部屋から出ようとすると、彼女に呼び止められる。
「あの、今度の特別メニュー、私なりに考えてきたんですが……」
「あ、そうなの？」
言いながら彼女はおずおずとノートを差し出した。
思わずそれを受け取ってしまい、俺はノートをパラパラとめくる。
「バタフライの選手に腰痛は付き物だそうです。　ですからフォームの改善と共に筋力トレーニングを並行して行きましょう」
ノートには、三橋の解説通り、筋トレの方法等が丁寧に書き込まれていた。
何となく彼女はノートにびっちり書き込む派だと思っていたのだが、意外にも図が貼り付けてあったり項目をページ毎に区切ってあったりで、読みやすい。
「凄いな、三橋」
「い、いえ、図書館の本やインターネットの記事をつまんだだけですから……」
「それを整理して自分なりに纏めてるのが凄いんだって」
「そそそんな事ありません！　私なんかより大輔さんのほうが凄いです！」

俺が褒めると、彼女は銃でも突きつけられたかのように、両手を宙に掲げそれと頭を激しく振った。
「は、何が？」
「だって、大輔さんはいつも明るくて、気遣いが上手くて、誰にでも優しいですから」
そのリアクションと言葉に唖然とした俺が聞き返すと、彼女は両手の指先を合わせ、それをぐにぐにと押し合いながら言葉を紡いだ。
『厭味かしら』
『皮肉かも』
双子が頭の中でそう囁く。
否定したい所だが、俺にもそう聞こえてしまう。俺の何処を見たらそうなるんだ。
例え俺がそう見えるとしても、それは正体を見破られない為に必死に繕った姿だし。
「それこそ、買いかぶりだと思うよ」
「いいんです。私にはそう見えるんですから」
少々硬い声を出してしまった俺に、三橋がはにかみながら笑った。
その笑顔に、ミーヤという彼女（偽）がいる身でありながら少し心動かされてしまう。
――と、そんな俺の軽薄さを諫めるように、ポケットの携帯がぶるぶると震えた。
取り出してみると、表示名マイラバー。件のミーヤからだ。
「どなたですか？」
「あ、ミ……綾菜」
三橋が小首を傾げたので、咄嗟にそう答える。
まぁ別に嘘って訳ではない。
すっかり頭から抜けていたが、俺は今日この二人と一緒に帰る事になっていたのだ。その催促だろうとメールを開く。
『綾奈さん怒っています。大輔早くしてください』
何故敬語。ていうかそれでも呼び捨てか。あと綾菜の字が地

味に間違ってる。
色々つっこみたいが、それより早く行った方が良さそうだ。
「ごめん、綾菜……が待ってるから行くわ。　あ、今日はありがとうな」
「いえ、お役に立てたなら、とっても嬉しいです」
ノートを彼女に返すと、三橋はそれを両手に抱いて目を細めた。
「また、明日学校でお会いしましょう」
こんなに喜んでくれるなら、これからはもうちょっとだけ、彼女の言うような優しい奴になろうかな。
彼女が犯人候補だという事も忘れ、俺はその時そんな事を考えた。

新たな扉

さてそれから、俺は綾奈とミーヤに謝り倒して一緒に帰宅した。
綾菜の家、という事でミーヤは初めはとても緊張している様子だった。
だが、現在綾菜はトイレに行っており、ミーヤは物珍しげに室内を見回している。
ソファーの隣に俺が座っているというのにむしろリラックスしているその様は、以前のように警戒モードに入っていないというだけマシなのだろうか。
本音は、もう二三歩近づきたいのだが、俺には今日決めた事が一つあった。
息を吸い、彼女が左右を向く度に何気に触れ合う太ももの感触を忘れるようにしながら、俺は彼女に話しかけた。
「ミーヤ」
「ナニ？」
俺と視線を合わせるミーヤ。　彼女は瞳の輝きまで美人だからズルい。
「恋人同士って嘘、やっぱり撤回しない？」
体の底で、それを惜しむ誰かさんがやめろバカと叫んでいる気はするが、もう決めたことだとそれを無視する。
「ドウシテ？」
俺の唐突な提案に、ミーヤが再度俺に問いかけた。　まぁ、ミーヤが疑問に思うのは分かる。言い出したのは俺だし、この関係を喜んでいたのは俺だけだったはずだ。
「ダイスケは、私と付き合ってると思われるの、イヤ……？」
と、思ったのだが、彼女は顔を俯かせ、ぽつりとそんな事を言い出す。
え、実はミーヤもこの関係続けたかったの？　そう思うと決心が

ぐらんぐらん揺れる。
「そういう訳じゃないよ。　ただ、これ以上あの蛇の好きにさせたくない」
だが俺は、決心のきっかけとなった平井との昼のやりとりを思い出し、持ち直した。
俺達がこうしている間にも蛇は人を食い、その周囲にまで悲しみを撒き散らす。
俺が、ミーヤがあの化け物と一線を画しているのはそれを行わないからであり、奴の殺人を見過ごすなら、その境界は危うくなってしまう。
俺がミーヤと恋人のふりをするというのは、綾菜を守る、そして自分達の正体を隠すための消極案だ。
しかし現状は綾菜が占い師であるという証拠は無いし、蛇があいつを狙っているという情報も無い。
ならば。
「だから、綾菜に本当の事を話さないか？」
綾菜に俺達の事を打ち明けてみて、彼女が占い師なら良し。
そうでないならちょっとした冗談だったと言って、調査に戻る。
それが事件解決への近道である気がした。
それに、俺は蛇にマークされている。
その俺が過剰に綾菜の傍にいた場合、あいつが狙われる可能性だってあるのだ。
俺の提案に、ミーヤはしばらく俯いていた。
彼女の言葉を促そうか。　俺がそう考え始めたところで、ミーヤが口を開く。
「本当は、怖い、ちょっと」
「怖いって、何が？」
「先輩が、占い師で、やっぱり私が、その、ミミックだって決定……判明……確定」
ミーヤは適切な言葉を見つけられず、しばらく言葉を捜していた

が、やがて諦めたのかため息をついた。
「私が化け物だって、そういう事になるのが、怖い」
彼女自身は、自らを化け物とは認めていない。　しかし、占い師の能力を疑う事は、組織の一員として許されない。
そんな葛藤があって、彼女は結局、言葉を曖昧に濁した。　のだと思う。
化け物だと判定されれば、きっとミーヤは組織には居られなくなるだろう。
だが、ミーヤにとっての恐怖はそんな事ではない。
彼女は多分、何か深刻な事情があって化け物を憎んでいる。　そう、俺は感じていた。
綾菜に化け物だと宣告されれば、彼女はそれを受け入れざるを得ないだろう。
そうなれば彼女は、雅はその憎しみを自らに向けなければならなくなる。
一番身近にいる化け物、自分自身を殺さなければならなくなる。
「それは……」
俺は、彼女を慰める言葉など持たなかった。
嘘をやめようと言っている俺自身が、ミーヤに大きな嘘をついているのだ。
「……やめておこうか？」
俺は、彼女に尋ねた。　ひどい偽善だと分かっていても、そうせざるをえなかった。
ミーヤはしばらく下唇を噛んで俯いていたが、やがて首を左右に振って俺に答えた。
「それで、先輩の危険が減るのなら、言う」
目は合わせず、俯いたままだったが、彼女の言葉には強い決意があった。
「そっか、ミーヤは良い子だな」
俺は思わず、ミーヤの頭に手を置いていた。　きしむ事無くさら

さらと流れる髪を、二度三度梳く。
それに身を任せるミーヤ。　かと思ったがただ唖然としていたらしい。
「ナ、ナ、ナァ！」
我に返ると、彼女は野生動物のごとく飛びのいた。
「いや、どうせだから最後に恋人らしい事しておこうと思って」
「モウ終ワリ！　終わったノ！」
笑って見せると、ミーヤはクッションを手に取り、俺をバシバシと叩いた。
しかしそれもミーヤが尻に敷いていた物なので、俺にとってはむしろ嬉しい。
そうやって俺達が最後のイチャつきを満喫していると、綾菜がトイレから戻ってきた。
ぱっとソファーの上で正座し直し、たたずまいを直すミーヤ。
微妙にジャパニーズソウル宿ってるんだよなぁ。　俺もそれに倣って座りなおす。
「どったの二人して」
腹をさする綾菜（おそらくでかいのが出たんだろう）が、俺達を不思議そうに見る。
俺達は顔を見合わせ、それから交互に口を開いた。
「実はワタシ達」
「結婚します」
バシバシバシバシ。　ミーヤが赤い顔をして、俺をクッションで何度も叩いた。
「それはちょっと早いかなー」
「ノ！　違うンです！　ワタシは狩人なんです！　コノッコノッ！」
俺を叩きながら、必死で弁明するミーヤ。
それを聞くと、綾菜が一瞬固まってから微笑んだ。
何だその反応。　もしかして意味が分からないのか？　などと俺が、叩かれながら綾菜の様子を見ていると。

「やっと言ってくれたね。　そう、私が占い師だよ」
彼女は、自分の口で確かにそう言った。
予想通りだというのに、俺もミーヤも固まり、言葉を失ってしまう。
「ご、ごめんね。　自分からは言い出しちゃいけないことになってて」
「いえ！　任務ならしょうがないデス！」
謝る綾菜に、ミーヤが首をぶんぶんと振った。　髪がばっさばっさと俺の顔を叩く。
だがそれも気にならないぐらい、俺は未だに信じられない気持ちでいっぱいだった。
俺の片割れ……俺が一応、まがりなりにも憧れ、真似してきた相手が占い師？
俺みたいな化け物を告発し、殺させる役目の……。
「あふん」
暗い瞳になりかけた俺を、綾菜の色気の無い素っ頓狂な声が引き戻した。
「な、なんだよ」
あ、ミーヤが目を見開いて頬を紅潮させてる。
「いや、ちょっとお尻に未知の感覚が……」
「痔じゃねーのか？」
「違うって。　あー、大輔ちょっとカッター取って」
言われるがまま、俺はペン立てからカッターを取り出し、綾菜に手渡した。
受け取った綾菜は立ち上がると、こちらに尻をむけソファーをペタペタと触る。
そうして、カッターの刃を出すとソファーを縦に切り裂いた。
「あ、お前何してんだよ！　それカーチャンが前の恋人に買って貰った奴で……」
「その話する度、お父さんが微妙な表情するから良いんだよ。　と、

あった」
　前の恋人との思い出のようにヘタれた綿と共に、綾菜がその中から何かを取り出す。
「何それ」
「盗聴器」
「……」
　綾菜の指には、黒いマッチ箱のような物が摘まれていた。
　それが、盗聴器？　ということは今までの会話が筒抜け？
　今綾菜とミーヤが、お互いに占い師と狩人だってカミングアウトしあったぞ？
　俺は綾菜の手から盗聴機を受け取り、床に叩きつけた。　更に足で念入りに潰す。
「やばいじゃねぇか！」
　状況を正しく把握し、俺は悲鳴を上げた。　こんな物仕掛けるのは蛇に決まっている。
　よりによって一番聞かれたくない所をピンポイントで聞かれてしまった。　俺の提案が完全に裏目に出た形である。
「ドウシヨウ……」
　先程まで綾菜の尻を見て赤い顔をしていたミーヤが、今は血の気を失っている。
　守るべき占い師を自らの行動で窮地に追い込んでしまったのだから、当然だろう。
「まぁまぁ、しょうがないって。　一致団結して事に当たっていこうよ」
　その彼女を綾菜が慰める。　お前の尻の感度がもう少し高ければ、とは俺も言わない。
　そうだ、たられば話をしてもしょうがない。　今は前向きに打開策を……。
「という訳で、大輔はお疲れ様」
　が、そんな決意をした俺の出鼻を、ケツのでかい綾菜がくじいた。

「え、いやちょっと待てよ！？」
「だって大輔は役立たずじゃん」
ばっさりと切り捨てられ、俺は言葉に詰まる。
ミーヤに言われた時は綾菜を理由に使ったが、本人の前でそれは通じないだろう。
「これから私ら、確実に狙われるし。　大輔だって危ないんだから」
綾菜はそう言うが、だからこそ、もっと放っておく訳にはいかないのだ。
何か、何か二人の為に俺ができることは無いか。　俺は必死で頭をひねった。
その末、一つの事を思いつく。　そしてそれをよく検討しないまま、口に出した。
「俺が影武者になる！　お前の」
綾菜を指差し、叫んだ俺に、綾菜とミーヤが固まる。
「えーと、大輔が女装して私の代わりになるって？」
「いくら双子でも、ダイスケと先輩じゃ……」
「いやいける！　去年の文化祭だって大丈夫だったし！」
内心この提案は無いと自分でも思ったが、もはや押し切るしかない。
それに俺には、自分の女装が通用すると確信する出来事があった。
あって欲しくないが、あった。
「あー、女装カフェね」
「ジョソウ、カフェ？」
「そう、去年私らのクラスは、女装カフェってのをやってね。　食事してるお客さんの所に、女装した男子が不意打ちに行って口のもの吐かせるって企画だったんだけど」
「ハァ……」
何が何やらという声を出すミヤビー。　誰だってそうだろう。
こいつがそんな企画を発案した時は、俺もそんなリアクションをした。

「まぁそんな抱腹絶倒の企画だったけど、大輔の時はノー笑いでした」
「ナゼ？」
ミーヤの疑問に、綾菜がニヤけた面をする。
「普通に綾菜だと思われたからだよ」
何か余計な事を言われる前に、俺が渋面でミーヤに答えた。
そう、俺はその女装カフェで、正体を知られること無く――というかやってきた他校生にナンパまでされながら最後まで女として過ごしたのだ。
「……ウソ？」
ミーヤはやはり、疑いの目をやめない。男性フェロモン漂う俺の雄姿ばかり見てきたせいだろうか。
これは、見せるしかあるまい。そう決意すると、なにやらメラメラと燃えてきた。
「ちょっと待ってろ！　女装一式部屋から取ってくるから！」
「アルンダ……」
更に俺への軽蔑の目を強めるミーヤ。
いや、普段から女装してる訳じゃなくて、去年のがあるだけだからね。
「それと綾菜。　制服貸して」
「いいけど大輔」
「ん？」
「スネ毛剃ってね」
「……分かった」
一応女装までは許可されたという事だろう。笑いものにされるだけで終わらないように、俺は気合を入れて変装することにした。
まずは風呂場に向かう。父の髭剃りを使ってスネ毛等をジョリジョリ。
一通り見えなそうな位置の毛までそり終えた俺は、自室に入ると綾菜が持ってきた女子用の制服に袖を通した。

何でも、協会の任務で破損した場合に備えて用意してあったのだと。……俺の知らない内に、あいつはそんな危険な事をしていたらしい。

喜んで良いのか複雑な所だが、サイズにも問題は無い。

『人が女装していくザマって』

『あまり見たくない光景ね』

双子が現れ、勝手に見ておいて勝手なことを言う。

「俺も、人生で十指に入る勢いで見せたくない」

言い返すと、化け物でしょと双子は同じように笑った。

「つうか、せっかく居間に鞄置いてきたのに」

『占い師と同じ部屋になんて』

『いられるかー』

俺が指摘すると、何の真似だか、今度は棒読みでそんな事をのたまう。

「そっか、そういや綾菜がどう占うか聞き損ねたな」

それを聞いて、俺はハッと思い出した。そうだ、あいつが占い師だなんて事実に打ちのめされた直後に盗聴器騒ぎで、具体的に占い師がなんなのか、綾菜に聞き損ねてしまった。

『良いんじゃない？』

『あそこで正体をバラされるよりは』

そんな俺に、揃って足を組んだ双子が無愛想な顔で答える。

あぁ、そうだ。綾菜は、まだ蛇の正体はその、占えていないようだ。

しかし俺についてはどうだろう。あいつは、奇行を繰り返す俺を一度でも疑う事がなかっただろうか？

もしや俺の正体は、既に綾菜に知られているんじゃないのか？

『スカートあげる途中で考え込まないで』

『不気味で仕方ないわ』

「だから見んなって！」

指摘され、俺は急いでスカートをあげた。ホックもちゃんと止

められる事を確認。
　去年使ったカツラを手に、鏡の前へと向かう。　一発ネタで買うにしては割と高かった物で、出来も無駄に良い。　意を決して、俺はその毛先まで精巧なカツラを被った。
　――そして、鏡に映る自らの姿を凝視する。
　うん、女の子には見えるだろう。
　自らの顔の間違った完成度の高さに、とても複雑な心境に陥る。
　だがこれで綾菜の代役ができるかと聞かれると、首を傾げざるを得ない。
　どうも何かが違うのだ。
　とりあえず、下品に見える口元を引き締めてっと。
　むにむにと、顔を揉みながら笑顔に近づけていく。　女の子っぽい表情、ひいては、綾菜っぽい表情へと……。
　そうしていると、なんだか不思議な感覚が沸いてくる。
　いくら偽者の面の皮とはいえ、揉んだからってそう簡単に形が変わる訳ではない。
　だが、その表皮に触れる指先の感触があやふやになり、指が沈み込むような、逆にまったく触れられていないような気になっていき、段々と現実感が薄れていく。
　そうして、やがてこの、今鏡の前にあるものが誰の顔なのか分からなくなっていく。
　俺という存在が引き伸ばされ、希釈され、別のもの、俺にそっくりで、しかしまったく違う生き物に練り直されていく。　そしてそれを、俺は心地良いと――。
『『やめておきなさい』』
　双子の声が、まるで水面に落とされた雫のように響いた。
　俺は、ハッと我に返る。
「あぶねぇ、なんか今新しい扉開きかけたよ」
　冗談めかして笑うが、俺の笑顔ってこんな感じだっけ？
　違和感が消えない。

『貴方は貴方』『双子の姉でも人間でもない』
「わぁってるよ」
分かっている。ずっと、多分心の底で期待して、裏切られてきたことだ。
今更間違えたりはしない。
『ちゃんと自覚しなさい？』
『そうじゃないと』
『『私達みたいになるわ』』
双子が、同時にニヤリと笑った。
笑えない冗談だった。

披露会

「どうよ」
「うわぁ、引く」
「そういう感想じゃねぇよ！」
「あー、引くぐらい似てるって事」
スカートを摘まみながら回って見せると、綾菜が感嘆半分、気持ち悪さ半分といった声を上げた。
ただし表情はどう見ても気持ち悪がっているので、まぁ大方はは気持ち悪がっていると思って良い。
「でも、去年より肩幅大きくなっちゃったかも」
せっかくなので、肩を抱いて切なげに体を捻ってやると、綾菜も似たようなポーズをとって悶えはじめた。
「ギャー！　やめてやめてやめて！　二の腕にサブイボと蕁麻疹でてきた！」
「ホホホ、それはＢＣＧの痕ではないかしら、お姉様」
「きょえー！」
奇声を上げ、ついにはのた打ち回り始めた綾菜を尻目に、俺はミーヤに微笑みかけた。
「これなら、お付き合いしてくださるかしら」
「え、あう……シ、しない！」
あれ、普段なら一蹴されるところが、ちょっと間があった。
「ちょっと脈アリ？」
「脈無イ！」
「それじゃ死んでるみたいだよ」
段々野生児みたいになってるな、この子。
一応ドキッとさせたみたいだし、俺の女装も捨てたもんじゃない訳だ。
「でも、声が思いっきり男子じゃん大輔」

ちょっと得意になっている俺に、綾菜が水を差す。
無粋な奴め。　しかし俺はお前が指摘してくるであろう事柄は既に想定済みだ。
俺は背後に置いた鞄をかかとでつつく。　それから背後に隠した指でカウントを取り、合図をした。　指を全部折りたたんだ所で口パク。
「「あーあーあー、テステステス」」
すると、背後の鞄から双子の肉声が響いた。　初日にこいつらに見せられたあの機能。　皮を喉に当て喋るという能力を利用したものだ。
「あら、立派な女声。　ちょっと舌ったらずだけど」
「デモ、ハウリングしてるような」
言いながらミーヤが、辺りをキョロキョロと見回す。
にゃろう双子ども。　片方ずつ喋れよと俺は再度鞄を蹴る。
「私、立島大輔」「女装大好き十七歳」
今度はきちんと交互に喋ったが、内容が誹謗中傷だ。　強く蹴りすぎた報復らしい。
案の定綾菜とミーヤが一歩引いた。
「いやいやいやいや、今のは冗談だから」
背後を睨んでから、急いでフォローする。
綾菜は距離を開けたままではあるが、大きく諦めのため息を吐いた。
日ごろの行いのおかげだろうか。　ともかく女声が出せるって事は伝わった、ようだ。
「じゃぁ買い物行こうか」
「買い物？　何でこの格好で外出なきゃいけないんだよ」
「下着がまだっしょ」
「そこまでさせるか！？」
すると今度は、別の無理難題を提案する。　やっぱり本気に取ったんじゃあるまいな。

「私のイメージに関わるし」
「トランクスだとはみ出したから、下は水着だぞ」
「何でそこまでスカート短くしてんの。ていうか水着も赤じゃん」
「お前赤だって持ってるだろ」
「柄は赤だけど、ベースはピンクじゃん」
「形際どいけどな」
「そうかな？　形は水色のやつの方がアブなくない？」
「ところでミーヤ鼻血大丈夫？」
「だ、大丈ふ」
意外と大丈夫じゃなかった。冗談のつもりだったのに。
鼻を押さえるミーヤに小首を傾げた後、綾菜が言葉を続ける。
「それはともかく、人ごみに紛れておいたほうが良いと思うのさ」
「まぁ、それはそうだな」
「盗聴器だって、一個とは限らないし」
「おう、真っ当な意見だ」
普段なら絶対にお断りなのだが、今回は女装自体がこいつを守る為のものである訳で。
一緒に買い物って言うぐらいだから、この格好なら同行を認めるということだろう。
「……分かったよ。その代わり外で誰かにバレたら」
コホンと咳をし、指を組み、さりげなく膝を曲げ、顎を引き、俺はミーヤに上目遣いの潤んだ視線を向ける。
「お嫁に貰ってね」
顔は綾菜にそっくりだ。これで落ちないミーヤはおるまい。
「ヤダ」
が、彼女は幼児のようにシンプルに答え、ミーヤは居間から出て行ってしまう。
仕方ないので横にいる綾菜に同じような笑顔を送る。
「一人で生きて」
こちらは、目も合わせずとっとと出て行ってしまった。

『私達も』『もらってはあげないわよ』
双子が出てき、人が提案もしていない話を却下する。
「期待してねーよ」
言い返すと、俺はスカートが翻るのも省みず、大股で二人を追いかけた。

源氏名

玄関を出ると、一応二人は外で待っていてくれていた。
それに感謝しながらミーヤを挟む形で二人に並ぶと、俺達は共に歩き出す。
「しっかしアレだね」
俺は首筋を撫でながら呟いた。
「首がスースーしてて落ち着かない」
「足が、ジャナイノ？」
じゃないの。ミーヤはつるつるになった俺の足を見ているのだが、そちらはあまり気にならない。
いや、慣れきってるって訳じゃ、決して無いが。
それ以上に首に何も巻いていないのが落ち着かない。
そりゃマフラーを巻いていたらそこらの偽ヒーローより判別が容易になってしまうし、仕方が無いのだが。
例えば、幼児がタオルケットを手放せないのと一緒だ。
俺の場合、寝る時には首まで布団を被らないと落ち着けないし、不安になると首元や口の周りをさする。
我ながら情けないとは思うのだが、こればかりは直せない。
「さて、どこ行こう」
「考えてねーのかよ」
先行して歩く綾菜がそんなことを言い出す。
あまりにも迷いの無い歩き様だったから、どこか目的地があると思っていたのだが、まるでそんなことは無かったらしい。
「ヨスコいこっか。近いし」
ヨスコ――俺らの自宅と学校の中間点辺りにある、総合デパートだ。
五階建ての建物で、一階の食品売り場を初めとし、アクセサリ、工具、インテリア、雑貨などなど、ここにいけば大体のものは手に

入る。
今はほとんど見かけない、屋上遊園地も完備。一階のクレープが人気であり、それにパクつきながら店内を回るのがうちの生徒の嗜みとなっている。
まぁ要するに。
「知り合い御用達じゃねーか！」
類似形の顔をしている双子に姉に向かって、俺は叫んだ。
この格好を知り合いに見られるのは、非常に勘弁願いたい。
「大輔が、往来で女装する変態さんだってバレちゃうね」
「その、安いエロ漫画みたいな言い回しやめれ」
にしし と笑う綾菜に、俺はジト目で返す。
まったく、どこで覚えてきたのかねぇこの子は。勝手に持ってかれたエロ本には、書かれていなかったと思うのだが。
と、横を歩いているミーヤが俺の袖をくいっと引っ張った。
「ダイスケ、声」
「あー、アレ疲れるからやめるよ」
その仕草に少々キュンとしながら、俺は答えた。
やってみて分かったが、あんなもん続けていられないし、あいつらに勝手に喋らせるというのがどれだけ危険かもさっき身をもって味わった。
「むぅ、声だけなら可愛かったノニ」
「……ミーヤ、あくまでうちの姉を先輩として尊敬してるだけだよね？」
狩人に褒められても、双子は喜ぶまい。
俺はミーヤが愛してくれるなら、股間以外は改造する準備があるけどさ。
「ダイスケは嫌い」
何を感じ取ったのか。ミーヤは口を尖らせながらそっぽを向いた。
はいはい、分かってますよお嬢様。

内心でため息をつきながら、俺は苦笑いをした。

――さて、話しているうちに、俺達はヨスコへとたどり着いた。
俺の願いは届かなかったようで、中はサラリーマンやら小学生やら俺らと同じ学校の高校生やらで溢れかえっている。
まぁ、綾菜達やデパートとしては、嬉しい事だろう。
俺はといえば、全員の視線がこちらを向いているようで気が気でない。
「ほら、大輔。恍惚としてないで中入るよ」
「……これならいっそ、真性マゾになりたいわ」
促された俺は、ため息をつきながら後に続――こうとしてもう一つ思い出した。
「つうか店内で名前呼ぶのやめろよ。バレバレじゃん」
「どうせ会話を聞かれれば、どっちが大輔かモロバレだと思うよ」
「いや、せめてそこらの人にオカマだと思われたくない」
そもそも俺は、どっかで二人並んで蛇に二択迫れるような状況を想定していたのだ。
こうなってしまっては、女装も羞恥プレイ以外の意味をほとんど持たない。
「じゃぁ久しぶりに源氏名使おうか」
「うげ」
「ゲンジナ？」
「大輔が、昔々女装してた時に使ってた名前だよ」
「お前がさせてたんだろうが」
ミーヤには昨日話した、他の人間と打ち解ける為の特訓。その名残である。
それは女装して知らない女の子をナンパするという内容の物だったが、その時俺は仮の女性名を持っていた。
「アー、偽名のようなモノ？」

「そんな感じ」
そもそも、ミーヤには源氏名の意味が分からなかったらしい。
細かいニュアンスが伝わってしまうと俺の評判は余りよろしくない方に行きそうなので、ほっと一安心だ。
「じゃ、これから大輔はリンちゃんね」
綾菜が悪戯に、ニヤリと笑う。
「あぁ、懐かしい名前だ……なっ」
大輔の輔を車輪の輪と書き間違えた事が発端の名前だ。
その名を聞き、俺が苦笑しようとした途端、脳の真ん中に辞書の角を落とされたような鈍い衝撃が走った。
思わず額を押さえるが、違う、実際に殴られたわけじゃない。
そしてその痛みも、一瞬で消え去る。　代わりに、荒い心臓の動悸が耳にまで響いてきた。　膝が震えている。
立っていられずに、俺は柱に寄りかかった。
どうしたんだ、俺の体。　なんだ、何で、何が起こってるんだ。
おかしいのは中身だけで充分だぞ。　落ち着け、落ち着くんだ。
「ダ、ダイスケ？」
「……大丈夫？」
膜を一枚隔てたようにして、遠くから二人の声が聞こえてくる。
耳の火照りと共に、その膜が薄れていき、ようやく体が元に戻ってきた。
「いや、平、気……」
そう答え、顔を上げた。
心配そうな二人の顔。　と、綾菜の表情に一瞬別のものが走った、気がした。
そしてそれが、とても不吉なものだと俺は感じる。
疲れているのかもしれない。　もしくは女装外出という行為は、本人が思う以上に精神力を削るのか。
頭を振り、ひとまずそれらを脇に置いた俺は笑顔を作った。
「で、何買うんだ？」

その表情で問いかけると、綾菜の影は消え、一転笑顔を浮かべた。
「まずはクレープっしょ」
あぁ、やっぱり何かある。　今度はアイツの取り繕った態度でそれが分かってしまう。
ミーヤも違和感を覚えたようで俺達の顔を見比べる。
「いこ、ミーヤ。　アンタも早く、りのん」
だが、結局彼女は綾菜に手を引っ張られていった。
何だ最後のちょっとイタい名前は。　どういう漢字変換するんだ。
……アイツが俺の呼び方を変えたのは、きっとそれが俺の頭痛の原因だと悟ったからだ。
あいつは、何故こんな事が起こるのかを知っている。
綾菜は占い師だ。　しかし、他にも隠し事があるのではないか、その時俺はそう感じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8707z/

ミミック・コミュニケーション

2012年1月10日04時45分発行